平成 25 年度 都市農村共生・対流総合対策交付金共生・対流促進計画

大学・企業研修等の推進事業 報告書

平成 26 年 3 月 28 日

株式会社JTBコーポレートセールス

目　次

◆事業の概要 ---------- 3

第1章　交流に関わる実態の把握

第1節　交流に関わる動向と実態の把握に向けて

１．農山漁村と企業・大学等の交流の実態把握に向けて ---------- 6

２．都市と農山漁村の交流活動について（資料・文献等の分析調査の結果）

（１）農山漁村における都市との交流の背景 ---------- 7

（２）農山漁村と都市との交流動向 ---------- 9

（３）農山漁村と企業との交流事例 ---------- 17

第2節　アンケート調査に見る大学･企業研修等との交流活動の状況

１．アンケート調査の実施

（１）アンケート調査の概要 ---------- 23

（２）アンケート調査の結果のとりまとめについて ---------- 25

２．受け入れる農山漁村から見た交流の状況

（１）学校の受入状況 ---------- 26

（２）都市部の生活者に対する取り組み（ファミリー、グループ、個人など） ---------- 28

（３）企業・大学・団体等に対する取り組み ---------- 29

３．企業・団体や大学等から見た交流の状況

（１）農山漁村との交流の状況 ---------- 31

（２）農山漁村の選択理由と活動 ---------- 32

４．企業・団体や大学等と農山漁村の交流活動の現状について ---------- 33

第2章　農山漁村と企業･大学等の交流意識について

第1節　農山漁村における大学･企業等の交流意識

１．農山漁村における企業・大学等との交流活動に対する意識 ---------- 35

２．農都交流プロジェクトに対する評価 ---------- 36

３．交流のための資源と提供プログラム ---------- 37

４．交流活動を進める上での問題点・課題 ---------- 38

第2節　企業･大学等における農山漁村との交流意識

１．農山漁村の有する地域資源の魅力度 ---------- 39

２．農山漁村で体験してみたいプログラム ---------- 40

３．人材育成や研修等における重視点と利用できそうなプログラム ---------- 41

４．農山漁村での研修活動等に対する意識 ---------- 42

５．農山漁村との交流を進める上での問題・課題 ---------- 43

第 3 章　相互交流を促進するための方法の検討

第 1 節　モデルプログラムの開発とモニターツアーの実施

1．開発及び実施に向けた準備活動 ---------- 47

2．モデルプログラムの開発 ---------- 48

3．モニターツアーの実施

（1）福島県昭和村でのモニターツアーの実施 ---------- 50

（2）山形県川西町でのモニターツアーの実施 ---------- 62

（3）千葉県館山市でのモニターツアーの実施 ---------- 80

第 2 節　相互交流を促すための情報発信と情報共有活動

1．全国セミナーの開催

（1）第 1 回セミナー ---------- 91

（2）第 2 回セミナー ---------- 109

2．ワークショップの実施 ---------- 125

第 4 章　今後の交流促進に向けて ---------- 137

参考資料

1．大都市部との交流活動に関するアンケート調査報告書

2．農山漁村との交流活動に関する企業・大学等調査報告書

3．ワークショップ資料

4．第 1 回セミナーレジュメ

5．第 2 回セミナーレジュメ及び資料

◆業務の概要

（１）業務の目的

調査等を通じて農山漁村地域と都市部の企業・大学等との共生・対流の推進に向けて、双方のニーズ・課題や動向を明らかにする。さらに調査結果等をふまえたモデルプログラムを開発し、「モニターツアー」を試行的に実施。各種の検証を行いつつ、都市農村交流促進のための方向性や方策を明らかにしていく。

あわせて、全国の農山漁村や企業等を対象としたセミナーやワークショップ、情報発信活動を展開し、「農都交流」への関心・理解を高めつつ、交流の創出・拡大に向けた環境整備や具体的なマッチング形成の機運を高めていく。

（２）実施業務の概要

①企業・大学等と農山漁村の交流に関わる各種調査及び分析

１）都市と農山漁村の交流の事例及び動向等の収集・分析（資料文献等分析）
２）都市との交流や受け入れに関するアンケート調査（全国の農山漁村地域対象）
３）農山村との交流についてのアンケート調査（首都圏等の都市型企業対象）

②相互交流を促進するための方法の検討

１）「農都交流」に関するセミナー、ワークショップ（勉強会・研修会）の開催
２）個別調査・コンサルタント活動によるモデルプログラムの作成（３地域）
３）モデルプログラムを実証するモニターツアーの実施（３地域）
４）「農都交流」の拡大・推進に向けた方針や提言案の検討

（３）業務の実施時期

平成 25 年 7 月～平成 26 年 3 月

※「農都交流」について

都市と農山漁村の交流は、都市と農山漁村それぞれに住む人々がお互いの地域の魅力を分かち合い理解を深めるために必要な取組であり、農林水産省の施策として進められている。

「農都交流プロジェクト」は、都市型企業・組織が、農山漁村地域で研修等を実施することを契機として、農山漁村地域と都市型企業・組織双方が抱える様々な課題を解決する、都市と農村漁村の交流の新しいスタイルである。

【本報告書に関する問い合わせ先】

株式会社JTBコーポレートセールス 営業推進本部　（担当） 石川 智康、脇田 憲司
〒163-1065 東京都新宿区西新宿３－７－１　新宿パークタワー26階
TEL：03-5909-8439　FAX：03-5909-8445

第１章

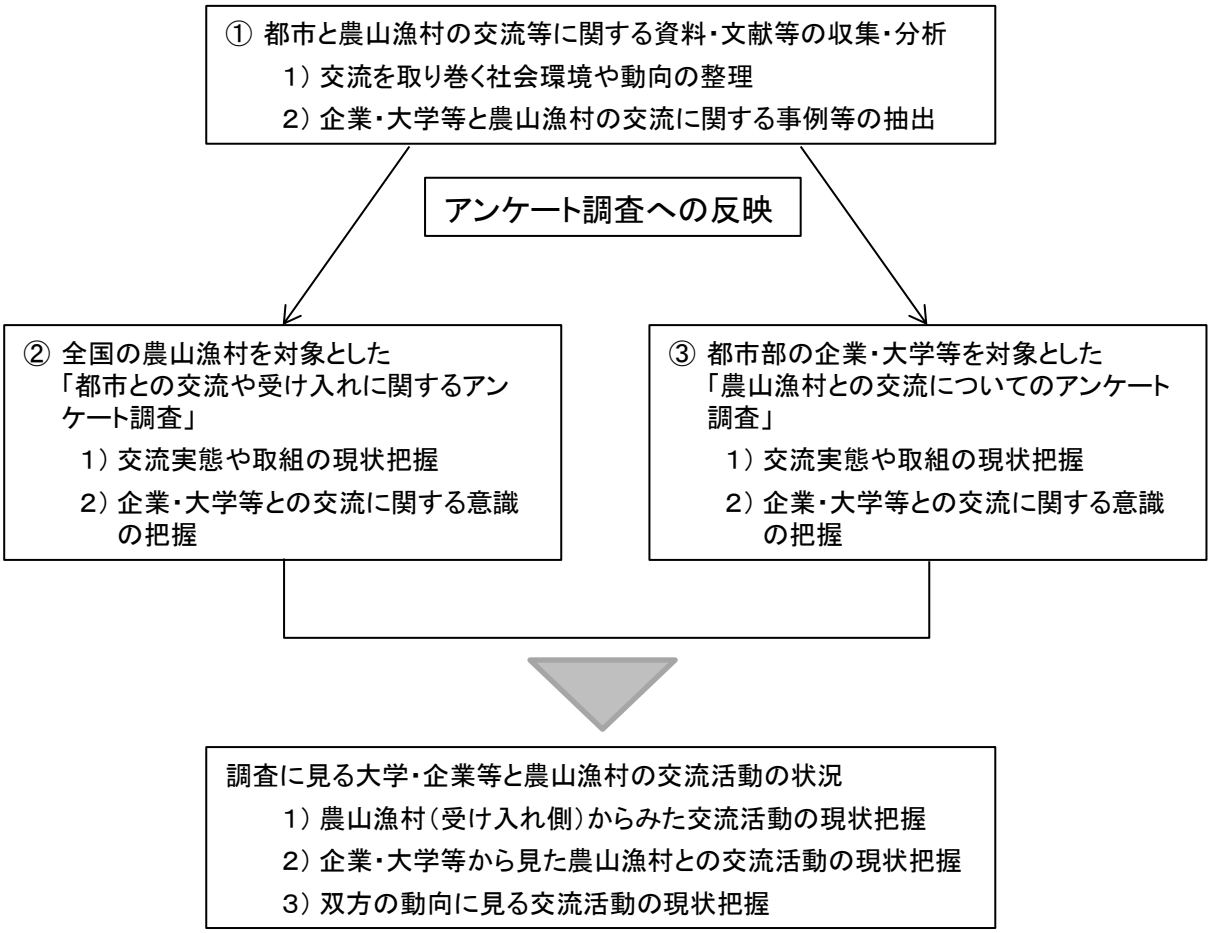
交流に関わる実態の把握

第1節　交流に関わる動向と実態の把握に向けて

1. 農山漁村と企業・大学等の交流の実態把握に向けて

全国の農山漁村では、グリーン・ツーリズムの推進などによって周辺市町村や大都市の学校等との連携・交流活動を推進し、地域活性化や経済効果に取り組んでいる。学校教育だけではなく、都市部のファミリー層や女性グループ、個人などの生活者を大賞に、収穫体験や味覚狩り、地域の文化や食体験などのプログラムを提供し、観光・レジャー客の誘致に取り組んでいる地域も多い。

しかし、本事業のテーマである「企業・大学等との交流」については、その実態に関する情報や統計が少なく、現状や取組があまり明確になっていない。そこで本事業では、実態の把握に向けて、次のような方法でアプローチを試みた。



2. 都市と農山漁村の交流活動について（資料・文献等の分析調査の結果）

（1）農山漁村における都市との交流の背景

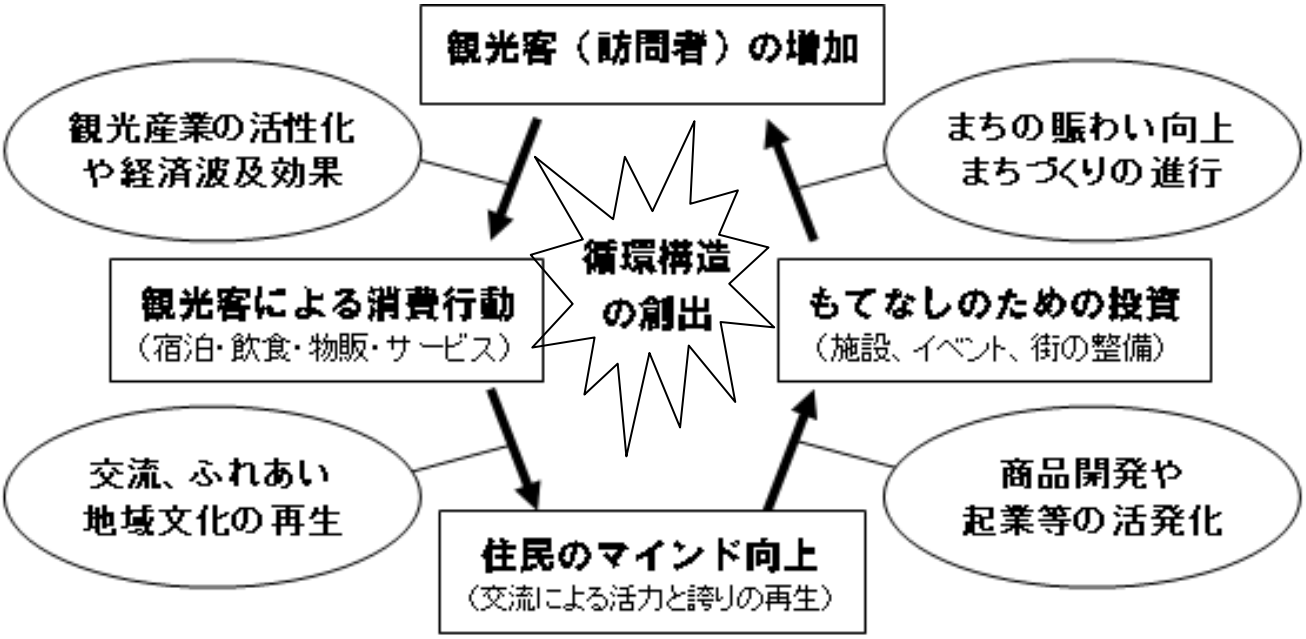
①地域活性化手法としての「観光・交流」活動への注目の高まり

観光や交流は、人の移動や観光・交流行動に伴い、まちに賑わいを生み、また消費行動（宿泊、飲食、買物、各種サービスの利用等）によって、地域経済を活性化する。さらに観光関連産業だけでなく、農業や食材関連産業や施設の整備等の他産業への経済波及効果を持つことから、大きな注目を集めている。

〔観光・交流の地域活性化効果〕

観光客（訪問者）の増加は消費行動や交流活動の活発化を促し、幅広い地域産業に経済効果をもたらす。また住民には交流による活力や地域への誇りを再生する効果をもたらす。

そうした効果は相乗効果を生み出し、循環することで、さらに多くの観光客が訪れる魅力あるまちになっていく。



②地域活性化への効果が期待できる市場

日本の旅行市場は22.4兆円（2011年）の大きな市場であり、さらに生産波及効果が46.4兆円、雇用創出効果が397万人と推計されている。こうした経済効果等に着目して、地域経済の活性化や地域づくりへの活用を図ろうとする動きが全国で高まっている。

<日本の旅行市場（2011年）>

国内旅行		海外旅行		全　体
宿泊旅行	日帰り旅行	日本人の海外旅行	訪日外国人旅行	
15.1兆円（67.5%）	4.9兆円（22.1%）	1.3兆円（5.9%）	1兆円（4.5%）	22.4兆円

※金額の合計は四捨五入の関係で22.4兆円とならない

（観光庁「旅行・観光消費動向調査」）

③最近の観光のトレンドと農山漁村

最近の観光のトレンドは、「名所旧跡観光から体験・交流型観光」へとシフトしつつあり、また団体旅行から個人旅行への流れが強まるとともに目的の多様化等も進んでいる。こうした動向に対応して、観光名所や観光施設を訪ねる従来の「観光」ではなく、「交流」をキーワードにしたツアーの開発・造成が活発化している。

これとともに従来の観光業ではなく、農林水産業者や地域のＮＰＯ、また地域協議会（幅広い事業分野の関係者による連携組織）等が主体となって、体験・交流型の滞在プログラムを開発し、ツアーを受け入れるという動きがひろがっている。全国の農山漁村で取り組みが増えているグリーン・ツーリズムはその代表的な取り組みの例であり、地域（住民）自らが交流活動の主役となって受け入れを行っている。

先に述べた地域活性化効果や経済効果への期待もあって、農山漁村地域における観光・交流活動への取り組みは今後も拡大するものと考えられる。

【日本の観光のトレンド変化】

1）「観光」の変化

・1990年代以降の経済社会環境の変化や国民の価値観の変化・多様化とともに、日本人の観光意識や行動も以下のように変化しつつあるとされている。（下記「参考」を参照）

団体旅行→個人旅行、周遊型→滞在型、名所旧跡→体験・交流、懐石料理→郷土食

2）体験型観光による競争の激化

・ いわゆる観光地でなくても、地域の資源を活かすことで魅力ある体験や地元の人たちとの交流を提供できる点で、全国で「交流体験型観光」への取り組みが活発化している。

3）新しい「体験」や「交流」を提案・提供するツーリズムへの注目

・ グリーン・ツーリズム、エコ・ツーリズム、フード・ツーリズム、健康ツーリズム、スポーツ・ツーリズム、ボランティア・ツーリズム、復興ツーリズムなどの、新しいスタイルのツーリズム（ニューツーリズム）が活発化している。

4）企業と地方の「相互補完型」連携

・ また企業などでは、研修活動に自然体験や農業体験などを取り入れる動きや社会貢献活動（ＣＳＲ）として、農山村との連携・交流を進めようとする動きもみられる。

5）観光・交流と連携した農林業の高次産業化

・ 最近の大きな動きとして、農業を観光と結び付けて、「農業体験（農作業、収穫体験」や「農家レストラン」、「土産品開発〈農産物加工品〉」など、相乗効果を生み出す動きが注目されている（1次産業×2次産業×3次産業＝６次産業化）。

6）外国人をターゲットとした「インバウンド戦略」の活発化

・ 国を挙げて外国人旅行者の拡大に向けた取り組みが展開されており、全国の自治体でもそれに対応する環境整備やプログラム開発等が活発化している。在日外国人を含めて、今後外国人旅行者市場への取り組みが期待・注目されている。

（参考）日本旅行業協会（JATA）の「新時代の旅行業の役割」（2004年）に見る国内旅行の変化

日本旅行業協会では2004年に公表した「新時代の旅行業の役割」において、日本の旅行市場の変化をとらえて今後の観光について次のようにまとめている。（一部抜粋）

・観光の形態が、団体旅行から個人旅行へ、周遊型から滞在型に変化しつつある中で、個々の観光客の主体性を尊重して、学びや癒しや遊びなど、それぞれなりの楽しみ方を可能にする新しい観光スタイルの開発が求められる。

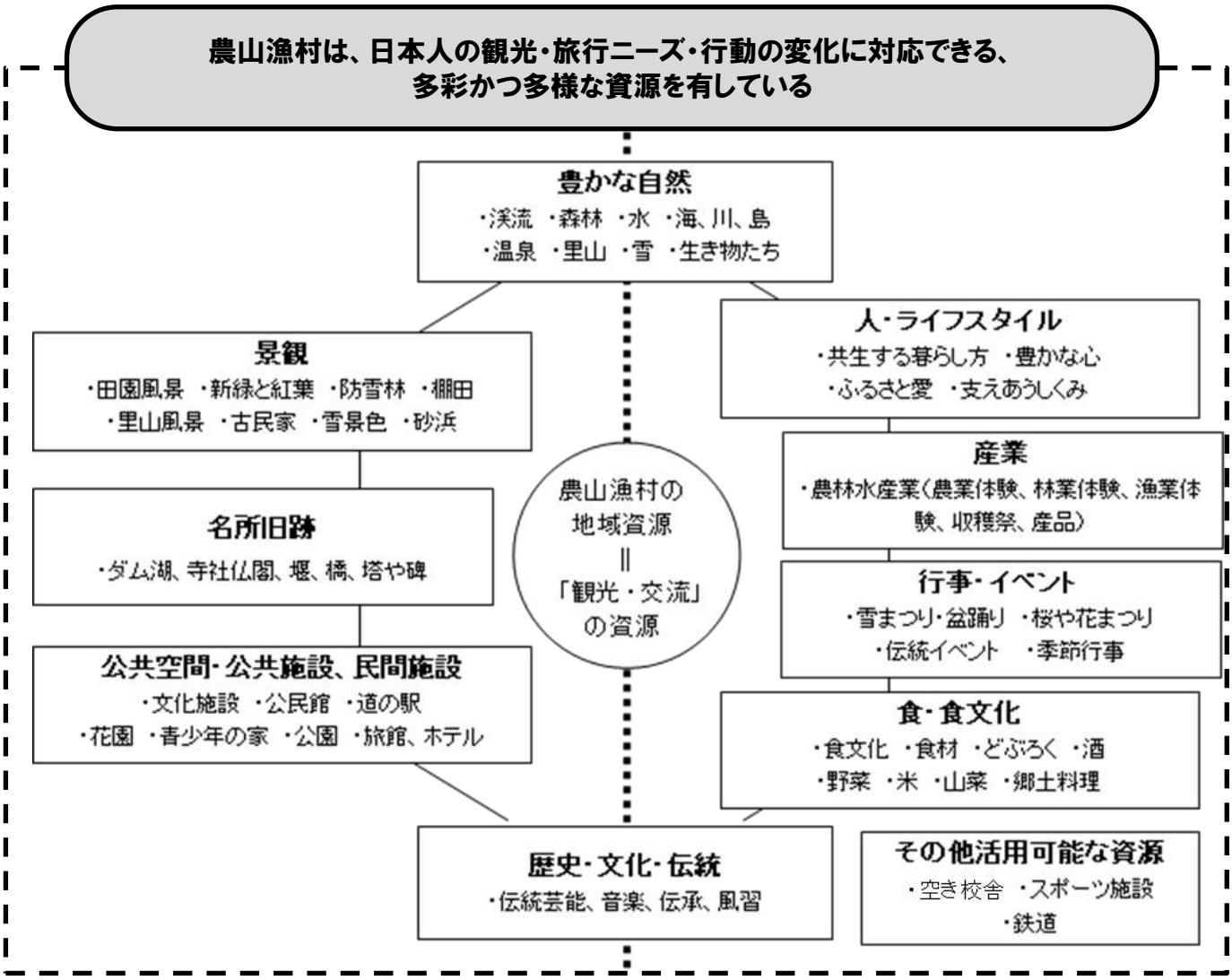
・自然や景観、温泉などを売り物とする国内の観光地の多くは、農山漁村に立地し、それらの地域では過疎化、高齢化が大きな問題となっている。観光は、ともすれば地域内にこもりきりになりがちな住民と、観光によって地域を訪れる都市住民との交流の機会として期待されている。

・農山漁村や活力の低下している地方都市において、地域外からの観光客が増加することは、生活・経済の両面において地域の活性化につながる。政府も「住んでよし、訪れてよし」のまちづくりをスローガンに、観光振興を基軸にした地域づくり、歩いて楽しめるまちづくりを提唱している。

（2）農山漁村と都市との交流動向

①農山漁村の交流資源

各種文献や資料等から、農山漁村における交流資源（観光・交流活動に活用している地域資源）として、次のようなものがあげられる。それぞれの地域では、こうした資源の中で活用できる資源（強み）を活かして特色ある活動を目指している。



都市との交流や「農観連携」による農山漁村の活性化

・地域外の人たちとの交流により、生活面（にぎわい）や経済面での活性化が図れる。
・都市の生活者との交流によって農林水産業の高度化（6次産業化）が推進される。

②都市と農村の主な交流事例

1)「農山漁村活性化優良事例集(2010年度)」に見る交流事例

「農山漁村活性化事例集」（財団法人農村開発企画委員会）から、都市農村交流の事例を整理したのが下表である。全国の農山漁村で多様な交流活動が行われているが、大別すると次のようなタイプに分類できる。

ア．学校教育を中心としたグリーン・ツーリズム（農山漁村体験、自然・環境学習）

イ．都市部のファミリーや個人・グループを対象とする観光・レジャー（味覚狩り、収穫体験）

ウ．企業や大学等と連携したCSR活動や研修、地域活性化活動等

エ．その他「復興支援」や「地域支援」、「特産品開発」等の特定テーマによる交流活動

事例をみると、ア及びイの活動は活発に行われているが、ウの企業・大学等との交流活動はあまり多くない。

※　「企業・大学等の交流活動」は、組織として農山漁村を訪れて、一過性ではなく継続的・定期的に交流活動を行っている事例を指す。

〔主な交流事例〕

＜具体事例 農林水産省 立ち上がる農山漁村 農山漁村活性化優良事例集2010年度版＞

No.	都道府県・市町村	選定年度	取組分野	活動主体	取組の名称
1	北海道黒松内町	H16年度	交流	黒松内町	北限のブナ林をシンボルとした里づくり
2	北海道小清水町	H16年度	交流	(有)シナジーこしみず	ゆり農家と地域住民の連携による地域おこし
3	山形県金山町	H16年度	交流	NPO法人 四季の学校・谷口	廃校を利用した農業農村体験
4	栃木県茂木町	H16年度	交流	農事組合法人 そばの里まぎの	そばのオーナー制度による地域おこし
5	群馬県みなかみ町	H16年度	交流	新治農村公園公社	リゾート型農業への挑戦
6	長野県松本市	H16年度	交流	松本市(旧:四賀村)	全国に先駆けたクラインガルテン(滞在型市民農園)
7	静岡県南伊豆町	H16年度	交流	妻良観光協会	漁家民宿での漁業体験学習旅行
8	福井県おおい町	H16年度	交流	第三セクター (株)名田庄商会	特産品の販売による村おこし
9	愛知県安城市	H16年度	交流	水土里ネット明治用水	農業水利施設を活用した地域住民との交流
10	三重県熊野市	H16年度	交流	丸山千枚田保存会	千枚田保全活動を通じた都市農村交流
11	京都府南丹市	H16年度	交流	美山町振興会	茅葺き民家を活用した日本一の田舎づくり
12	北海道置戸町	H17年度	交流、新産業の創出	置戸町	オケクラフト生産・作り手養成活動
13	山形県小国町	H17年度	交流、新産業の創出	小国町	地域資源を活用した山村総合産業の創出
14	千葉県鴨川市	H17年度	交流	NPO法人 大山千枚田保存会	千枚田保全活動を通じた都市農村交流
15	長野県小谷村	H17年度	交流	中谷郷が元気になる会	地域資源最大限活用による都市農村交流
16	愛知県豊田市	H17年度	交流、バイオマス	豊田・加茂 菜の花プロジェクト	食品副産物と遊休地を利用して農業の活性化を図る
17	北海道根室市	H18年度	交流	酪農家集団AB－MOBIT	「都市と農村交流」－最東端の街から日本初のフットパスを－
18	青森県平川市	H18年度	交流、知的財産権	NPO法人 尾上蔵保存利活用促進会	農家蔵の保存利活用とグリーン・ツーリズム
19	青森県鰺ヶ沢町	H18年度	交流	NPO法人 白神自然学校ーツ森校	都市と農村の交流－杉並区の子供たちの自然体験塾
20	岩手県住田町	H18年度	交流、バイオマス・リサイクル	岩手県住田町	森林・林業日本一の町づくり
21	宮城県南三陸町	H18年度	交流	旧林際小学校運営事業組合	廃校を利用したグリーン・ツーリズムによる地域活性化
22	山形県金山町	H18年度	交流	共生のむら すぎさわ	都市との交流による山村の活性化
23	栃木県茂木町	H18年度	交流	竹原郷づくり協議会	新やすらぎ空間「かぐや姫の郷」
24	新潟県上越市	H18年度	食、交流、知的財産権	農事組合法人 雪太郎の郷	特産の大根づくりに「女、男共同参加」で集落活性化
25	新潟県佐渡市	H18年度	交流	南佐渡海洋公園管理組合	海の多角的活用＝交流人口増加で漁村を元気に
26	山梨県北杜市	H18年度	交流	NPO法人 えがおつなげて	都市と農村の多面的交流による農村の活性化
27	長野県飯山市	H18年度	交流	一般社団法人信州いいやま観光局 なべくら高原・森の家	グリーン・ツーリズムに端を発した地域資源活用の取組
28	長野県泰阜村	H18年度	交流	グリーンウッド自然体験教育センター	泰阜村の自然環境を生かした体験学習事業
29	岐阜県郡上市	H18年度	交流、他産業の参入、女性・若者の力	郡上八幡・山と川の学校	小学生を対象にした自然体験・農山村体験「冒険キッズ」
30	三重県多気町	H18年度	交流	水土里ネット立梅用水	心豊かな里づくりによる都市住民との交流
31	和歌山県那智勝浦町	H18年度	交流	色川地域振興推進委員会	定住希望者に対する支援活動等
32	広島県世羅町	H18年度	交流	世羅高原6次産業ネットワーク	6次産業が突破口広域連携による「せら夢高原」の活性化
33	山口県山口市	H18年度	女性・若者の力、交流	NPO法人 学生耕作隊	若者とシニアが広げる農業・農村の活性化!!
34	徳島県美波町	H18年度	交流	伊座利の未来を考える推進協議会	都市との交流を通して学校と地域の灯火を守る
35	高知県四万十町	H18年度	食、交流	(株)四万十ドラマ	四万十川の天然素材を活かした商品開発で地域の活性化

No.	都道府県・市町村	選定年度	取組分野	活動主体	取組の名称
40	北海道根室市	H19年度	交流、女性・若者の力、知的財産	歯舞地区マリンビジョン協議会	歯舞地区マリンビジョン～最東端の海からのメッセージ～
41	北海道根室市	H19年度	交流、女性・若者の力	落石地区マリンビジョン協議会	落石地区マリンビジョン（独自の自然環境・景観と共生した漁業と暮らしの再構築）
42	北海道富良野市	H19年度	交流	麓郷振興会	朝望大麓 夕眺芦別 是桃源郷（東の大麓山、西の芦別岳を眺望する麓郷は、理想郷のまさに桃源郷である）
43	北海道福島町	H19年度	交流	北海道 福島町	福島地域マリンビジョン「海峡（うみ）の横綱を目指して～ステップアップ福島」
44	北海道寿都町	H19年度	交流	北海道 寿都町	水産業と漁村を中心とした地域振興の取組（寿都地域マリンビジョン）
45	青森県八戸市	H19年度	交流	三八地域県産材で家を建てる会	異業種間連携による地域材利用拡大の取組
46	山形県川西町	H19年度	交流	東沢地区協働のまちづくり推進会議	山村留学の実施と交流をベースにした米の販売提供
47	群馬県富岡市	H19年度	交流	甘楽富岡蚕桑研究会	養蚕文化の継承
48	神奈川県南足柄市	H19年度	交流、知的財産	あしがら花紀行千津島地区実行委員会	四季折々に咲く花による地域おこし「あしがら花紀行」の先駆団体
49	石川県羽咋市	H19年度	交流	羽咋市	自立・自活する山村集落づくり「山彦計画」
50	岐阜県恵那市	H19年度	交流、女性・若者の力	(株)山岡のおばあちゃん市	都市と農山漁村の交流 ゆとりとやすらぎ・食育の提供
51	岐阜県下呂市	H19年度	交流	馬瀬地方自然公園づくり委員会	質の高い馬瀬の自然を遺して、個性ある地域を目指す
52	静岡県松崎町	H19年度	交流	石部地区棚田保全推進委員会	棚田復元によるグリーンツーリズムの展開
53	愛知県豊田市	H19年度	交流	三州足助屋敷	里山あすけの暮らしと手仕事 保存と継承
54	三重県いなべ市	H19年度	交流、バイオマス・リサイクル、食	三重県 いなべ市	スローな公共事業の実践「いなべ市農業公園」
55	大阪府田尻町	H19年度	交流	田尻漁業協同組合	田尻海洋交流センター事業－関空対岸での観光事業、日曜朝市、マリンレジャーとの共存－
56	兵庫県丹波市	H19年度	交流	東芦田まちづくり協議会	田舎の力こぶプロジェクト－米・果物づくり・里山体験、間伐材利用、茅葺き民家の保護－
57	和歌山県白浜町	H19年度	交流	大好き日置川の会	体験型観光「ほんまもん体験」の振興－農林漁業・農産加工体験、世界遺産「熊野古道」巡り－
58	鳥取県江府町	H19年度	交流	貝田集落	米と伝統文化と景観の里
59	岡山県備前市	H19年度	交流	日生カキお好み焼き研究会	カキオコで楽しむまちづくり
60	山口県萩市	H19年度	交流、食	うり坊の郷katamata	「元気な片俣の創出」－交流拠点が元気の源－
61	山口県長門市	H19年度	交流、食	通地区発展促進協議会	「古式捕鯨の里 通（かよい）」づくり
62	高知県いの町	H19年度	交流	NPO法人 土佐の森・救援隊	森林環境保全活動で地域づくりを！
63	高知県中土佐町	H19年度	交流	上ノ加江漁業協同組合	体験型観光と特産物による漁業の振興
64	長崎県松浦市	H19年度	交流	一般社団法人 まつうら党交流公社	松浦党の里ほんなもん体験
65	大分県日田市	H19年度	交流、食	大肥郷ふるさと農業振興会	多集落1農場方式と多彩な交流・ふれあい活動
66	宮崎県諸塚村	H19年度	交流	諸塚村産直住宅推進室	諸塚村産直住宅
67	鹿児島県屋久島町	H19年度	交流	げじべえの里管理組合	集落で立ち上げた直売所～観光地を生かした生産販売活動の拠点づくり～
68	沖縄県大宜味村	H19年度	女性・若者の力、交流、知的財産権	笑味の店	おじぃ・おばぁの智恵を生かした地域ブランドづくり
69	北海道札幌市	H20年度	食、交流、バイオマス・リサイクル	砥山農業クラブ	「砥山農業小学校」～八剣山の麓で学ぶ農業・農村
70	北海道沼田町	H20年度	交流	沼田町ホタル研究会	沼田町にホタルを呼び戻そう
71	北海道津別町	H20年度	食、バイオマス・リサイクル、交流	津別町有機酪農研究会	人・牛・環境にやさしいオーガニック牛乳の生産
72	宮城県東松島市	H20年度	交流	奥松島体験ネットワーク	奥松島体験ランド 海と自然の地域づくり
73	宮城県加美町	H20年度	女性・若者の力、食、交流	農事組合法人 やくらい土産センター さんちゃん会	女性たちが切り開いた新たな経営参画
74	茨城県日立市	H20年度	女性・若者の力、交流	夢ひたちファームなか里	農業体験から広がるつながりの輪
75	茨城県つくば市	H20年度	バイオマス・リサイクル、交流	有機アクションプラットホームLLP	今こそ 有機アクションで立ち上がろう
76	群馬県川場村	H20年度	交流	群馬県川場村	田園理想郷をめざして－自然と農業による村づくり－
77	千葉県南房総市	H20年度	交流	(株)ガンコ山	ガンコ山ツリーハウスヴイレッジのツリーハウスマスターツアー
78	千葉県鋸南町	H20年度	食、交流	鋸南町保田漁業協同組合	保田漁協都市と漁村のふれあい構想
79	石川県能登町	H20年度	交流	春蘭の里実行委員会	学生達が夢見る黒い瓦と白壁でのふるさとづくり
80	長野県根羽村	H20年度	交流	根羽村	矢作川下流住民との「親子わんぱく体験隊」協働活動
81	岐阜県郡上市	H20年度	女性・若者の力、食、交流	明宝ビスターリマーム	明宝の民宿女将による村おこし活動
82	愛知県南知多町	H20年度	交流、知的財産権	日間賀島漁業協同組合	漁業と観光業の相互扶助による明るい島づくり
83	愛知県東栄町	H20年度	交流	とうえい宝の山づくり実行委員会	チェンソーアート競技大会 IN 東栄
84	三重県四日市市	H20年度	交流、人材育成	森林の風（もりのかぜ）	まちの木こり人育成講座と森林再生
85	三重県桑名市	H20年度	女性・若者の力、食、交流	すし工房なばな	郷土料理「箱ずし」で米消費拡大と次代への食文化の伝承
86	三重県いなべ市	H20年度	交流	川原白瀧棚田保存会	オーナーが荒れ果てた棚田を再生
87	岡山県笠岡市	H20年度	交流	NPO法人 かさおか島づくり海社	いつまでも輝き続ける島をめざして
88	山口県下関市	H20年度	交流	歌野の自然とふれあう会	歌野の自然とふれあう会
89	高知県高知市	H20年度	女性・若者の力、食、交流	高知県漁協女性部連合協議会	都市と漁村の交流学習in高知
90	熊本県水俣市	H20年度	交流、食	村丸ごと生活博物館頭石地区	村丸ごと生活博物館
91	大分県豊後高田市	H20年度	交流、食	ふき活性化協議会	「農業と観光が調和した地域づくり」を目指して
92	宮崎県五ヶ瀬町	H20年度	交流	NPO法人 五ヶ瀬自然学校	過疎化を止める！コミュニティと環境教育

No.	都道府県・市町村	選定年度	取組分野	活動主体	取組の名称
93	宮城県唐桑町	H16年度	交流	牡蠣の森を慕う会	水源の森と海をつなぐ交流
94	広島県三次市	H16年度	交流	第三セクター（株)君田21	温泉と特産物による地域交流
95	大分県大山町	H16年度	交流	大分大山町農業協同組合	生産者の顔が見える農産物の販売
96	和歌山県田辺市	H17年度	交流	中辺路町森林組合	森林の環境保全で地域の活性化
97	沖縄県玉城村	H17年度	交流、食	(株）たまぐすく村のさとうきび酢	沖縄の主幹作物「さとうきび」を生かした村づくり
98	北海道長沼町	H18年度	交流	長沼町グリーン･ツーリズム推進協議会・長沼町グリーン･ツーリズム運営協議会	町を挙げての長沼型グリーン・ツーリズム
99	北海道栗山町	H18年度	交流	北海道栗山町ハサンベツ里山計画実行委員会	人と自然が共生する里山づくり20 年計画
100	宮城県石巻市	H18年度	交流	あじ島冒険楽校	あじ島冒険楽校（未来の大人たちへ）
101	栃木県那須塩原市	H18年度	交流、バイオマス・リサイクル	水土里ネット那須野ヶ原	バイオマス等地域資源の利活用
102	埼玉県宮代町	H18年度	交流	埼玉県宮代町	「農」のあるまちづくり～新しい村の取組～
103	広島県安芸高田市	H18年度	交流、女性・若者の力	川根振興協議会	「住民自治」－「もやい」の心で安心して暮らせる農村をめざして－
104	北海道当別町	H18年度	交流、食	当別町亜麻生産組合	よみがえれ！亜麻の花咲く里づくり
105	宮城県石巻市	H18年度	交流、食	あじ朗志組	心のふるさとづくり ～「網地島ふるさと楽好」等の取組～
106	埼玉県さいたま市	H19年度	交流、循環	見沼田んぼ福祉農園	共に学び、共に育ち、共に生きる、共生の農業の実現
107	熊本県山都町	H19年度	交流	(財)清和文楽の里協会	文楽の里づくり
108	宮崎県都城市	H19年度	交流、食	(株)はざま牧場	雇用拡大による地域活性化
109	宮崎県高千穂町	H19年度	交流、食	五ヶ村村おこしグループ	地元に伝わる神楽を活用した交流体験事業
110	山形県鶴岡市	H20年度	交流、食、女性・若者の力	(株)産直あぐり	縁の下の力持ちから中核組織へ成長した女性の会
111	石川県加賀市	H20年度	交流、食	高塚地区自然保全会	「子供農園」を核にした町づくり
112	長野県池田町	H20年度	交流、食	金の鈴まごころ会	「花とハーブの町」の新たな流通
113	兵庫県加西市	H20年度	交流、食、女性・若者の力	原始人会	万願寺地区の町おこし事業
114	和歌山県かつらぎ町	H20年度	交流	かつらぎ町観光協会	都市と農山村のネットワーク事業
115	和歌山県古座川町	H20年度	交流、食、女性・若者の力	農事組合法人 古座川ゆず平井の里	ゆずを中心とした地域特産物で地域の活性化をめざす
116	大分県豊後大野市	H20年度	交流、食	温見地区連絡協議会	牛と椎茸と人づくりに生きる里山
117	沖縄県伊江村	H20年度	交流	(社)伊江島観光協会	ヒューマンツーリズムで元気なふるさとづくり

2)「オーライ！ニッポン大賞受賞者」に見る交流事例

同様の視点で過去３年間（平成23～25年）の「オーライ！ニッポン大賞」の受賞者を分析したのが下表である。オーライ！ニッポン大賞は交流だけでなく、人財育成や産品開発も対象となるが、交流をみていくとやはり学校教育や観光レジャー型のグリーン・ツーリズムが多いことが読みとれる。

〔オーライ！ニッポン大賞受賞者の活動特性〕

			交流対象			交流エリア			タイプ分類		
			学校教育	ファミリー・個人	企業・大学	地域中心	都市部中心	教育・学習	観光・レジャー	交流・育成	物産交流
第9回(平成23年)	グランプリ	財団法人 新治農村公園公社(群馬県みなかみ町)		◎			◎		◎		○
	大賞	東京海洋大学　産学・地域連携推進機構(東京都港区)					◎				◎
		かしも木匠塾(岐阜県中津川市加子母)			◎		◎	◎			
		社団法人 伊江島観光協会(沖縄県伊江村)	◎				◎	◎			
	審査委員会長賞	OH!!鰐 元気隊(青森県大鰐町)				○	○			○	
		特定非営利活動法人 遠野まごころネット(岩手県遠野市)									
		東沢地区協働のまちづくり推進会議(山形県川西町)		◎			◎	○		◎	○
		三菱地所株式会社(東京都千代田区)		◎			◎			◎	
		島根県立浜田水産高等学校(島根県浜田市)									◎
		NPO法人 霧島食育研究会(鹿児島県霧島市)				◎		◎			
第10回(平成24年)	グランプリ	震災復興・地域支援サークル ReRoots(宮城県仙台市)									
	大賞	千葉市教育委員会(千葉県千葉市)	◎				◎	◎			
		NPO法人 戸田塩の会(静岡県沼津市)				◎		○		◎	
		株式会社 巡の輪(島根県海士町)			◎		◎			○	○
	審査委員会長賞	特定非営利活動法人 シニア人財倶楽部(福島県いわき市)									
		ふくしまキッズ実行委員会(福島県鮫川村)		○		○				○	
		NPO法人銀座ミツバチプロジェクト(東京都中央区)									◎
		摂南大学ボランティア・スタッフズ(大阪府寝屋川市)			◎		◎	○		○	
		特定非営利活動法人 土佐の森・救援隊(高知県日高村)								◎	
第11回(平成25年)	グランプリ	おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会(岩手県奥州市平泉町)	◎				◎	○		○	
	大賞	歯舞地区マリンビジョン協議会(北海道根室市)	◎		◎		○	○		○	
		農業生産法人株式会社hototo(ホトト)(山梨県山梨市)		◎			◎			○	
		NPO法人五ヶ瀬自然学校(宮崎県五ヶ瀬町)	◎			◎				◎	
	審査委員会長賞	NPO法人信越トレイルクラブ(長野県飯山市)		◎			◎		◎	○	
		小原ECOプロジェクト(福井県勝山市)		◎			◎	○	○		
		豊森実行委員会(愛知県豊田市)		◎			◎	○		○	
		鵜鷺げんきな会(島根県出雲市)	○	○			◎	○	○	○	
		(一社)西土佐環境・文化センター四万十楽舎(高知県四万十市)	○	◎			◎	○	○		

〔オーライ！ニッポン大賞の受賞者の概要〕

◆第９回（平成23年）

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）	
財団法人 新治農村公園公社 （群馬県みなかみ町）	農村地域4集落にある歴史文化、伝統手工芸、食文化を、そこに住んでいる人材を活用して、農村と都市住民の交流を進める事業「たくみの里事業」を行っている。自然環境の保全と体験活動をコンセプトに、田舎の原風景の中に点在する文化財を訪ね、又わら細工や竹細工など２４か所の体験工房めぐり等のプログラムを小学生・ファミリーや若い女性のグループを中心に提供。また新鮮な野菜、果物の直売では観光客と生産者を結ぶ交流の場を提供している。
オーライ！ニッポン大賞	
東京海洋大学　産学・地域連携推進機構 （東京都港区）	地方産品を都市での消費に繋げる『地産都消』に取り組んでいる。地方の産品というシーズと都市の消費ニーズを結びつける新たなマッチングの試みで、大学の「知」と大都会の中心にある「地」を使い、連携先のネットワークを活用している。現在、大学独自の「水産都市フェア」（首都圏住民対象）と（株）ぐるなびとの連携事業である「ふるさと食材活用セミナー」（首都圏飲食店対象）のコンテンツがある。
かしも木匠塾 （岐阜県中津川市加子母）	建築を学ぶ大学生が、毎年夏にサマースクールとして伝統的な在来軸組み工法の木造建築を学ぶとともに、大工さんに様々なことを教えてもらいながら、地元の方のご要望に応えてバス停や小屋などを学生主体でデザインや図面、施工まで全て行っている。2週間の間地元の方と交流し豊かな自然の中で木について学んでいる。
社団法人 伊江島観光協会 （沖縄県伊江村）	伊江島は沖縄本島北部に位置するピーナッツ型をした島で、観光振興により地域活性化に取組んでいる。子供たちが高校進学で沖縄本島に行くため、空いた子供部屋を活用して民泊による滞在型観光を推進。特に修学旅行などの学校教育を中心に民泊事業に取り組んできた。現在も観光協会民泊部会の１２９軒で「ヒューマンツーリズム」をキャッチフレーズに、村ぐるみで都市との交流による地域経済の活性化を推進中である。
オーライ！ニッポン大賞　審査委員会長賞	
OH!!鰐 元気隊 （青森県大鰐町）	平成19年に「OH！鰐元気隊」を地域おこしグループとして会員数130名で設立。地元大鰐小学5,6年生を“OH！鰐元気隊キッズ”として、大人と共に「農業（野菜づくり）」に取り組み、農業や地域への理解を深めている。また東京の青森県アンテナショップで販売体験学習やアンケート調査に参加するなど、地元の農業や野菜を通じて町のPRや次世代の地域の担い手育成を行っている。
特定非営利活動法人 遠野まごころネット （岩手県遠野市）	岩手県沿岸地域と内陸の中継交易で栄えた遠野市で被災地支援を行っているNPO。大きな被害を受けた沿岸地域との古くからの交流を活動の原動力に復興支援を展開している。復興へ向けて長期的なサポートを必要としている被災地に、全国からボランティアを募り、被災地と外部との活発な交流を通じた被災地復興に取り組んでいる。
東沢地区協働のまちづくり推進会議 （山形県川西町）	過疎化が進行する山村である川西町東沢地区では、東京都町田市と連携して、子供たちを対象にした継続的な「やんちゃ留学（山村留学）」を行っている。山村留学は21年目となり、町田市では留学生の保護者が同窓会的な組織「まちだ夢里の会」を設立。そのメンバーの紹介で、都内のおにぎりチェーンとの間で東沢地区で生産する特別栽培米コシヒカリの取引が始まるなど、交流の輪が広がっている。
三菱地所株式会社 （東京都千代田区）	三菱地所グループは、山梨県北杜市の限界集落である増富地区で活動を行うNPO法人「えがおつなげて」と連携して、都市と農山村をつなぐ「空と土プロジェクト」に2008年7月から取り組んでいる。このプロジェクトは農業体験や間伐体験等のプログラムを通じて新たな価値を生み出し、地域の活性化を目指すもので、三菱地所は木材や農地、農産物などの地域資源と企業の経営資源を融合させ、ともに支えあう持続可能な社会の実現をめざすCSR活動と位置づけている。
島根県立浜田水産高等学校 （島根県浜田市）	食品流通科の生徒が主体となり、地元の美味しい水産物を素材として、商品開発・宣伝PR活動・食育活動・環境活動・ボランティア活動」などの取り組みを行っている。高校生のアイデアを活かした商品を地元経済の活性化に活かし、また、日本全国に宣伝している。また東日本大震災の際には、自分たちで作った缶詰などの保存食を提供するなどの活動を行った。
NPO法人 霧島食育研究会 （鹿児島県霧島市）	目指すのは「超ローカルで田舎っぽい」しかも「日本で唯一かつ最先端」の食育活動。地域の食文化祭を掘り起こし、食を支える農業や地域の風土を、市内外の人々が交流しながら学ぶ活動を展開している。「都会よりこの地が豊かだと実感できる」活動は、地域住民が地域に対する愛着と誇りを取り戻す動きにもつながっている。

〔オーライ！ニッポン大賞の受賞者の概要〕

◆第10回（平成24年）

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）	
震災復興・地域支援サークル ReRoots（宮城県仙台市）	「復旧から復興へ、そして地域おこしへ」という中長期的なコンセプトを掲げ、大学生を中心に援農ボランティア活動を展開。震災後、130軒の地元農家とネットワークを構築し、現在までに累計で約15,000名のボランティアを受け入れ、畑のがれき撤去や側溝の泥出し等の復旧作業、市民農園づくり、収穫した野菜を使ったカレーの商品化など地域と連携した取組を進めている。
オーライ！ニッポン大賞	
千葉市教育委員会（千葉県千葉市）	千葉市教育委員会は、小中学校９年間の仲で宿泊体験活動を行う機会を多く設けている。特に小学校６年生では市内すべての小学校で長野県及び千葉県内において農山村留学を実施しており、長野県内での実施は、今年度で１２年目を迎えている。豊かな自然の中での地元の人々との交流は、子どもたちに生きる力を培う機会となっている。
NPO法人 戸田塩の会（静岡県沼津市）	南洋のプランクトンをたっぷり含んだ黒潮という地域の資源と伝統の製法を生かし、日本一の塩づくりを通じた地域活性化に取り組んでいる。海水汲み上げや薪の調達も地元の人が行い、雇用創出に努めている。また、小中学生等の見学、体験学習を受け入れ、自然の恵みや戸田の歴史・文化を伝承している。
株式会社 巡の輪（島根県海士町）	持続可能な島をつくるという島の取組を踏まえ、同社は島を学びの場と捉え、企業向け研修プログラムを実施し、これまでに1.000名以上が交流を重ねてきた。東京や京都など全国各地で海士町の食材を通じてつながる仕組みとしてカフェを運営している。
オーライ！ニッポン大賞　審査委員会長賞	
特定非営利活動法人シニア人財倶楽部（福島県いわき市）	いわき市の都市部のシニア世代が中心となり、これまでの経験や農業や教育等の専門的技能を生かし、遊休農地の耕作、「買い物難民」への移動販売、シニア層向けのパソコン教室など、地域貢献活動を進めている。
ふくしまキッズ実行委員会（福島県鮫川村）	放射能汚染の影響で自由な外遊びができない福島の子どもたちに、野外での活動を楽しみながら、地域の人々との交流を通じて多くの学びの場を提供している。
NPO法人銀座ミツバチプロジェクト（東京都中央区）	銀座の屋上で養蜂し、できた蜂蜜をスイーツなどに商品化するとともに、物産展やマルシェ等を通じて被災地支援のための商流づくりも進めている。
摂南大学ボランティア・スタッフズ（大阪府寝屋川市）	和歌山県すさみ町と包括連携協定を締結し、延べ400名の学生が地域と結んで自然体験学習、雑草刈りや水路清掃等の過疎・高齢化地域の支援活動を進め、伝統の祭りを復活させるなど地域のやる気を生み出す活動を展開している。
特定非営利活動法人土佐の森・救援隊（高知県日高村）	定年退職者等を中心に、副業的な自伐林業を展開する一方、林業の担い手を育成し、木質バイオマス等に利用する林地残材収集運搬の仕組みを全国展開するなど、地域雇用の拡大、地域林業の再生等につながる活動を実践している。

〔オーライ！ニッポン大賞の受賞者の概要〕

◆第11回（平成25年）

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）	
おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会 （岩手県奥州市平泉町）	本協議会は、農村生活体験型の教育旅行の受入を進めるため、受入体制の整備、体験メニューの企画・普及、情報発信と誘致などに取り組んでいる。受入数は年々増加し、2010年度には年間22校約3,000人に到達したが、東日本大震災の影響で受け入れ人数が激減した。しかし長年交流を続ける学校からの支援もあって、2013年度には震災前の受入規模に回復した。
オーライ！ニッポン大賞	
歯舞地区マリンビジョン協議会 （北海道根室市）	漁村交流部会を中心に、修学旅行生や北方領土に関わる視察団の受入、移住体験ツアーの実施等、小学生から高校生、大人まで幅広い年齢層を受け入れ、漁業体験や歯舞産の新鮮な海の幸（食体験）などを通じて歯舞の良さをアピールしている。
農業生産法人株式会社hototo（ホトト） （山梨県山梨市）	将来農業を始めたい、あるいは都会に住みながら農業もしてみたいと考える都市住民を対象に農業スクールを開校。活動開始から5年間で、参加者数は農業体験で延べ12,000人、スクールは17期で延べ400人を超えた（2013年7月時点）。気軽に参加できる体験コース、子どもと大人を一組として一泊二日で参加する宿泊農業体験等、多様なコースを用意している。
NPO法人五ヶ瀬自然学校 （宮崎県五ヶ瀬町）	過疎化や少子化等の問題に直面している五ヶ瀬町を活性化するため、無農薬による野菜等の栽培を行う「五ヶ瀬風の子自然学校」や自然体験活動を行う「五ヶ瀬「山の自然学校」やまぶし探検隊等の活動を実施している。地元の小学生を主な対象として、五ヶ瀬自然学校の卒業生が五ヶ瀬町に戻り、活動を引き継ぐことを将来の夢としている。
オーライ！ニッポン大賞　審査委員会長賞	
NPO法人信越トレイルクラブ （長野県飯山市）	新潟・長野の県境である関田山脈の歴史ある古道の復元と、ロングトレイル（長距離自然道）等の整備を通じて、地域の活性化と観光振興に貢献している。トレイルの整備は、地元や都市からボランティアを募り、自然環境に配慮しながら実施。全国でも初の本格的なロングトレイルとして注目され、利用者は年々増加。地域内外からトレッキングツアーが催行され、2012年は年間33,000人（推計）が訪れている。
小原ECOプロジェクト （福井県勝山市）	福井工業大学や県外NPO法人と連携し、廃村の危機が迫っている福井県勝山市小原地区の伝統的古民家の再生や、地域資源を活用したエコツアー等の企画を通じて地域再生に取り組んでいる。エコツアーでは、植林や間伐などの林業体験、山菜取り体験、炭焼き体験、豪雪体験、山菜や地元食材、シシ鍋など郷土料理の提供、古道や旧跡などを紹介するガイドツアー等、多彩なプログラムを提供している。
豊森実行委員会 （愛知県豊田市）	豊田市、トヨタ自動車、NPO法人の３者が、都市と農山村の暮らしをつなぎ、持続可能な地域づくりを担う人材を育成することを目的に、協働プロジェクトとして「豊森なりわい塾」を開講した。トヨタ自動車は、グローバル化や世界経済の不安定化に対する雇用の流動性や従業員のライフスタイル、価値観の多様化等への対応を課題と考えており、その課題を目的に参加した。
鵜鷺げんきな会 （島根県出雲市）	人口約240人、高齢化率6割の鵜鷺地区を再生するため、空き家を活用した旅行者らの宿泊施設やカフェ、ギャラリーの整備や田舎ツーリズム実施。参加者は年間延べ約800人、宿泊者は延べ719人。他県からの教育旅行も受け入れている。またIターン者の住居などに活用し、過去4年間に21名の転入者を確保。過疎地における地域おこしの先進事例として注目されている。
（一社）西土佐環境・文化センター四万十楽舎 （高知県四万十市）	廃校舎を宿泊体験施設「四万十楽舎」として改装し生涯学習の研修センターとして利用するとともに、宿泊と自然体験という収益事業を展開している。夏休みの「子どもキャンプ」、四万十川の源流から河口までをカヌーで下る「エコツアー」等を実施し、東京、大阪、兵庫など都市部のファミリーを受け入れている。また教育旅行にも取組、１０年以上継続的に交流している神奈川県の学校もある。

（3）農山漁村と企業との交流事例

①経済団体連合会の調査に見る交流事例

経済団体連合会が平成23年にとりまとめた「農林漁業等の活性化に向けた取り組みに関する事例集」から、農山漁村との交流を行っている企業の活動事例を抽出したものが下表である。

交流事例で多いのは、企業の森や限界集落等を支援する「CSR活動や地域貢献活動」。企業研修や社員の育成活動はそれほど多くはないが、導入している企業が見られる。

No.	企業・団体名等	交流地域（農山漁村）	交流活動の内容
1	アイシン精機株式会社	北海道豊頃町	北海道豊頃町　農業体験研修
2	株式会社青森銀行		農業支援CSR活動～銀行員の農作業支援を通じたボランティア活動～
3	井関農機株式会社		食料自給率向上に向けた井関グループの取り組み～熊本での福祉活動「ボランティア米」の栽培～
4	伊藤忠商事株式会社	和歌山県	CSR教育として農業体験を行うことで、農地保全や地域活性化に貢献～和歌山県の「企業のふるさと」制度に参加～
5	ANAホールディングス株式会社		サンゴ再生活動
6	ANAホールディングス株式会社		東北被災地での森づくり
7	ANAホールディングス株式会社		ボランティアホリデー～ワーキングホリデー等の社会貢献活動を活用した農林漁業活性化及び都市居住者と地方との地域間交流を促進する為の新たな取り組み～
8	王子グループ		環境教育自然学校の開催
9	柏市、市川市農協、UDCK（三井不動産）ほか		農あるまちづくり～農との交流で創る健康で安らぎのある暮らし～
10	キヤノン電子株式会社		新入社員研修で荒川上流の森づくり（環境保護活動）を実施
11	キヤノンマーケティングジャパン株式会社		環境活動「未来につなぐふるさとプロジェクト」～自社ステークホルダーの参加を促進し、全国14ヵ所の地域活性化に貢献～
12	株式会社クボタ		クボタeプロジェクト（耕作放棄地再生支援、農産物の地域ブランド・産直品PR等）
13	株式会社ジェイティービー		教育旅行における農林漁業体験の推進
14	株式会社島津製作所		京都モデルフォレスト運動への参加：「島津製作所の森」づくり活動
15	株式会社西武ホールディングス	埼玉県横瀬町	横瀬町の棚田で田植え・稲刈りを体験
16	株式会社西武ホールディングス		ライオンズファームで農業体験
17	積水ハウス株式会社	和歌山県、青森県	「企業の森」制度への参加（和歌山県「積水ハウスの森」、青森県「企業の森」活動）
18	株式会社損害保険ジャパン		国内5か所で展開する「協働の森づくり」
19	株式会社損害保険ジャパン		「CSOラーニング制度」による、大学生・大学院生のインターンシップ派遣
20	株式会社電通		農業を楽しむ機会を提供する「ファーミング・プロジェクト」の実施・運営

No.	企業・団体名等	交流地域（農山漁村）	交流活動の内容
21	株式会社電通		若者の農業や食料自給率への関心を高める「ノギャル・プロジェクト」支援
22	東海ゴム工業株式会社		森林の里親契約により、限界集落との棚田保全、農業体験などの交流事業を推進し、地域活性化に貢献
23	戸田建設株式会社		農村地域振興への取り組み
24	トヨタ自動車株式会社		行政、企業、NPO協働による農山村を起点とした人材育成プロジェクト「豊森(とよもり)なりわい塾」
25	トヨタ自動車株式会社		耕作放棄地を活用した「農業体験」活動
26	豊田通商株式会社		富士山麓の森の再生を図る「富士山の森づくり」プロジェクトに参画
27	中日本高速道路株式会社		「NEXCO中日本ならでは」の新たなCSRの取り組み～地域との対話と協働による課題解決～（新東名高速道路の沿線3地区）
28	中日本高速道路株式会社		「NEXCO中日本ならでは」の新たなCSRの取り組み～地域との対話と協働による課題解決～（世界遺産五箇山菅沼集落）
29	日本電気株式会社		NEC田んぼ作りプロジェクト
30	はくばく株式会社		社員教育の場として「やまなしの企業の農園」に取り組む
31	ヒューリック株式会社		里山保全活動を通じた農業の活性化
32	前田建設工業株式会社		地球への配当「MAEDAグリーンコミット　MAEDAの森プラン」による森づくり
33	マツダ株式会社		「企業との協働による水源の森づくり」
34	マツダ株式会社		「マツダの森」森林保全活動
35	丸紅株式会社		アドプトフォレスト「丸紅の森」
36	丸紅株式会社	奥多摩	奥多摩間伐ボランティア
37	三井不動産株式会社		新たな農業文化の創造
38	三井不動産株式会社		屋上庭園・農園　ダイバーシティ東京 プラザ～環境共生とエンターテインメント性の両立～
39	三井不動産株式会社		グループ保有林(約54ha)「そだてる」「つくる」「いかす」サイクルを三井不動産グループ全体で推進
40	三菱地所株式会社	山梨県	山梨県の遊休農地で丸の内エリアの就業者が酒米づくりに関わり『純米酒「丸の内」』ブランドが誕生
41	三菱商事株式会社		三菱商事千年の森　森林保全活動
42	森トラスト株式会社		2012年度農林水産省「地域ブランド観光活用促進事業」
43	ヤンマー株式会社		ヤンマーミュージアム体験農園で初めての方に農作業を体験する機会を提供～地元組織との有機的な連携を活かして～
44	渡辺パイプ株式会社		浅間山麓地域の自然・森林保全活動とグリーンツーリズム事業を通じて地域の活性化と発展に寄与するため、自然学校を設立

②農林水産省の調査資料に見る交流事例

農林水産省都市農村交流課が平成25年に取りまとめた「企業と農村が連携する取組事例一覧」では、以下のような交流事例が紹介されている。（一部、前ページの事例との重複あり）

No.	企業・団体名等	交流地域（農山漁村）	交流活動の内容
1	(株)ニトリホールディングス	• 北海道鹿追町 • 鹿追高台地区保全隊	• 緑の創設による地域振興を目的に、鹿追高台地区保全隊が計画した「植樹による並木道造成計画」をニトリホールディングスが支援。 • ニトリホールディングスが創設した「北海道応援基金」を活用して、平成22年より植樹を開始した。
2	株式会社フィルド（建築設計・不動産コンサルティング）	• 北海道上士幌町 • 上士幌町交流と居住を促進する会 • NPO上士幌コンシェルジュ	• 多様な資源に恵まれながらも過疎化が進む農村地域において、移住定住＋観光を軸に都市と農村の交流事業を展開。地元協議会と企業の連携により、地域の様々な取組を総合的にコーディネイトする事で、既存の資源（人的・自然・食・施設）を最大限に活用したコミュニティビジネスを創出し持続的かつ安定的な運営と、町の活性化を目指している。また移住定住者の増加促進による、地域の農商工業の消費拡大と雇用の拡大を図る。
3	株式会社川喜（製麺業）	• 岩手県釜石市 • 岩手県大槌町	• 釜石・大槌地域をソバの生産地にしようと、地元製麺業者と農業者が連携して「ソバの里組合」を設立し、耕作放棄地を活用したソバ栽培に取組む。（H21年2月20日：ソバの里組合設立） • 継続して耕作放棄地の解消に取組むほか、ソバの産地として地域ブランドの確立を図っていく予定
4	(株)故郷の山、TOTO東北販売(株)、(株)東北銀行、(株)エルテス、(株)藤村商会、盛岡信用金庫、岩手のアオダモを育てる会、情報産業労働組合連合会岩手県協議会	• 岩手県紫波町	• 各企業、土地所有者活動団体、町が協定を結び、企業が森林整備活動資金を提供するとともに、管理作業を行う「企業の森事業」を推進。 • 企業の社会貢献と福利厚生、環境保全を図り、町の林業の活性化、地域活性化、都市住民との交流の活発化を図るもの（H20年10月以降、8団体と協定締結）。
5	岩手県建設業協会一関支部・一関市水道工事業協同組合	• 岩手県一関市 • 厳美町本寺地区住民	• 国の重要文化的景観に指定されている一関市厳美町本寺地区で、景観維持に向け水田耕作を続ける地域住民を支援するため、地元企業が住民と共同で水路整備に取り組む。
6	(株)アルビオン（高級化粧品製造）	• 秋田県藤里町 • 藤里町粕毛	• 同社は研究開発強化の一環として、自然豊かな「白神山地」の麓で、化粧品の原料となる植物の研究・開発を進めるため、秋田県による「一社一村」のマッチングにより、閉園した藤里町の保育園を借り受けて研究所を設けるとともに、地域貢献活動を展開。 • 植物の委託栽培や、地域貢献活動の継続および世界遺産白神産地のPR活動を実施。
7	株式会社キツタカ（畳製造会社）	• 福島県いわき市 • 株式会社キツタカファーム（農業生産法人）	• 近年、い草農家の減少等により、畳表の原料となるい草の国内供給が困難になってきたため、地域農家との連携により国産のい草を栽培し、ブランド化した畳の販売施工を目的として農業生産法人を設立。 • 地域との連携により、雇用拡大及び地域に新たな流通システムの提案を目指す予定。

No.	企業・団体名等	交流地域（農山漁村）	交流活動の内容
8	福南建設(株) （建設業）	・福島県南会津町 ・（有）F.K.ファーム（農業生産法人）	・H16に、南会津町内の耕作放棄地の解消・活用による農業部門への参入を目的に農業生産法人を設立。 ・自力で耕地整備を行い、そばを作付し、生産したそばはそば粉の加工販売やそば店の出店にも取り組む。また水稲作業の受注やアスパラガス栽培にも取り組んでいる。
9	OKUTA株式会社 （住宅リフォーム会社）	・埼玉県比企郡小川町 ・有機農家	・小川町の有機農業とその生産者を支援する。社会貢献として企業単位でサポート。社員に持続可能な社会や食糧問題について学ぶ機会を提供する。 ・社員と家族が農作業、生き物調査、エコツアー、有機農業の勉強会等にも参加、地域との交流を深めている。 ・新入社員研修の一環として、当該地域での田植え、草刈り、稲刈りの計3回の農作業を位置付けている。
10	三菱電機株式会社 （神奈川県内の5事業所）	・神奈川県鎌倉市 ・鎌倉市遊休農地解消対策協議会（農業委員、市、JAで組織）	・平成２５年４月２４日に「鎌倉市遊休農地解消対策実践活動協定書」を締結。 ・社員による農業振興地域内の遊休農地の草刈り、耕運を行い農地に復元。初年度はサツマイモ、ジャガイモ等の栽培を行い、収穫物は地元小学校等の給食食材として提供予定。 ・初年度の両者の活動人数は延２００人以上を予定。
11	富士電機（株）	・山梨県上野原市 ・やまなし上野原桜井ファーム（この活動のために立ち上げた、旧秋山村桜井地区の地域活性化協議会）	・平成22年に「企業の農園づくり」の協定を締結し、公式イベント（年５日）、ボランティアによる緩農、地元小学生向けの環境学校などを実施している。
12	三菱地所（株）	・山梨県北杜市 ・NPO法人えがおつなげて	・社員、丸の内地区のワーカー、管理するマンション居住者などを対象にした農業体験ツアーの実施 ・棚田などの耕作放棄地復元作業、復元した田畑でのうるち米他農作物の栽培 ・ダイズの栽培および地元住民指導のもと味噌作り ・地域の森林資源を活用した住宅用資材などの開発 ・丸の内地区での山梨食材フェアの共同開催など ・酒米を栽培、県内の老舗酒造と連携し純米酒を商品開発、丸の内地区のショップやレストランで販売
13	株式会社フジヤマ （建設コンサルタント）	・静岡県浜松市 ・下阿多古地域の農業を考える会（地元農家有志）	・H19年2月の認定以来、耕作放棄地の解消を目的に菜の花や大豆の栽培を実施 ・また、地域の菜の花まつりへの支援や、収穫した大豆を使ったみそ作り教室への参加など地域との交流も活発に進んでいる。 ・協働による両者での活動人数はのべ500人以上。
14	ハウス食品株式会社（食品製造会社）	・新潟県妙高市 ・妙高市、妙高市グリーン・ツーリズム推進協議会（グリーン・ツーリズム団体）	・グリーン・ツーリズムの取組の一環として、ハウス食品と連携し、食育事業「バーモンドキッチン食育体験教室」（H21より、「お米のひみつ体験キャンプ」に改称）を開催。米や野菜の収穫体験、採れたての野菜を使ったカレーづくりなどを通じて、「食育」のほか、妙高山麓の大自然や農家の暮らし、農林産物の魅力について、首都圏等からの参加者に紹介。
15	（株）クボタ（農機具メーカー）	・石川県能美市 ・能美市坪野町、能美の里山ファン倶楽部（里山の保全再生等に協働で取り組み）	・クボタの社会貢献活動である「クボタeプロジェクト」の取組の一つとして、地域、農家、学校などと深く広く関わりながら、耕作放棄地の再生を支援し、地球環境保全や日本農業の活性化をめざす。 ・再生された棚田では、坪野すぎな会、能美の里山ファン倶楽部、地元住民が主体となって、山菜やマコモ等の栽培をおこなっている。また、ドジョウの養殖も始めており、その他では、他団体と連携し山菜を中心とした作物の栽培を模索している。

No.	企業・団体名等	交流地域（農山漁村）	交流活動の内容
16	千代菊株式会社 （酒造）	• 岐阜県羽島市 • アイガモ稲作研究会（平成12年「アイガモ米」がJAS有機農産物に認定される）	• 消費者にアイガモ米作りから地酒の仕込み等を体験させる都市農村交流活動「羽島体験プロジェクト」の実施（14年目）を通じ、環境保全型農業や地産地消を推進 • 会員募集（359名）によるアイガモ米農場での田植え、稲刈り等の農作業体験 • 収穫した米による酒仕込み体験（18名、見学35名） • 農と酒の集い（募集500名）
17	(株)ハラキン （米穀類の卸・小売り業）	• 岐阜県恵那市 • 恵那市富田地区、富田を良くする会、富田営農組合、NPO法人農村景観日本一を守る会、恵那市、JAひがしみの等	• 企業研修の一環として農業体験を実施することで、社員の福利厚生と資質を向上 • また、地域住民との交流と通じて、地域が元気になり、農地の保全にも効果 • H18年から当地区で取組み ・株式会社ハラキンが参加企業を募り、農繁期の農作業手伝いや交流活動を実施 ・延べ21社、888人以上が参加 ・地元では交流拠点づくりの一環として、茅葺きの民家を改修し、農家民宿としてH22年5月から運営
18	株式会社アクアセレクト・ビューティフルライフ （水の宅配サービス）	• 三重県大台町 • 三重県大台町小切畑浦谷・唐櫃（集落）	• 水を扱う企業として、その水を育む上流部に位置する集落と共に維持保全・活性化 • 水稲植え付けに備えて、農業用水路の清掃 • 農村体験ツアーの実施（ホタル観賞会・水源探訪・川遊びなど）
19	中日本高速道路株式会社 （高速道路の建設・管理）	• 三重県亀山市 • 三重県亀山市、亀山kisekiの会（お茶農家の組織）	• 高速道路沿線地域の課題解決や地域活性化のため、景観保全や紅茶（べにほまれ）などの特産品開発を図る。（H25年2月：農山村の活性化の取り組みに関する協定締結） ・荒廃茶園の開墾、荒廃べにほまれ紅茶園の再生復元作業、雑草取り作業 ・紅茶の手摘み収穫作業、紅茶加工作業 ・農村地域でのお茶イベントの開催支援 を実施（一部実施予定）。
20	キヤノンマーケティングジャパン株式会社（ビジネス機器、カメラ等の販売）	• 三重県大紀町 • 三重県大紀町、野原村元気づくり協議会（集落）	• 地域貢献活動のテーマである「未来につなぐ環境づくり」のため、地元小学生とともに放棄された茶畑の再生を図る。 ・地元小学生と一緒になった荒廃茶園（20a）の再生復元作業、雑草取り・堆肥入れ作業 ・お茶の手摘み収穫作業、特産品「七保のお宝 あたたかきずな茶」づくり ・カブトムシ園づくり、地元伝統漁法体験、木工体験、野菜等の収穫体験 ・景観植物の植栽 を実施）。
21	京都府生活協同組合（生協）	• 京都府下 • 京都府伊根町、亀岡市保津町、京丹波町、京丹後市弥栄町、綾部市奥上林古屋集落、亀岡市曽我部町 他	• 農村の実態を深く知り、リアルに学ぶ貴重な機会として捉え、京都府下の耕作放棄地等での飼料米の生産を支援し、飼料米を給餌した鶏の卵を消費者に供給することを通じ、 地域農業・農村の活性化に貢献 • 京都生協の職員（正規、パート、アルバイトなど）約100名が、京都府内の耕作放棄地等で、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱによる鹿よけ電柵の設置及び除草作業に加え、雪降ろし作業など地域の要請に沿って様々な取組を実施 • また、生産した飼料米で育てた鶏の卵を「さくらこめたまご」として実験販売
22	NPO法人ゴールドファーム （イズミヤ株式会社（食品など総合小売業））	• 大阪府岸和田市 • 大阪府岸和田市神於山地区・貝塚市木積地区	• 企業のCSRとして、耕作放棄地等の再生利用等を通じた地域農業・農村の活性化に貢献（H20年6月：大阪府と、援農ボランティア活動など農空間保全管理等について共同宣言） • 体験農園開設による耕作放棄地活用、援農ボランティア活動、食品残渣を活用した堆肥の製造・利用及び大阪農産物の積極的な利用・販売活動などを実施

No.	企業・団体名等	交流地域（農山漁村）	交流活動の内容
23	伊藤忠商事株式会社 （総合商社）	• 和歌山県かつらぎ町 • 和歌山県かつらぎ町天野地区	• 和歌山県の「企業のふる里制度」（企業と地域が協働・交流活動を通じ、農地保全や地域活性化を図る取り組み）に参加することで、弊社としてはCSRの一環としての活動を展開、あわせて農業体験を通じ社員研修や、社員・家族の福利厚生に資する • 10aの田を借り、稲刈りを行うほか、地域内の高野山の参道など世界遺産関係史跡周辺の清掃作業の手伝いなどを行い、地元の方々との交流に取組
24	ヤンマー農機販売(株)中国四国カンパニー （農機具販売）	• 岡山県美作市 • 美作市、上山棚田再生事業実行委員会（市、地元自治会、ボランティアグループ等）	• 上山千枚棚田を再生し棚田資源等を活用地域活性化を図るため、市や地元組織、ボランティアグループが取り組む耕作放棄地再生活動に対して、同社が農機具や人材等を無償提供。（H22年7月：覚書調印） • 就農希望者に対する栽培技術研修。最終的には50haの棚田再生を目指す。このような取組を全国的に展開。
25	平和建設(株) ((社)広島県建設工業協会）ほか	• 広島県福山市 • 福山市内小学校、い草栽培農家	• 備後地方で古くから栽培・加工されるい草、畳表の伝統産業の継承・再生を図る。 • 平成21年より平和建設が耕作放棄地でい草の試験栽培を始め、地元小学校と連携した環境教育を実施。さらに「い草ボード」という新商品開発にも取り組む。
26	株式会社ローソン会社	• 広島県神石高原町 • 神石高原町、農業者	• ローソンの移動販売・注文配達サービスにより小規模高齢化集落（限界集落）における買い物困難者と高齢者への支援を実施。また、ローソンファームの設立し、特産品の販売なども相互連携することで多角的で総合的な集落支援を実現。
27	三島食品株式会社	• 広島県北広島町 • 北広島町、地元農業者	• 赤しそふりかけ「ゆかり」の原料となる赤紫蘇を原料から一貫して栽培・商品化し、安心安全の確保と高品質な原料の研究開発に取り組む。
28	（財）直島福武美術館財団、（株）ベネッセコーポレーション（教育出版社）	• 香川県直島町 • 直島町、島内住民	• 直島の積浦地区の田園を舞台としたアートプロジェクトとして、耕作放棄地を再生し里山の風景と水田を復活させ、子ども達に米づくり体験を通して自然環境や食生活・文化を学んでもらう。
29	オムロンリレーアンドデバイス(株)武雄事業所（電子機器の開発・生産・販売）	• 佐賀県唐津市 • 唐津市相知町蕨野区（棚田百選）	• 棚田地域の「人手がほしい」「都市との交流を増やしたい」という要望に対して、「社会貢献をしたい」という企業のニーズを結びつけ、協働で棚田保全活動に取り組んでいる。（協定等は特になし） • H24年から活動（年1回程度） • 棚田石積み及び広場や展望所の草刈り、清掃活動等
30	富士電機(株)（総合電機機器メーカー）	• 熊本県和水町 • 熊本県玉名郡和水町、「なごみの里協議会」(住民組織)	• 荒廃していた森(町有地)において、社会貢献（環境保全）の場を探していた企業、活動を模索していた住民組織グループ、社会貢献や研究・活動の場を探していた熊本県立大学等が包括協定を結び、20haの広大な里山の再生に取り組んでいる。 また、フィールドを利用した環境学習を年に1回、環境学校と題して開催している。小学生を対象に植樹や伐採の必要性、巣箱設置や生き物観察を通じた生物多様性、竹や赤土などを利用した再生可能な資源についての学習を行っている。
31	ソニーセミコンダクタ九州㈱熊本TEC（各種半導体の設計・開発・製造・サービス等）	• 熊本県菊陽町 • 熊本県菊池郡菊陽町柳水地区	• 環境NGO、土地改良区、JA菊池、菊陽町などの関係団体と共に協働し、企業が使う水の量を地下水に涵養し環境保全に努める。(H15年にJA菊池、土地改良区と基本契約締結：委託契約とし目的や役割分担を明確にしている) • H15から現在まで以下の活動を行っている。 ・5月から10月までの期間で作物の作付け前か収穫後の水田（転作田）に、川から汲み上げた水を張り、浸透させて地下水に還元する取り組み。 ・協力農家の水田で生産されたお米の一部を購入し、社員食堂で利用。 ・取り組み農家の協力のもと田植え、稲刈り等のイベントを実施。
29	株式会社沖縄ティーファクトリー （製造業）	• 沖縄県金武町、他 • 沖縄県金武町、恩納村、石垣市、「琉球紅茶生産組合」（紅茶原料の生産組合）	• 沖縄県産の良質な原料茶葉を生産し、国産高級紅茶を製造・加工・商品化。世界に通用する琉球紅茶ブランドの形成を図り新しい紅茶生産地としての沖縄を世界にPRし、地域の環境を活用し農業・製造業・観光業の活性化を図る。

第2節　アンケート調査に見る大学・企業研修等との交流活動の状況

1. アンケート調査の実施

(1)アンケート調査の概要

全国の農山漁村と記号・大学等との交流活動の現況や交流に関する意識等を把握することを目的として、次の２つのアンケート調査を実施した。

①農山漁村を対象とした「都市と農山漁村の交流に関する調査」

（対象）　都市部等との交流活動に積極的に取り組んでいる全国の農山漁村 340サンプル

（対象とした地域・団体等）
- 平成25年度都市農村共生・対流総合対策交付金事業採択団体
- 子ども農山漁村交流プロジェクト受入モデル地域
- 農都交流セミナー（６月開催）の参加地域
- その他「オーライ！ニッポン大賞」受賞地域などより選考・抽出

（調査手法）　質問紙（アンケート）による留置郵送調査法

（調査時期）　平成25年11月～平成26年１月

（回答状況）　回収数 161件（回答率47.4%）

〈回答者の所属〉

（上段は実数、下段は%）

自治体	観光協会等関係機関の職員	商工会議所・青年会議所	JAや林業組合、漁協	NPO法人や地域づくり団体	農林漁業者（個人）	農事組合法人や企業	交流のための協議会や団体	その他	全体
69	11	2	2	30	1	4	42	7	161
42.9	6.8	1.2	1.2	18.6	0.6	2.5	26.1	4.3	100.0

〈回答者のエリア〉

東日本　88件　(57.8%)	・北海道　13件　(8.1%) ・東北　43件　(26.7%)	・関東　32件　(19.9%)
西日本　73件　(42.2%)	・北陸　10件　(6.2%) ・東海　11件　(6.8%)	・近畿　18件　(11.2%) ・中国・四国　19件　(11.8%) ・九州・沖縄　14件　(9.3%)

②企業・大学等を対象とした「都市と農山漁村の交流に関する調査」

（対象）　大都市圏に本社を持つ企業・大学・団体（最終的に約300サンプルに配布）

（調査手法）　質問紙（アンケート）による留置郵送調査法
（配布は調査員（JTBコーポレートセールスの営業職員が訪問配布し、回収は郵送）

（調査時期）　平成25年11月～平成26年１月

（回答状況）　回収数 76件（回答率25.3%）

〈企業・大学等別〉

	企業	大学・学校法人	NPO・組合	不明	全体
N(社)	62	5	4	5	76
%	81.5	6.6	5.3	6.6	100.0

〈回答企業・大学等の所在地（本社）〉

	東京	首都圏	愛知	大阪	その他	全体
N(社)	61	6	2	1	6	76
%	80.3	7.8	2.6	1.3	7.9	100.0

〈回答企業・大学等の規模〉

	30人未満	30～300人未満	300～1000人未満	1000～3000人未満	3000～1万人未満	1万人以上	不明	全体
N(社)	10	15	17	11	7	7	9	76
%	13.2	19.8	22.4	14.5	9.2	9.2	11.8	100.0

(2)アンケート調査の結果のとりまとめについて

２つの調査結果の詳細な分析レポートは参考資料として添付したが、その結果の要約を次ページから紹介する。ただし、調査項目が多岐に渡っていることから、質問項目及び結果から①交流の実態や現状（実態）と②交流に対する意識や今後の取組・課題（意識）の２つに分け、第１章の第２節及び第２章で紹介する。

主な質問項目と取りまとめの関係は以下の通りである。

農山漁村を対象としたアンケート調査

（主な調査項目）

- グリーン・ツーリズムや自然体験観光などの交流型観光への取り組み状況（概要、対象 等）
- 都市との交流の現状（交流の有無、交流の対象と頻度、交流内容 等）
- 都市の企業や学校、生活者等の受け入れの状況（受け入れ態勢の有無、参加団体・企業等、受け入れのための施設、行政の支援施策 等）

→ 第1章第2節－2及び4で紹介・解説

- 都市との交流促進の考え方や交流意向（交流意向の有無、交流の目的、期待すること 等）
- 交流に活用できる資源
- 交流を進めるための問題点や課題
- 今後必要な情報や支援 等

→ 第2章第1節で紹介・解説

企業・大学等を対象としたアンケート調査

（主な調査項目）

- 組織的な農山漁村との交流や訪問の現状（交流の有無、概要、交流地域、頻度・規模 等）

→ 第1章第2節－3及び4で紹介・解説

- 企業研修の状況（対象、規模、頻度 等）
- 企業研修を農山漁村で行うことへの関心や可能性（関心の有無、評価する点、実現への課題 等）
- 企業研修等を実施する場合の条件や要望（受け入れ態勢、受け入れ施設・プログラム、要望 等）
- 研修以外の農山漁村との交流や利用ニーズについて（福利厚生、企業スポーツ、CSR 等）
- 農山漁村との交流の考え方や交流意向（交流意向の有無、交流の目的、期待すること 等）
- 農山漁村との交流に期待すること（組織や個人への効果 等）
- 農山漁村との交流を進めるための問題点や課題
- 今後交流を進めるために必要な情報や支援　等

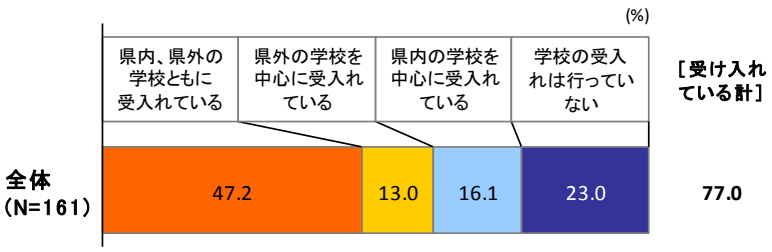
→ 第2章第2節で紹介・解説

2. 受け入れる農山漁村から見た交流の状況

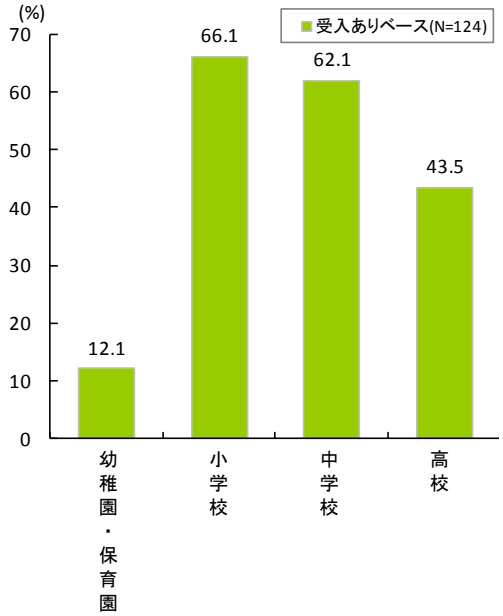
(1)学校の受入状況

- 回答した地域の77%が、幼稚園・保育園から高校までの「学校」の受入を行っている。「県内・県外ともに受け入れている」が47%と半数近くを占めた。
- 学校別では「小学校」が66%、「中学校」が62%と多く、「高校」も44%を占めた。
- 年間の受入回数は「１～４回」が33%を占めた。一方で「100回以上」も8%あり、取り組みに違いがみられる。平均回数は21.7回。
- 年間の受入人数は「100～299人」が17%、「2000～5999人」が16%と続く。一方で「100人未満」が20%、「１万人以上」が6%と、ここでもバラつきがみられる。

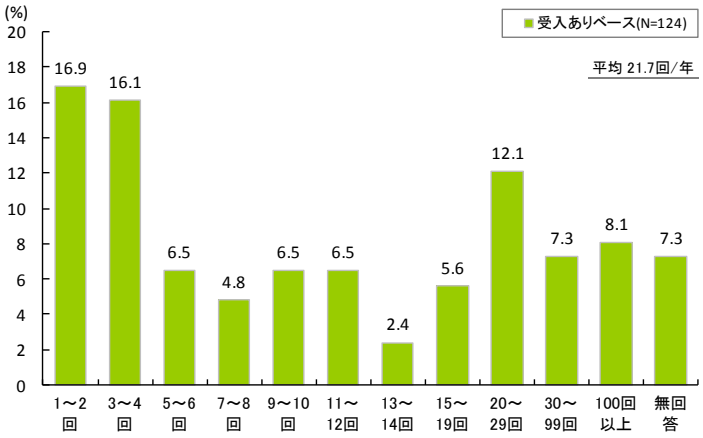
【受入状況】



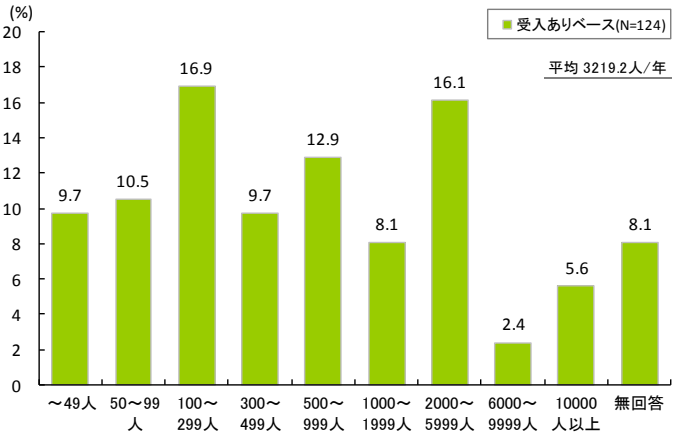
【学校別受入状況】



【年間受入回数】

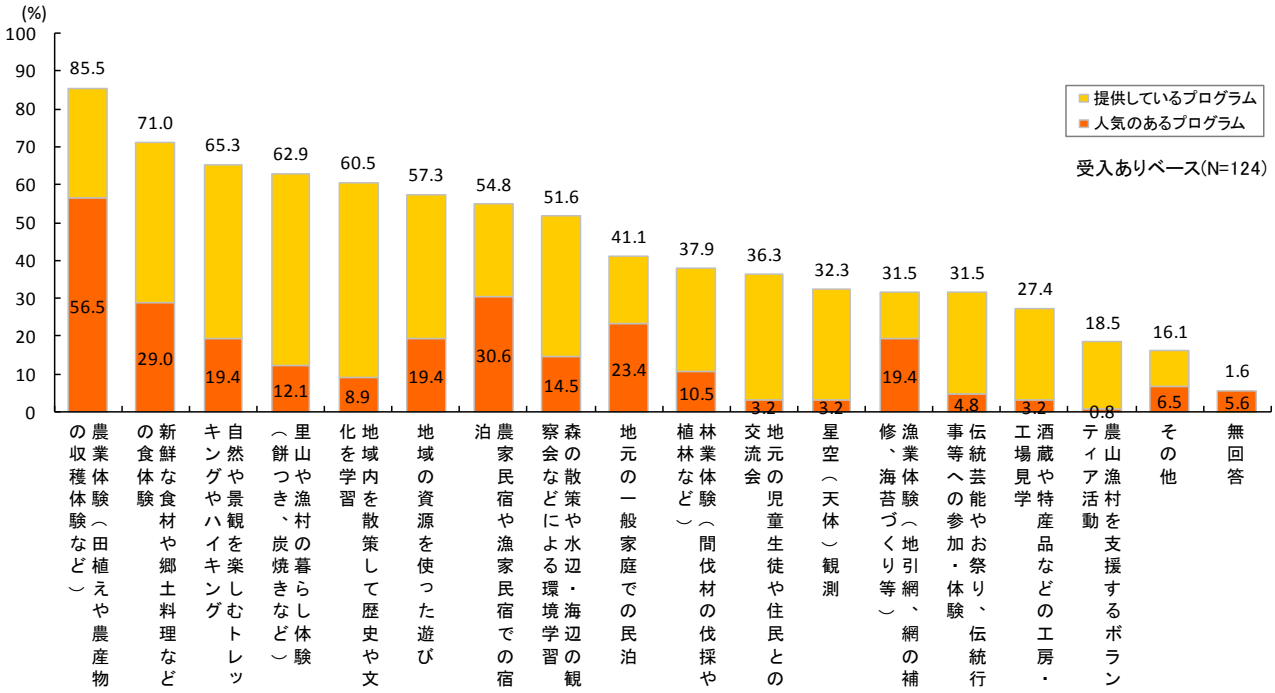


【年間受入人数】



【提供しているプログラムと人気のあるプログラム】

- 学校に提供しているプログラムとして最も多いのは「農業体験（田植えや農産物の収穫体験など）」で、全体の85.5％にのぼる。次いで「新鮮な食材や郷土料理などの食体験」や「自然や景観を楽しむトレッキングやハイキング」「里山や漁村の暮らし体験（餅つき、炭焼きなど）」「地域内を散策して歴史や文化を学習」などが60％を超える。
- 人気の高いプログラムとしても「農業体験」が最も多く、56.5％と半数を超えている。次いで提供順位は７位の「農家民宿や漁家民宿での宿泊」（30.6％）が第２位となっている。さらに「地元の一般家庭での民泊」や「漁業体験」なども提供順位の割には人気が高い。



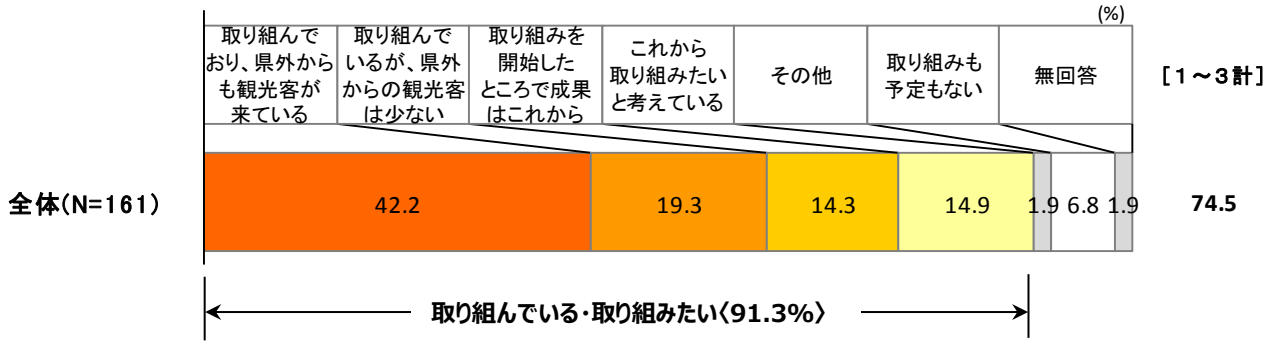
その他内訳

- 岩魚つかみどり
- 立札書き
- 、竹細工
- 漁業体験（カニ、エビ、タコ）
- 県産間伐材を用いた箸づくり
- 古民家の暮らし体験
- 震災復興支援
- 新聞バッグ教室
- 畜産体験
- 伝統工芸
- 被災地ガイド
- ピザ焼き、草木染め体験
- 平和学習、物づくり（木工・シークラフト・藍染・焼き物）
- 防災教育
- マリンスポーツ、伝統工芸
- 宿での共同調理

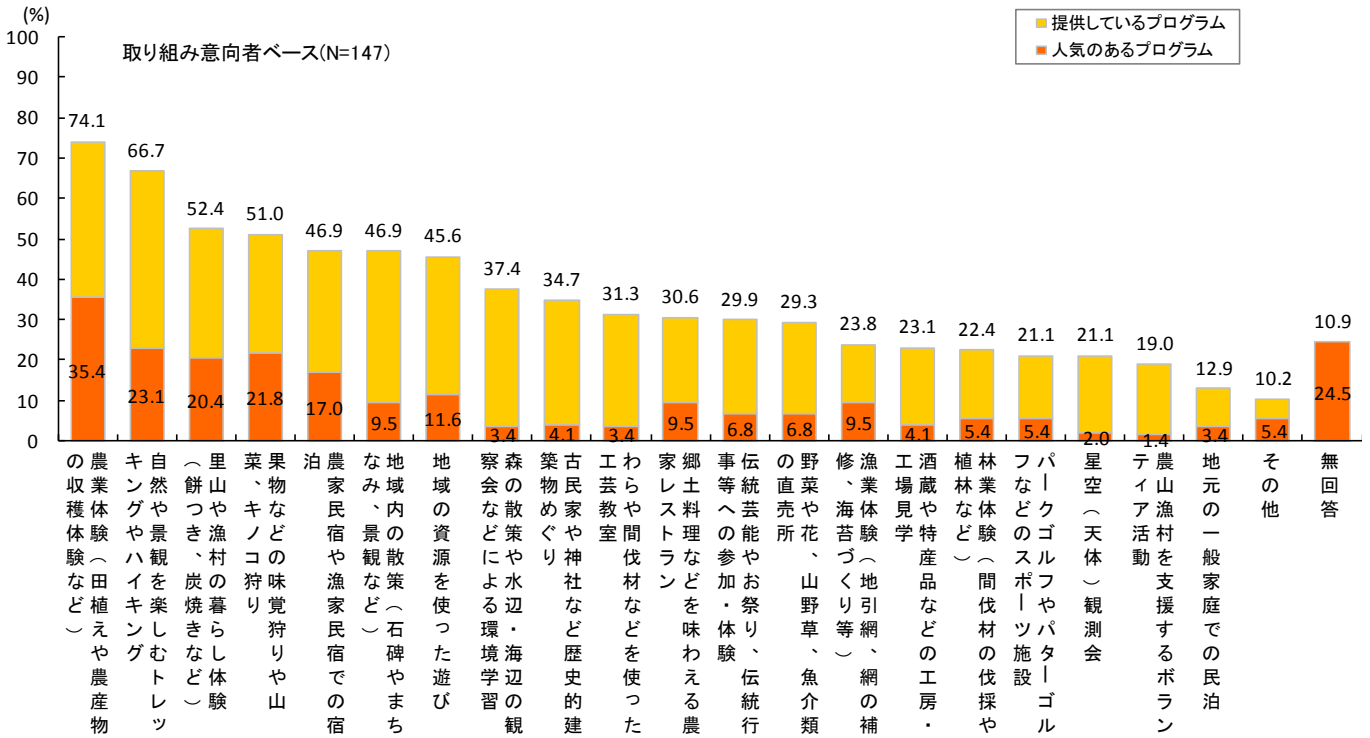
（2）都市部の生活者に対する取り組み（ファミリー、グループ、個人など）

- 都市部の生活者との交流に取り組んでいる地域は75％を占める。「これから取り組みたい」とする地域を含めると、９割以上がこの層との交流を考えている。
- 提供している体験プログラムとして最も多いのは「農業体験（田植えや農産物の収穫体験など）」（74.1％）。次いで「自然や景観を楽しむトレッキングやハイキング」（66.7％）が多く、双璧といえる。さらに、「里山や漁村の暮らし体験（餅つき、炭焼きなど）」「果物などの味覚狩りや山菜、キノコ狩り」の２項目は過半数を超える。
- 人気の高い項目も提供プログラムの順位とほぼ類似傾向を示しており、「農業体験」が最も人気の体験プログラムとなっている。

【取り組み状況】



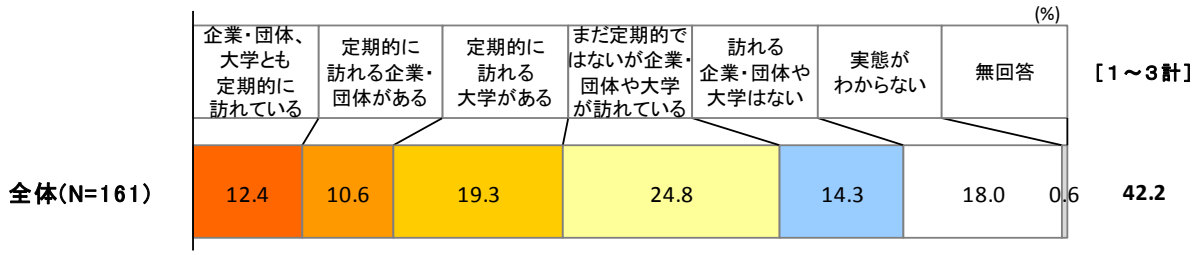
【提供しているプログラムと人気のあるプログラム】



(3)企業・大学・団体等に対する取り組み

- 都市部の企業・団体や大学が定期的に訪問・交流しているのは、回答のあった地域の42%にとどまった。しかし、「定期的ではないが、企業・団体・大学等が訪れている」とする地域が25%あり、合わせると77%となる。
- 定期、不定期を問わず、受け入れている地域に関して、受入対象を詳しくみると、最も多いのは「大学」で75%、「企業」は44%にとどまった。
- 受入社数や校数では、「１社（校）」や「２社（校）」とする地域が多く、少数の特定企業・大学等との交流が中心となっている。
- 企業・大学・団体等の訪問目的は「社員研修」が32%でトップ。以下「ボランティア活動」「サークル等の合宿」と続く。

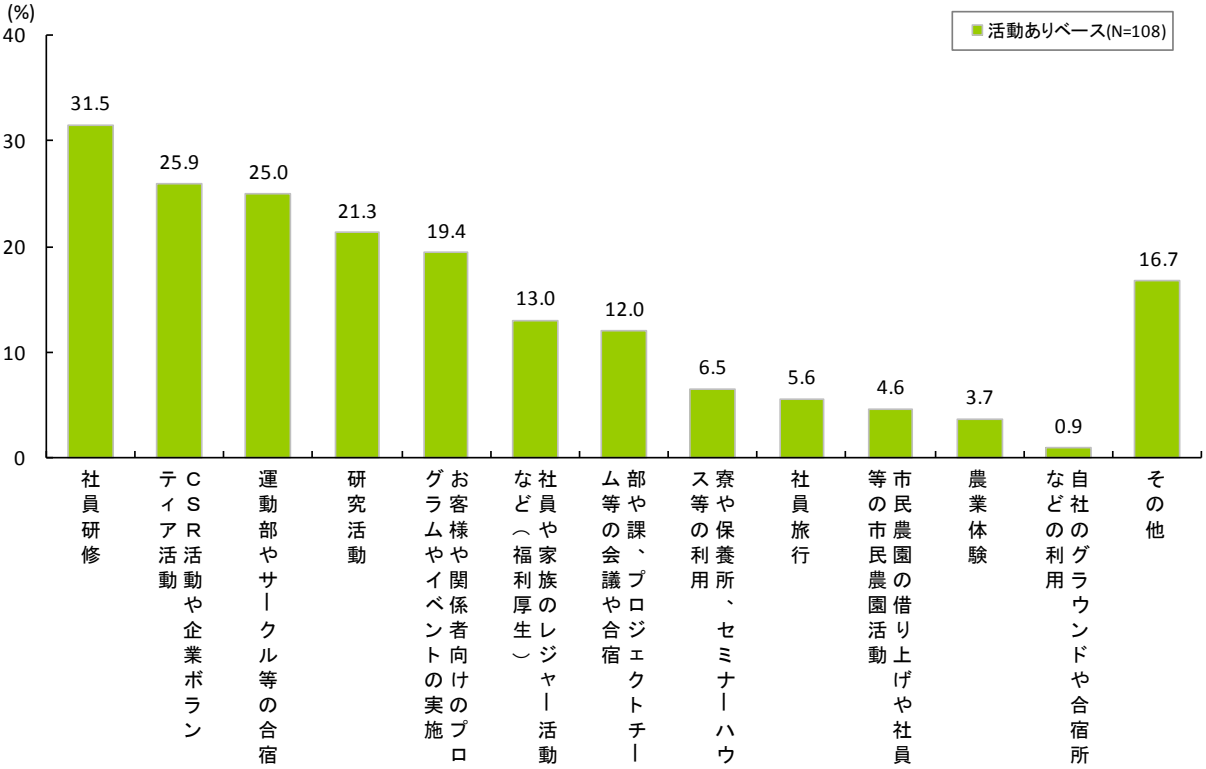
【訪問・交流の状況】



【対象別訪問動向（訪問あり地域のみ）】

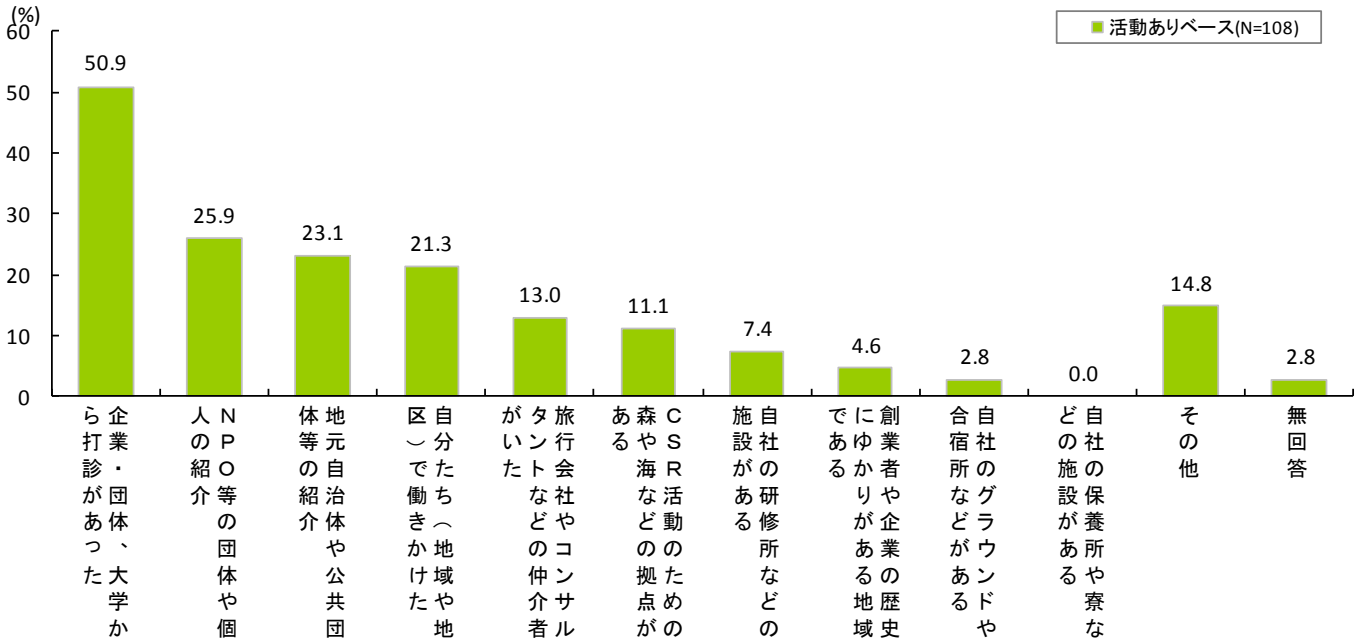
	訪問（受入）		受入社数		年間受入件数（平均）	年間受入回数（平均）
	あり	なし	1社（校）	2社（校）		
企業	44.4%	49.1%	41.7%	16.7%	4.8件	5.4回
大学	75.9%	17.6%	56.1%	15.9%	2.6件	5.1回
その他団体	31.5%	62.0%	38.2%	26.5%	5.7件	9.0回

【企業・大学等の訪問目的】

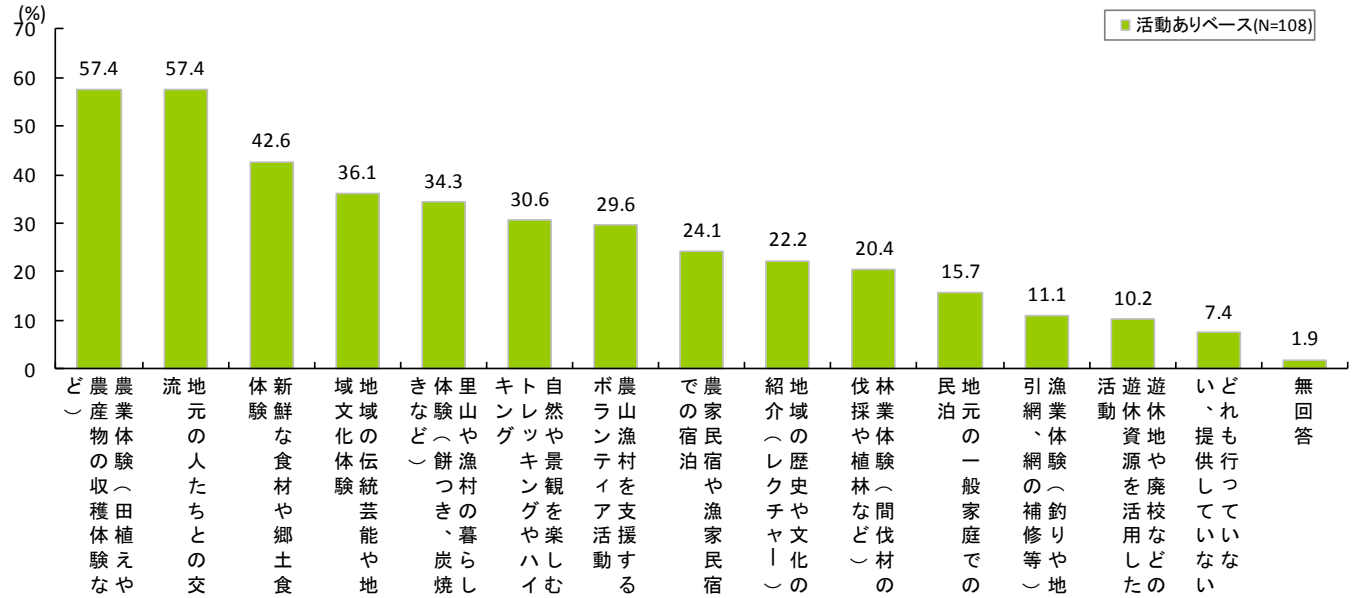


- 企業や大学、団体が訪問するきっかけとしては「企業・団体、大学から打診があった」が図抜けて高く、50.9％と過半数に達している。次いで「ＮＰＯ等の団体や個人の紹介」「地元自治体や公共団体等の紹介」「自分たち（地域や地区）で働きかけた」などが続いているが、20％台と少ない。
- 「旅行会社やコンサルタントなどの仲介者がいた」などは13.0％とまだ低い。
- 体験や交流プログラムとしては「農業体験（田植えや農産物の収穫体験など）」「地元の人たちとの交流」が双璧で、ともに57.4％と５割を超える。次いで「地域の伝統芸能や地域文化体験」「里山や漁村の暮らし体験（餅つき、炭焼きなど）」など、体験型プログラムが上位を占める。

【企業・団体・大学等の受入のきっかけ】



【提供しているプログラム】

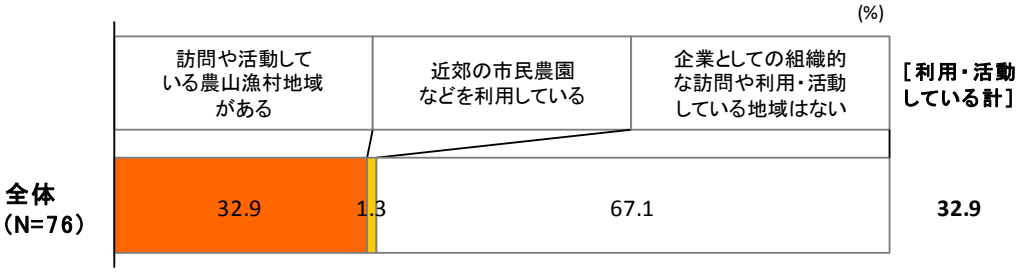


3. 企業・団体や大学等から見た交流の状況

（1）農山漁村との交流の状況

- 農山漁村を定期的に訪問して活動を行っているとする企業・大学等は回答者の３分の１（33%）にとどまる。
- 企業の規模別でみると、規模の大きい企業ほど農山漁村との交流を行っている。
- 定期的に訪問・活動しているとする企業・大学等が、農山漁村で行っている活動は、「CSR活動やボランティア活動」が最も多く68%を占めた。ついで「社員研修」（48%）、「福利厚生（レジャー活動の支援など）」（32%）が続く。

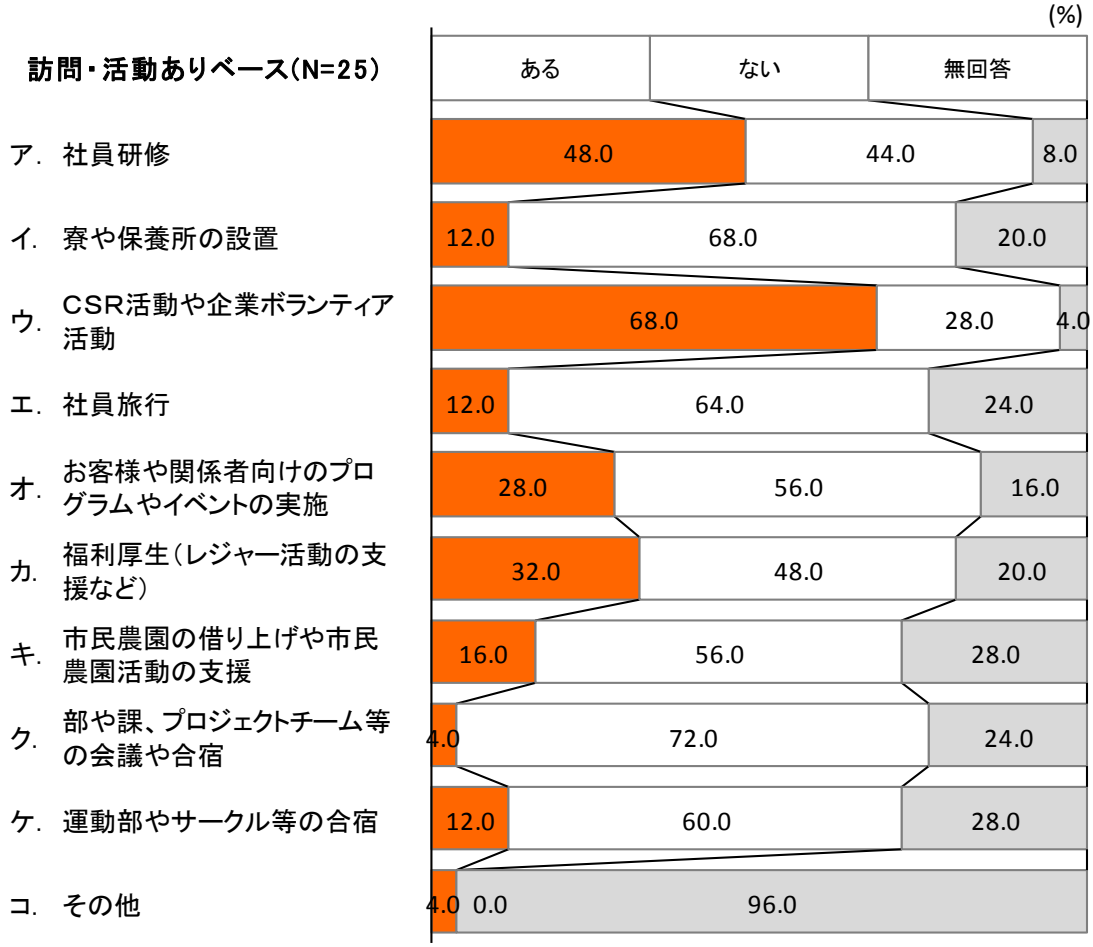
【農山漁村との交流の状況】



【規模別交流状況】

小規模（～299人）	12.0%
中規模（300～2999人）	28.6%
大規模（3000人以上）	64.3%

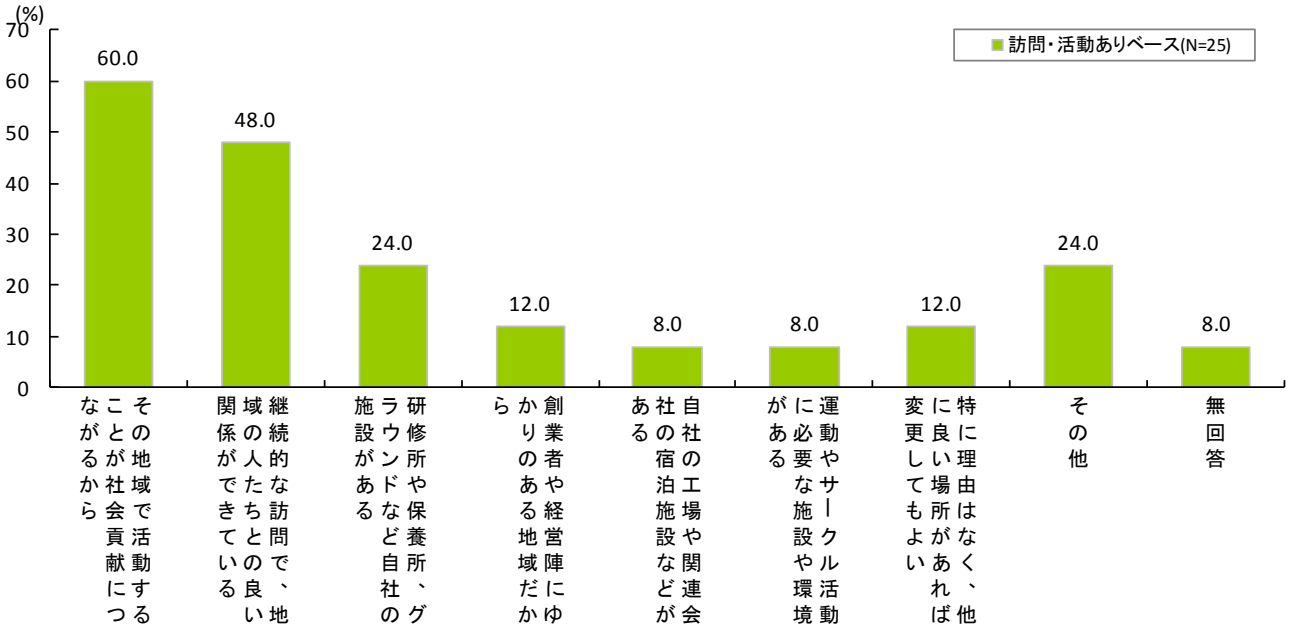
【訪問・活動の種類】



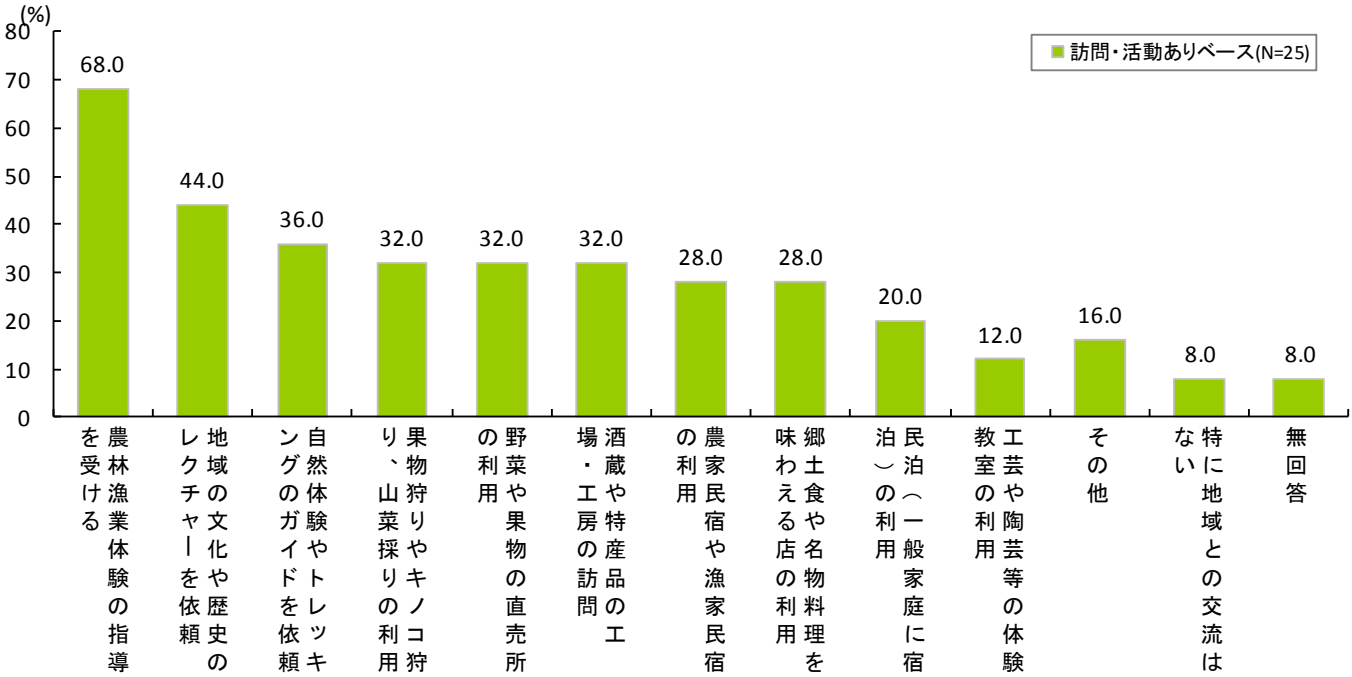
(2)農山漁村の選択理由と活動

- 訪問・活動の理由として最も多いのは「その地域で活動することが社会貢献につながるから」が60.0%。次いで「継続的な訪問で、地域の人たちとの良い関係ができている」（48.0%）と、この２つが双璧といえる。
- 「特に理由はなく、他に良い場所があれば変更してもよい」という企業も12.0%を占める。
- 訪問している農山漁村での交流活動としては、「農村漁業体験の指導」が68%を占めトップ。以下「地域の文化や歴史のレクチャー」（44%）、「自然体験やトレッキングのガイド」（36%）が続く。３位以降は30%台で差がなく続いており、多様な交流活動が行われている。

【現在の訪問地の選択理由】



【農山漁村で行っている交流活動】



4. 企業・団体や大学等と農山漁村の交流活動の現状について

①学校教育の受入に比べて、まだ企業・大学等との定期的な交流活動は少ない。

・今回の調査では、学校教育の受入を行っている地域は77%に達した。味覚狩りや収穫体験など、観光やレジャーで都市部の生活者を受け入れている農山漁村は75%と多い。

・一方で企業・団体や大学等については、定期受入は42%にとどまり、不定期と合わせても67%にとどまった。

【対象別にみた農山漁村の受入状況】

学校教育	都市部の生活者	都市部の企業・大学等
（受入実施）　77%	（受入実施）　75%	（定期受入）　42% （不定期受入）　25%

②地域資源を活用して、対象に合わせて多様な体験プログラムを提供している。

・全国の農山漁村が提供する体験交流プログラムは、資源が似通っているために大きな差はないが、受け入れる対象に合わせてプログラム内容を変えている。

・例えば学校教育では地域の文化や歴史を知る学習が盛り込まれている。同様に、都市部の生活者（家族やグループ）にはレジャー性の高いプログラム、企業・大学生には地元の人との交流やボランティア活動などが盛り込まれるという傾向がみられる。

【提供しているプログラム（上位7項目）】

（　）内は%

順位	学校教育		都市部の生活者		都市部の企業・大学等	
1位	農業体験	(86)	農業体験	(74)	農業体験	(57)
2位	食体験	(71)	トレッキングやハイキング	(67)	地元の人との交流	(57)
3位	トレッキングやハイキング	(65)	暮らし体験	(52)	食体験	(43)
4位	暮らし体験	(63)	味覚狩りや山菜採り	(51)	地域文化や芸能体験	(36)
5位	地域の歴史や文化学習	(61)	農家民宿等での宿泊	(47)	暮らし体験	(34)
6位	地域の資源を使った遊び	(57)	地域内の散策	(47)	トレッキングやハイキング	(31)
7位	農家民宿等での宿泊	(55)	地域の資源を使った遊び	(46)	ボランティア活動	(30)

▼

【人気プログラム（上位5項目）】

順位	学校教育		都市部の生活者	
1位	農業体験	(56)	農業体験	(35)
2位	農家民宿等での宿泊	(31)	トレッキングやハイキング	(23)
3位	食体験	(29)	味覚狩りや山菜採り	(22)
4位	地元家庭での民泊	(23)	暮らし体験	(20)
5位	トレッキングやハイキング 漁業体験、遊び	(19)	農家民宿等での宿泊	(17)

第2章

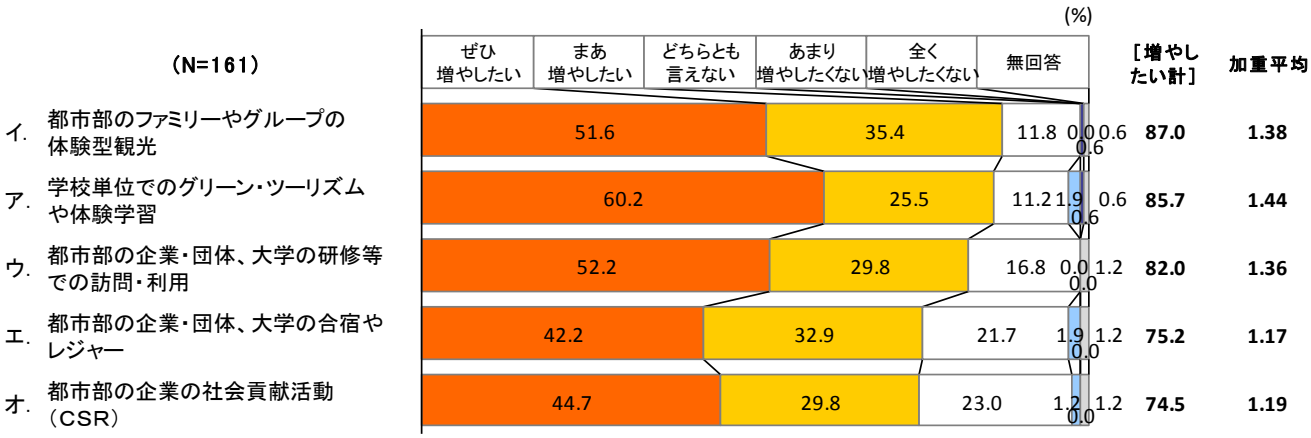
農山漁村と企業・大学等の交流意識について
（農山漁村調査及び企業・大学等調査の結果より）

第1節　農山漁村における大学・企業等の交流意識

1. 農山漁村における企業・大学等との交流活動に対する意識

- 都市部との交流活動はほとんどのテーマで増やしたいと考えており、７割を超える。その中で、『ぜひ増やしたい』という人が最も多いのは「学校単位でのグリーン・ツーリズムや体験学習」で60.2％、『まあ増やしたい』を合わせれば、85.7％、加重平均で1.44と第１位にある。次いで「都市部のファミリーやグループの体験型観光」で増やしたい計が上回るものの、加重平均は1.38で２番目に重視されている。
- 交流活動を増やしたいとする回答者がほとんどであり、その理由としては「地域の活性化につなげたい」「交流人口の増加」「経済効果に期待」が続いている。

【今後増やしたい都市部との交流活動】



【増やしたい理由】

- 地域の活性化につなげたい ･････････ 44件
- 交流人口の増加 ･････････････････23件
- 経済効果に期待 ･････････････････19件
- 継続性が高い、将来への投資として･･･ 18件
- 地域の自然・生活を知ってほしい ･････12件
- 地域住民の意識改革になる （元気になる等）････ 8件
- 地域、施設の有効活用 ･････････････････････ 6件
- 地域のプロジェクトと合っている ･････････････････6件
- オフシーズン（修学旅行時以外等）の有効活用･･･ 4件
- 学習に役立ててほしい ･････････････････････3件
- 団体の方が受け入れやすい･････････････････････2件
- 環境保全につながる ･････････････････････2件

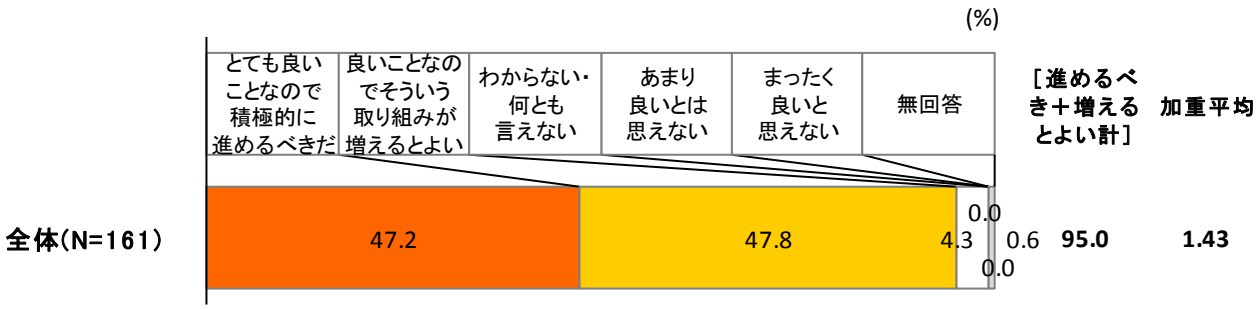
[否定]
- 受け入れ体制に不安（高齢化等）････11件
- その他 ･････････････････････････ 6件

2. 農都交流プロジェクトに対する評価

※ 農都交流プロジェクト＝都市型企業等が特定の農山漁村と連携し、一過性の観光ではない体験・交流活動を継続的かつ組織的に行う取り組み。双方の抱える課題解決をめざす。

- 「農都交流プロジェクト」の考え方やパンフレット等を提示して、その評価を訪ねたところ、「積極的に進めるべき（47%）」「取り組みが増えるとよい（48%）」と、95%の回答者が好意的に評価した。
- 好意的な評価の理由としては、「地域活性化」がトップを占めたほか、「双方のメリットになる」「継続性に期待」など、従来の観光型交流とは異なる点が評価のポイントとなっている。
- なお「不安」に思うとする意見では「受入体制に不安がある」とする意見が多かった。

【「農都交流プロジェクトに対する評価】



【「農都交流プロジェクト」への評価理由】

[肯定的意見]
- 地域活性化になる ･････････････････････････ 34件
- 双方にメリット、互いのニーズに合っている ･････････ 25件
- 継続性に期待 ･････････････････････････････19件
- 交流につながる、交流から得られる効果に期待 ･････ 19件
- 新たな事業、安定した経済効果につながる ････････ 19件
- 農山漁村の将来につながる ･････････････････････8件
- 環境等の地域資源を活かせる、その保全につながる ････6件
- 効果・成果があると思う ･････････････････････････ 5件
- 自分達では連携先を探すことが困難 ･････････････ 5件
- 地域の取り組む方向性と一致している ･････････････ 4件

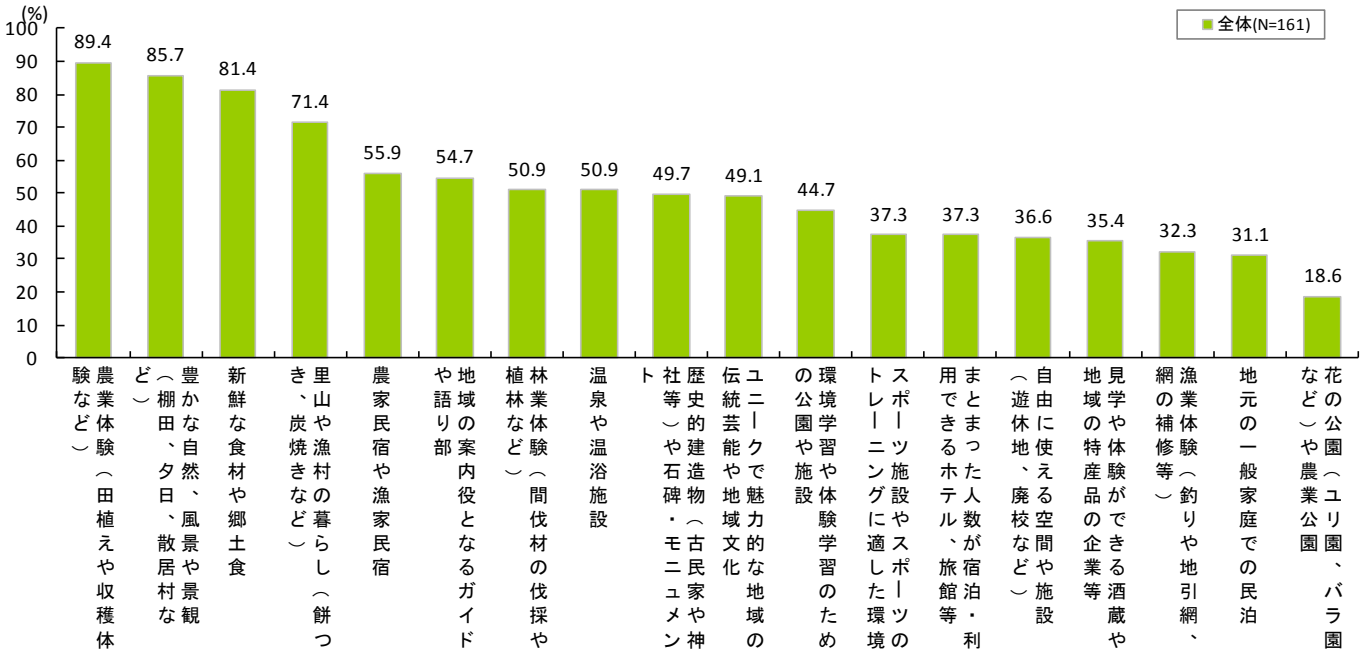
[否定的意見]
- 受け入れ体制に不安 ･････････････････････････ 7件
- 継続性に不安 ･････････････････････････････1件
- 指導者の不在 ･････････････････････････････1件

- その他 ･････････････････････････････････････ 3件

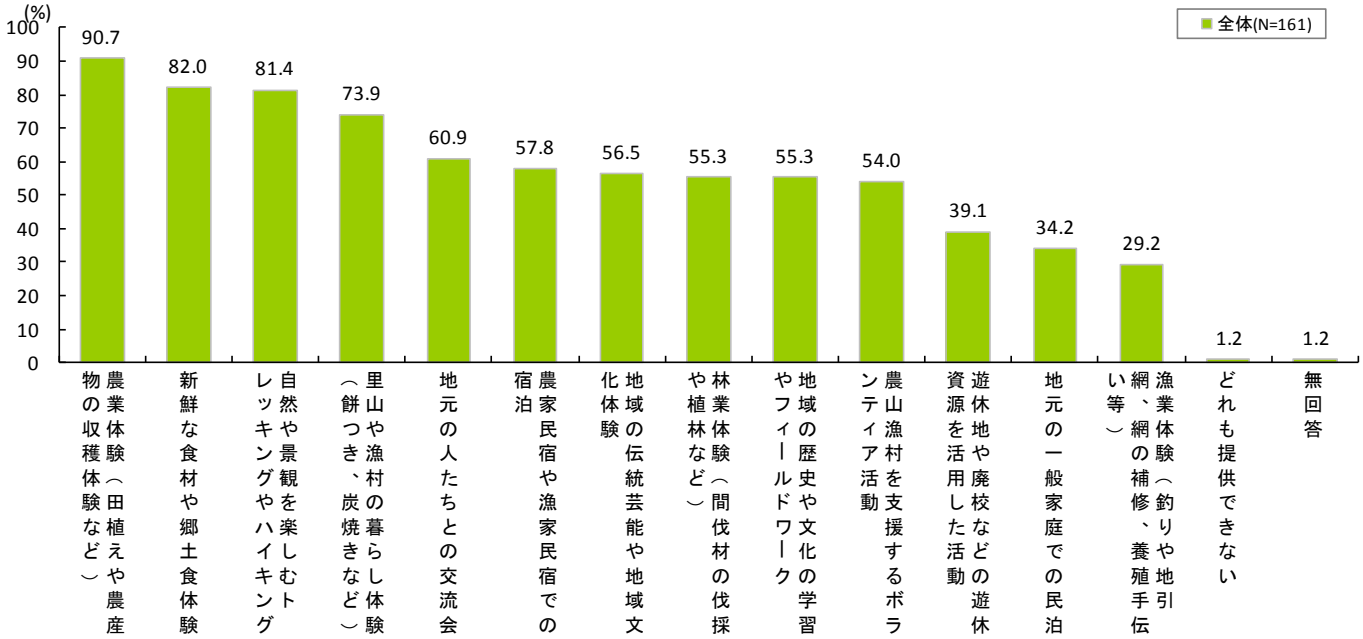
3. 交流のための資源と提供プログラム

- 交流のための資源は当然とはいえ、提供プログラムとの相関は高く、最も多い「農業体験」（89.4%）をはじめ、「豊かな自然、風景や景観（棚田、夕日、散居村など）」「新鮮な食材や郷土食」「里山や漁村の暮らし（餅つき、炭焼きなど）」が続き、７割を超える。
- 提供できる体験やプログラムとしては「農業体験」や「新鮮な食材や郷土食体験」「自然や景観を楽しむトレッキングやハイキング」など、期待の高いプログラムが８割を超えている。それ以外でもほとんどが５割を超えており、ポテンシャリティは高いといえる。

【交流のための地域資源】



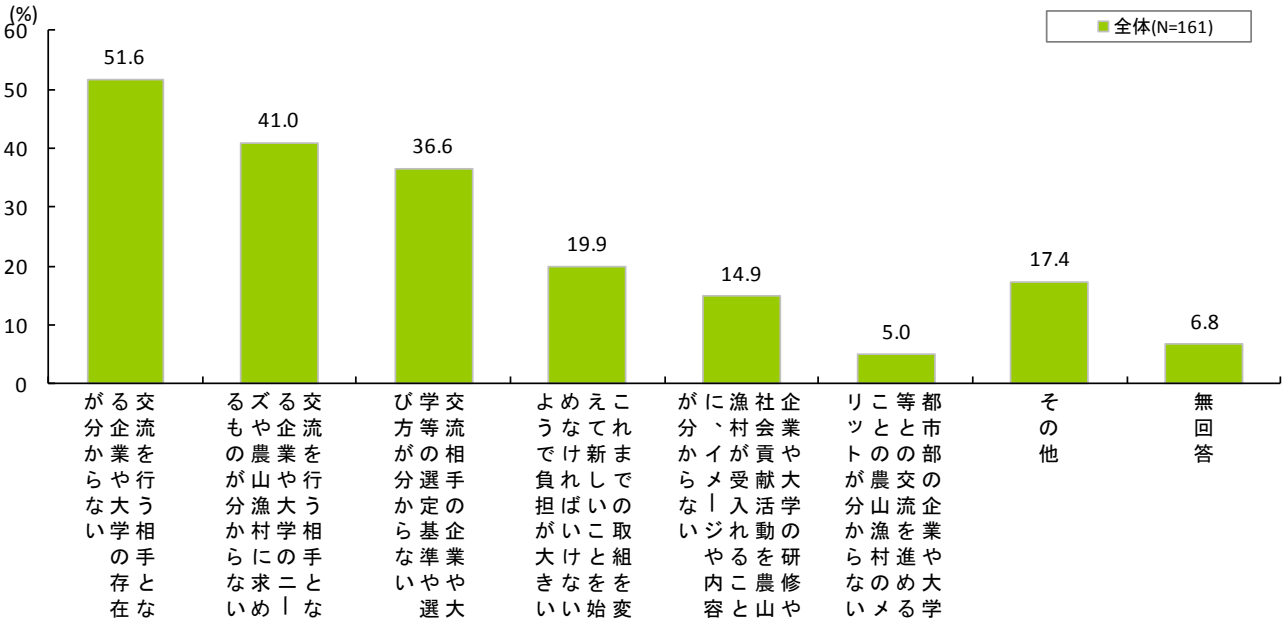
【企業・大学等との交流に提供できるプログラム】



4. 交流活動を進める上での問題点・課題

- 問題点・課題として最も多いのは「交流を行う相手となる企業や大学の存在が分からない」という地域で、51.6%と半数強を占める。次いで「交流を行う相手となる企業や大学のニーズや農山漁村に求めるものが分からない」「交流相手の企業や大学等の選定基準や選び方が分からない」と続いている。
- 「都市部の企業や大学等との交流を進めることの農山漁村のメリットが分からない」や「企業や大学の研修や社会貢献活動を農山漁村が受入れることに、イメージや内容が分からない」という地域は少ない。
- 自由回答では「コーディネート」や「マッチング」を希望する意見が多い。また、「企業のニーズを知りたい」「もっと農山漁村をＰＲしてほしい」といった声もみられる。

【交流活動を進める上での問題点・課題】



その他内訳

- 継者不足、受入農家の減少 ････ 8件
- 企業と地域の仲介役、専門者がいない ･･････7件
- 受入体制が不十分 ･･････････････････6件
- 経済効果の仕組み ･･････････････････ 3件
- 資金不足 ･･････････････････････････3件
- 住民との合意 ･･････････････････････2件
- 交通手段 ･･････････････････････････ 2件
- 風評被害 ･･････････････････････････ 2件
- インフラの不整備 ･･････････････････ 1件
- 保険 ･･････････････････････････････ 1件
- 情報発信、PR ･･････････････････････1件
- 継続性の不安 ･･････････････････････1件

【自由回答】

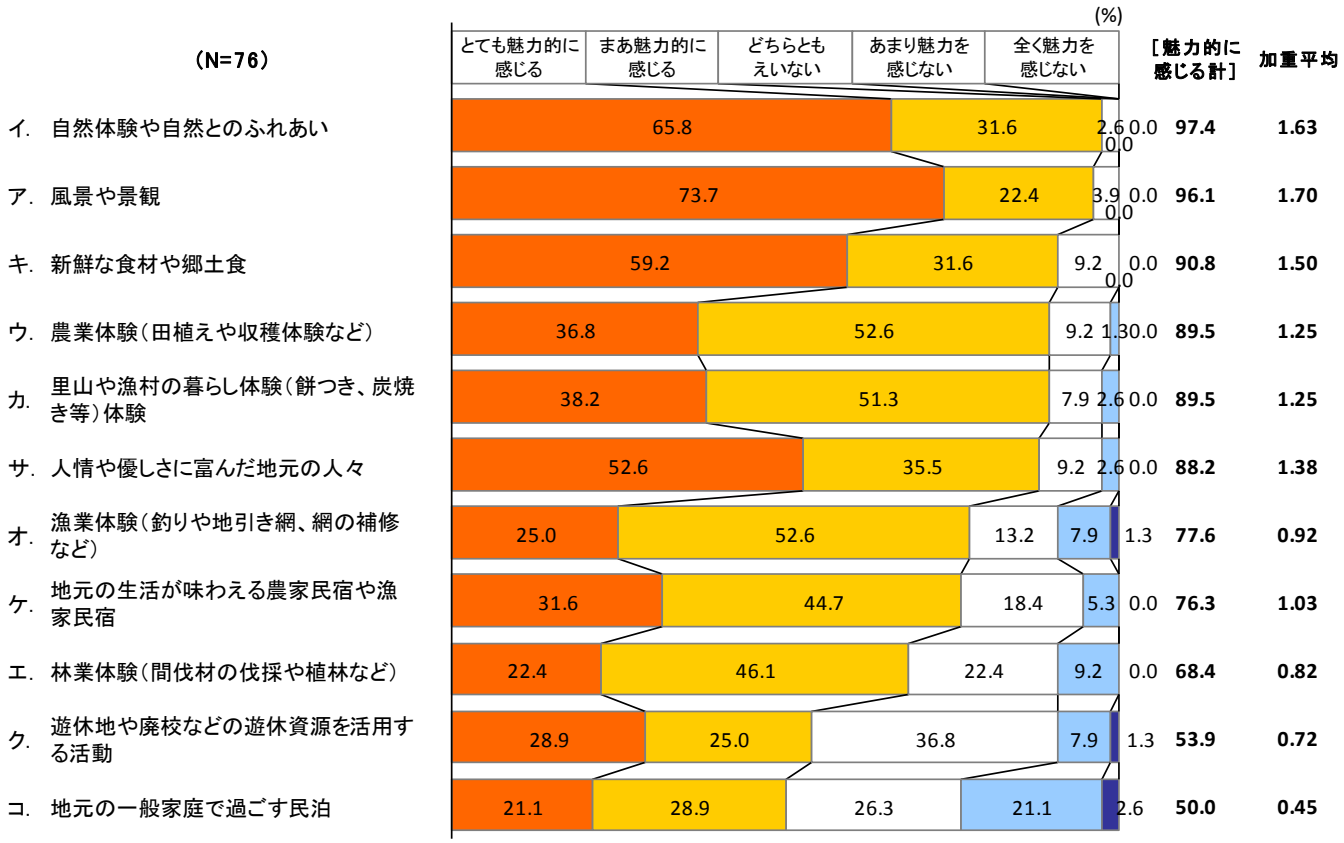
- ニーズに合わせたプログラム作成等に協力してほしい、コーディネートをしてほしい ･･････････････････ 12件
- 継続的な活動にしてもらいたい ･･････････････････ 9件
- 企業・学校側を紹介してほしい、マッチングをしてほしい ･･････････････････････････････････ 6件
- 交流がうまくいくために、もっと支援してほしい･･････ 6件
- 企業・大学側のニーズを知りたい ･･････････････ 5件
- 今取り組んでいる交流を、もっと広げていきたい ･･･ 5件
- もっと田舎に来てほしい、田舎生活を体験してほしい ･4件
- とても重要な取り組みである、もっとすすめてほしい ･･･3件
- もっとPRしていきたい、PRしてほしい ･･････････････3件
- 企業が農山漁村とどんな交流をしたいのか疑問である ･･ 2件
- 生業として農漁業をしている側には、交流は難しい ･････ 1件
- 風評被害払拭のアドバイスがほしい ･･････････････ 1件
- いろいろと課題がある ･･････････････････････1件
- 手続きを簡素化してほしい ･･････････････････ 1件
- 長期休暇制度を導入してほしい ･･････････････････1件
- その他 ･･････････････････････････････････ 3件

第2節　企業・大学等における農山漁村との交流意識

1. 農山漁村の有する地域資源の魅力度

- 地域資源に関しては肯定評価が全て過半数を上回る。その中で最も評価が高いのは「自然体験や自然とのふれあい」や「風景や景観」で９割と大きく上回る。特に「風景や景観」は『とても魅力的に感じる』と積極的な評価をする人が多い。次いで「新鮮な食材や郷土食」「農業体験（田植えや収穫体験など）　」「里山や漁村の暮らし体験（餅つき、炭焼き等）体験」などが９割内外を占める。
- 評価が低いのは「地元の一般家庭で過ごす民泊」や「遊休地や廃校などの遊休資源を活用する活動」だが、これらは『どちらともいえない』と判断基準のあいまいな人も多い。

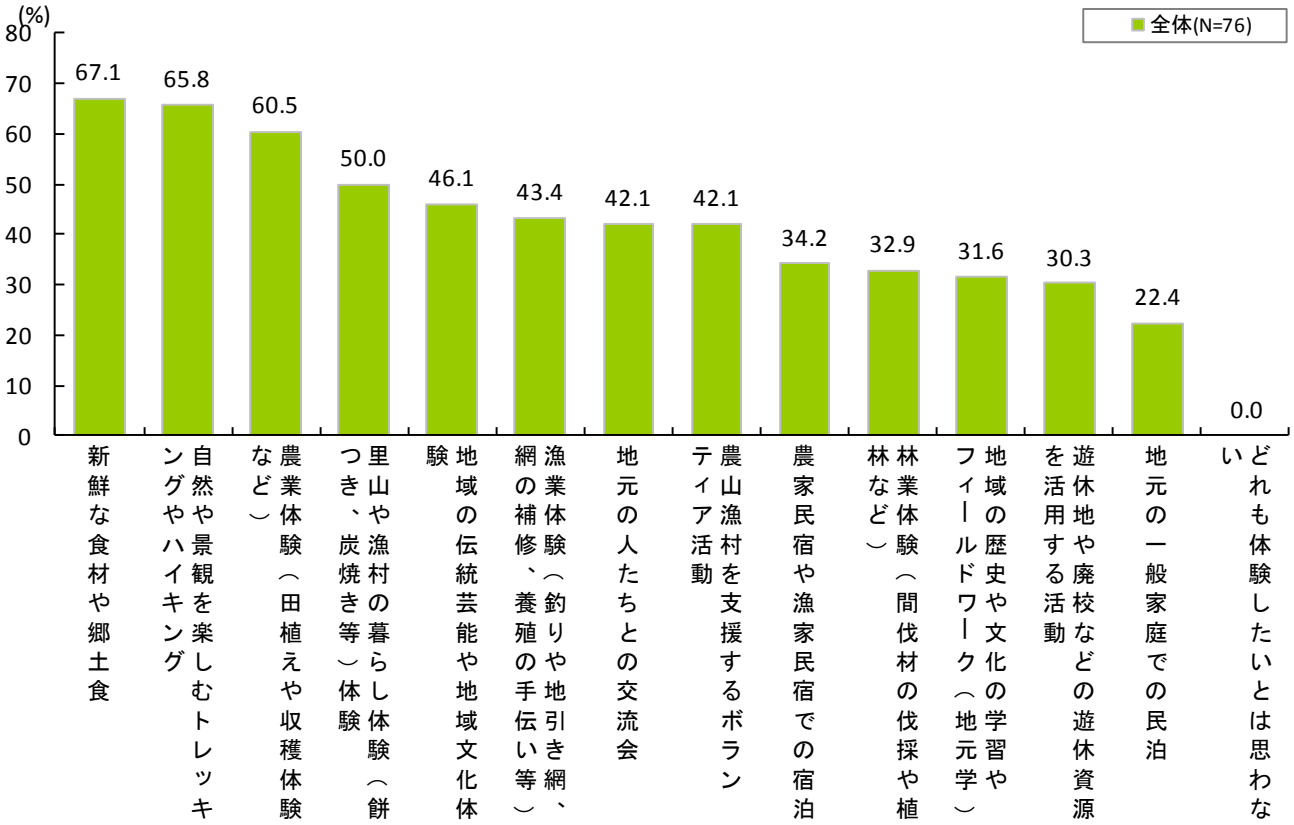
【地域資源の魅力度】



2. 農山漁村で体験してみたいプログラム

- 大学・企業等の関心・体験したいプログラムとして最も多いのは「新鮮な食材や郷土食」で、次いで「自然や景観を楽しむトレッキングやハイキング」や「農業体験（田植えや収穫体験など）」など、いずれも６割を超える。
- 逆に評価が低いのは「地元の一般家庭での民泊」で、「農家民宿や漁家民宿での宿泊」に比べ関心は低い。ただし「どれも体験したいとは思わない」という人は皆無である。
- その他プログラムでは「新しい郷土食の共同開発」「エネルギー自給（小水力発電）」「家具づくり、井戸づくり」など、都市ではできない体験への期待が挙げられている。

【関心がある・体験したいプログラム】



【その他期待するプログラム（自由回答）】

- 新しい郷土食の共同開発
- エネルギー自給（小水力発電など）
- 家具づくり、井戸づくり
- 子どもたちを集めて、自然の中で高齢者と触れ合い、昔の遊びを教えてもらう。"時計のない"生活体験ツアー。電子機器を使わない生活体験。景観を楽しむ（写生・撮影）。森や広大な土地を活かした参加型ゲーム。キャンプファイアーを囲んで交流会
- 社員旅行
- 素材が実際に出荷・商品化されるまでの流れ
- 田植え・野菜づくりに携わり、収穫されたもので料理、バーベキューなど。乗馬、野生動物の保護活動
- 東北であれば、東日本大震災に関する学習会等を、生産者が実際に体験したことを聞くこと
- 牧場暮らしのプログラムおよび他力思想に基づく様々な先進的プログラム
- 私たちの文化や得意分野を紹介する場があると、相互理解が深まり、新しい何かが生まれるきっかけになるかもしれないと思う

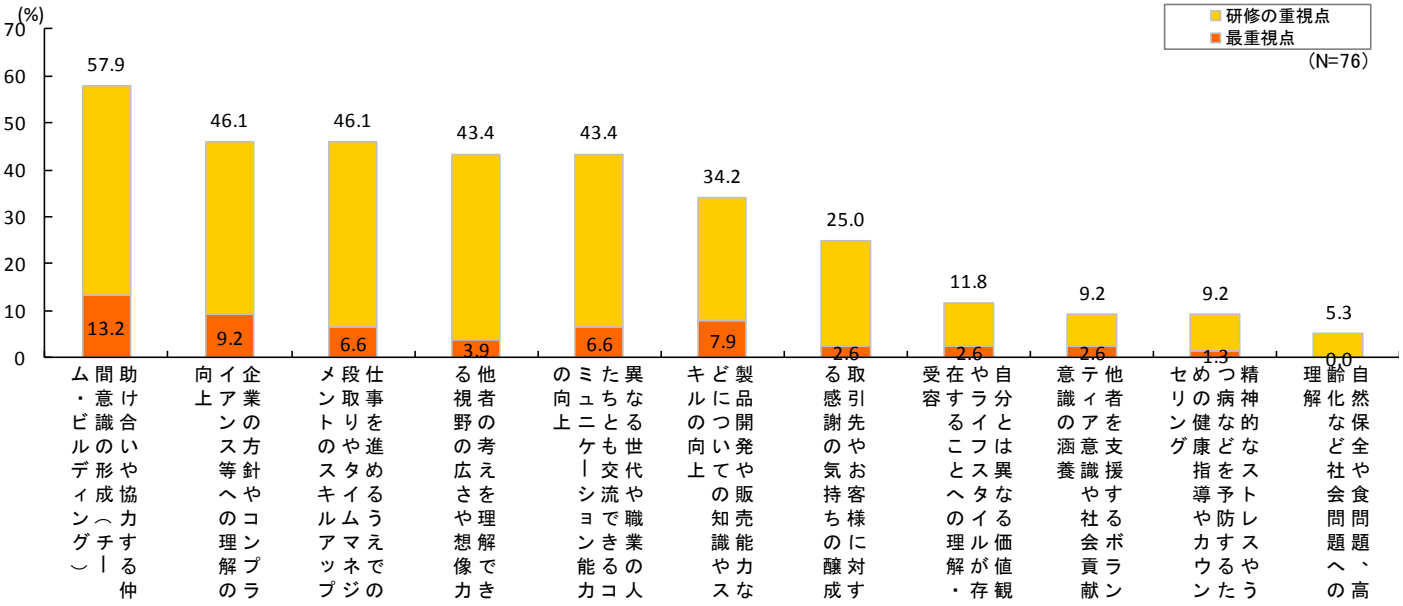
3. 人材育成や研修等における重視点と利用できそうなプログラム

- 企業・大学等が研修を行う際の重視点としては「助け合いや協力する仲間意識の形成（チーム・ビルディング）」を挙げる人が58%を占めた。以下次のように続く。

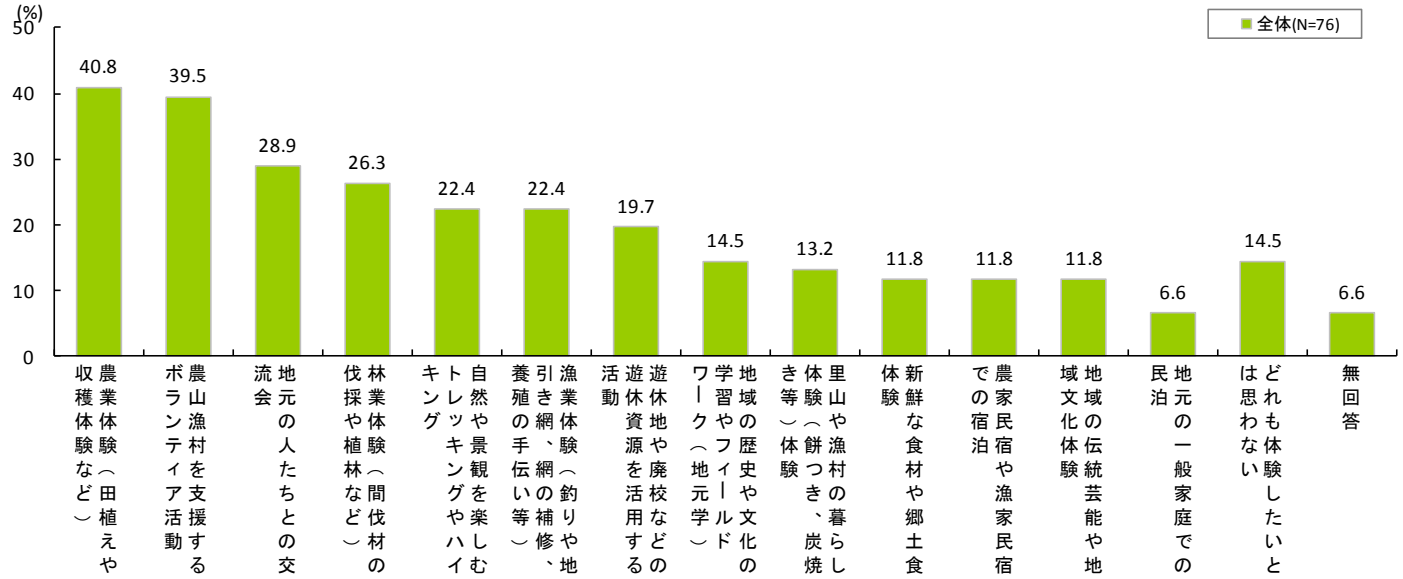
  2位「企業の方針やコンプライアンス等への理解の向上」（46%）
  2位「仕事を進めるうえでの段取りやタイムマネジメントのスキルアップ」（46%）
  4位「他者の考えを理解できる視野の広さや想像力」（43%）
  4位「異なる世代や職業の人たちとも交流できるコミュニケーション能力の向上」（43%）

- 上記の主要５項目はいずれも40%を超えており、また最も重視する項目としても「助け合いや協力する仲間意識の形成」を筆頭にいずれも上位にある。
- 人材育成や研修に利用できそうなプログラムとしては、「農業体験（田植えや収穫体験など）」と「農山漁村を支援するボランティア活動」が双璧といえる。次いで「地元の人たちとの交流会」「林業体験（間伐材の伐採や植林など）」などが上位にある。

【人材育成・社員研修の重視点】



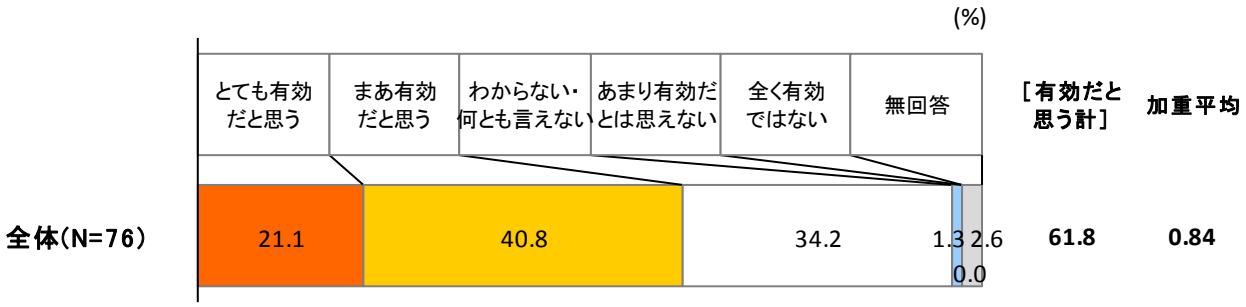
【人材育成・研修活動に利用できそうなプログラム】



4. 農山漁村での研修活動等に対する意識

- 人材育成や研修活動を農山漁村で行うことについては「とても有効」（21%）、「まあ有効」（41%）と、62%が有効だと評価した。一方で、34%が「わからない、何ともいえない」と答えており、農山漁村での活動に対してイメージできない企業関係者が多い。
- 「農都交流プロジェクト」の考え方に対しては、74%が「良いことだ」と評価している。「良い」とする理由は「地域活性化」や「人材育成に有効」などが挙げられた。否定的な意見は少ないが「わからない、何ともいえない」の理由で「メリットや効果が分からない」とする意見が多かった。

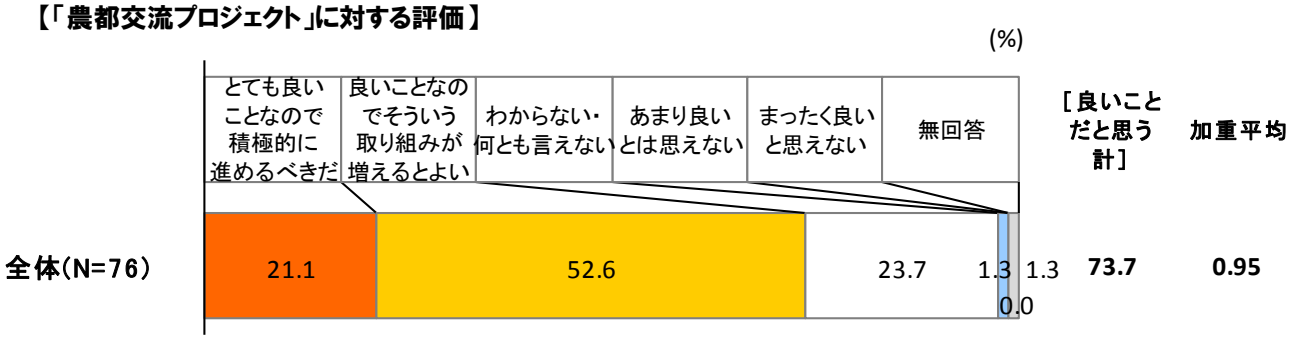
【農山漁村での研修活動に対する考え方】



（有効だと思う理由）

- 異文化体験 …… 12件
- 生産の大変さを知る …… 9件
- コミュニケーション能力の向上…… 6件
- きづき体験 …… 6件
- 人間性・感受性の向上 …… 6件
- 社会貢献、ボランティア精神 ……5件
- 視野・視点の拡大……5件
- リフレッシュ …… 4件
- 農山村と都市のつながり、サプライチェーンを知る ……3件
- 互いの補完、相互理解の促進 …… 3件
- 環境教育 …… 2件
- 地域の活性化 …… 2件
- チームワーク醸成 ……2件
- 適応能力発見 …… 1件

【「農都交流プロジェクト」に対する評価】



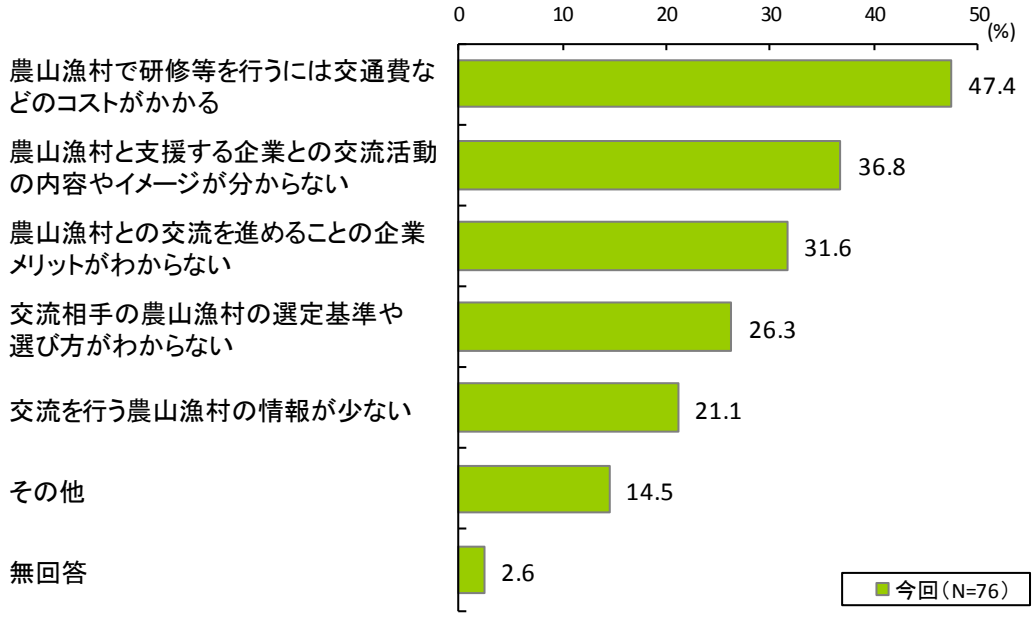
（肯定的評価の理由）

- 地域活性化、復興支援 …… 9件
- 人材育成・人間形成に役立つ …… 9件
- 社会貢献として …… 5件
- 互いの補完、双方にメリット …… 5件
- ビジネスのヒントになる、業務活性化につながる ・・・ 5件
- 都市ではできない課題・体験を知る ……5件
- 効果がある、可能性がある …… 3件
- 産地学習になる ……3件
- 農村との交流、コミュニケーションになる ・・・ 3件
- 視野・視点の拡大 ……3件
- 複数のプロジェクトから選べる ……2件
- 格差の解消 ……1件
- 日本の成長につながる …… 1件

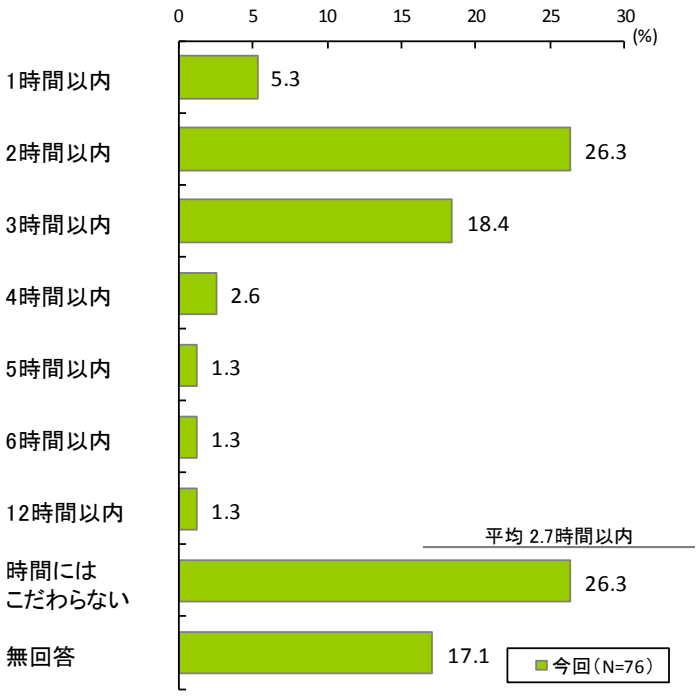
5. 農山漁村との交流を進める上での問題・課題

- 都市型企業が農山漁村との継続的な交流活動を行うための問題点・課題としては「農山漁村で研修等を行うには交通費などのコストがかかる」を挙げる人が最も多く、47.4%と半数近い。
- 次いで「農山漁村と支援する企業との交流活動の内容やイメージが分からない」や「農山漁村との交流を進めることの企業メリットがわからない」などが30%台で続いている。
- 交流する農山漁村までの所要時間では「２時間以内」（26%）、「３時間以内」（18%）が多い（平均2.7時間以内）。一方で「時間にはこだわらない」とする回答も26%を占めた。

【農山漁村との交流活動を進める上での課題】



【交流する農山漁村までの所要時間】



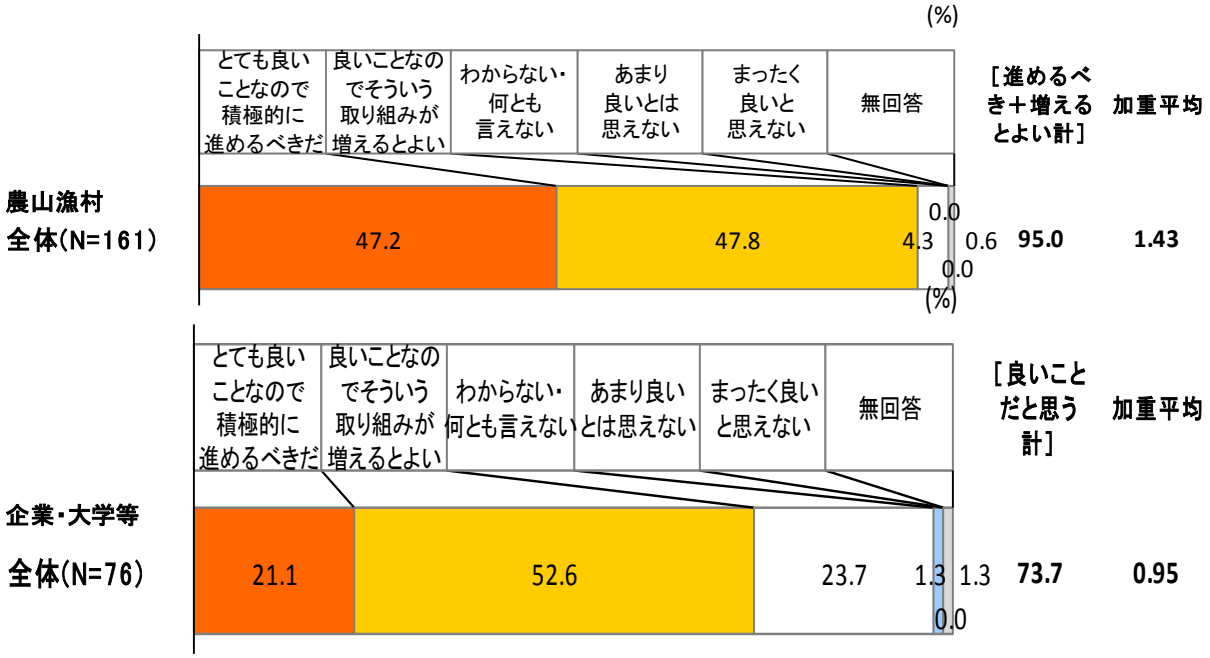
【その他意見・感想】

- 推進してほしい ･････････････････ 7件
- 参加・実行は難しい ･････････････････6件
- 企業側のメリットが不明 ･････････････6件
- 明確な目的・手段がほしい ･････････ 6件
- コスト等の課題が大きい ･････････････3件
- 社員の意識向上につながる ･････････3件
- 事例紹介のセミナーやモデルの紹介をしてほしい･････････････････････ 3件
- 協力している、参加していきたい ･････ 2件
- 新人研修に向いている ･････････････ 2件
- 時期尚早 ･････････････････････ 2件
- ビジネスにつながる提案がほしい ･････ 1件
- 異業種間交流の場としてほしい ･････ 1件

第3節　意識調査に見る交流促進のための課題と方向性

① 企業・大学等及び農山漁村の双方ともに、都市と農山漁村の交流（農都交流）について「良いことだ」と評価している。

都市部の企業・大学等と農山漁村が、一過性の観光ではなく、農山漁村の資源を活用しながら継続的・定期的に交流し、双方の抱える課題解決につなげる「農都交流」の考え方に対して、農山漁村は95%、企業・大学等は74%が「良いことだ」と肯定的に捉えている。



② 受入側である農山漁村に比べて、企業・大学等では「わからない、何ともいえない」と態度を保留する人が多く、双方には若干の温度差がある。

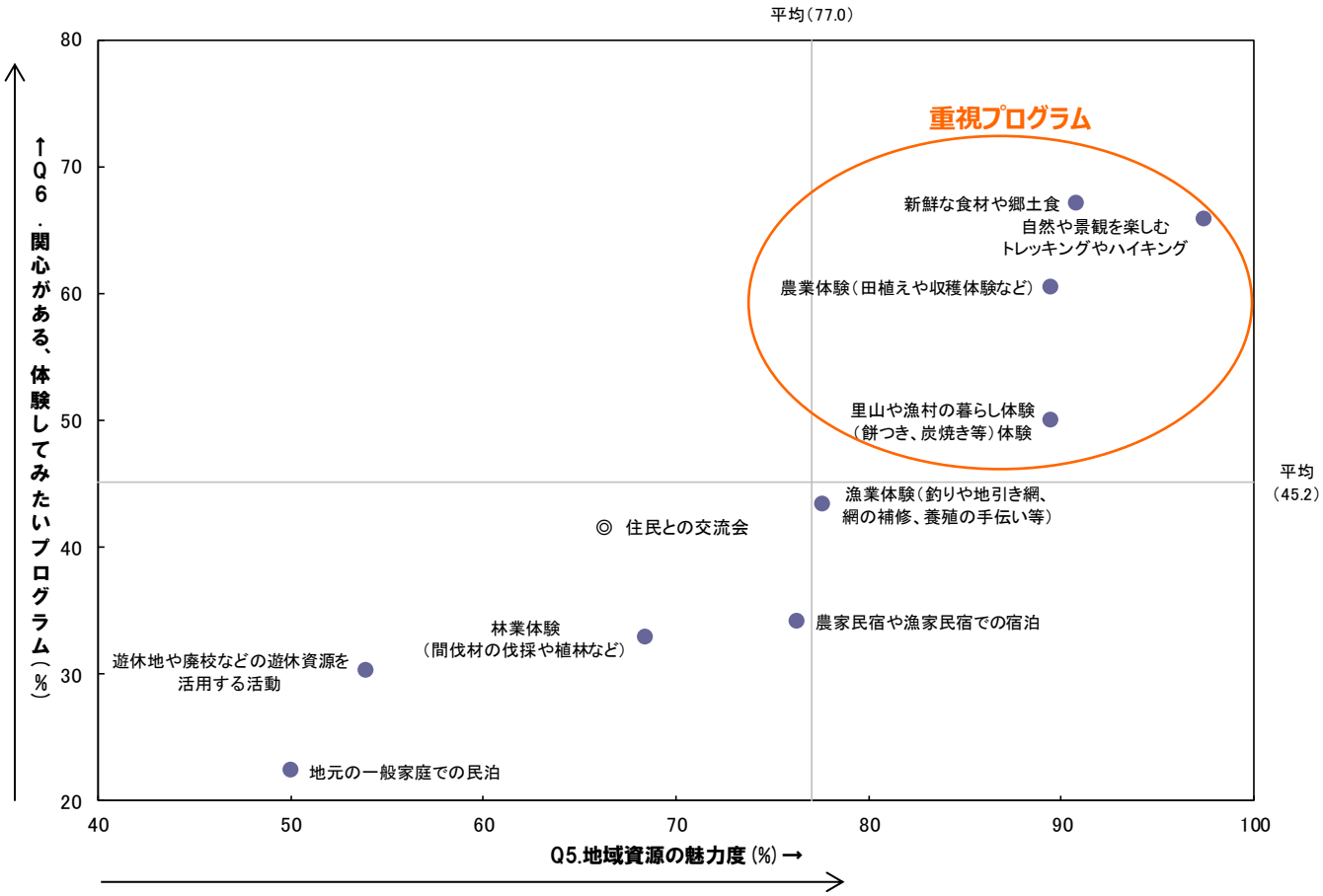
企業・大学等では「分からない・何ともいえない」とする人が24%と４分の１を占め、農山漁村とくらべてやや交流活動に消極的な態度がうかがわれる。この原因としては次の２点が考えられる。

１）農山漁村では、学校教育や都市部の生活者の受入等に取り組んでいる地域が多く、企業・大学等の交流イメージが想定しやすい。これに対して、定期的に農山漁村と交流している企業・大学等はまだ少ないため、交流活動のイメージが描きにくい。

２）交流活動の効果として、農山漁村の活性化や経済効果など、受入側のメリットは明確に意識されているのに対して、訪問する企業・大学等の「交流メリットがよく分からない」とする声は多い。農林授業体験や自然体験がチームビルディング等の人材育成や研修活動に「効果がありそう」とは考えられているものの、まだ企業のメリットや課題解決の方策として確信がもてない状態にある。

③ 企業・大学等が重視・期待する「交流・体験プログラム」は、7割以上の地域で提供できる（している）プログラムであり、プログラムに対するマッチングはできている。

企業・大学等の交流・体験プログラムへの関心やニーズを整理すると、下表のようになる。これでみると、企業・大学等が重視するプログラムは、「新鮮な食材や郷土食」「トレッキングやハイキング」「農業体験」「里山や漁村の暮らし体験」となるが、これらはいずれも農山漁村が提供できる（提供している）プログラムの上位に位置している。



④ 今後、都市部の企業・大学等と農山漁村の交流を促すための課題は、農山漁村にはマッチングのための情報提供であり、企業・大学等には交流イメージや企業メリットへの理解形成が必要となる。

農山漁村が問題や課題と考えているのは、交流相手である「企業・大学等の存在が不明」「企業・大学等のニーズが不明」「交流相手の選び方が不明」といったものが上位を占めた。一方、企業・大学等では「コストがかかる」や「交流イメージや内容が明確ではない」「企業メリットが分からない」といった点が上位に挙がっている。

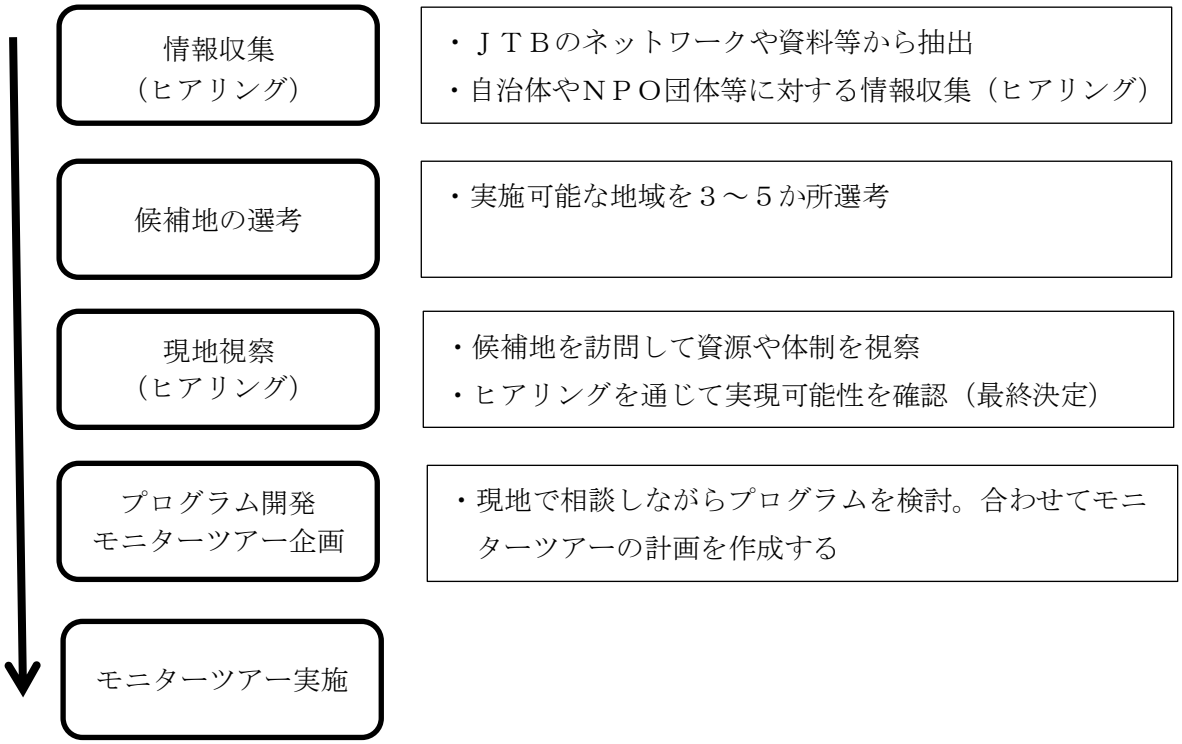
第３章

相互交流を促進するための方策の検討

第１節　モデルプログラムの開発とモニターツアーの実施

１. 開発及び実施に向けた準備活動

ＪＴＢのネットワークや文献等の情報収集を行いモデルプログラムの開発及びモニターツアーの実施地域の検討を行った。事前準備の活動フローは次の通り。



候補地の検討にあたっては以下のような点に留意した。

１）地域にやる気があり、関係者間の意思の疎通や連携体制ができていること
２）エリアや地域資源に違いがあること（多様なプログラム開発）
３）観光業者が主役ではなく、農山漁村に居住する住民やコミュニティが主導していること
４）モニターツアーの実施をにらんで、首都圏の企業が参加で見る立地であること
５）モニターツアー後の本格実施を前提に、交流会等の開催ができること

以上のような準備活動を行った結果、平成 25 年度業務では次の３地域でモデルプログラムの開発とモニターツアーを実施することにした。

①福島県昭和村
②山形県川西町
③千葉県館山市

２. モデルプログラムの開発

準備活動において選考した３地域に関して、実際に現地を訪問して、それぞれが有する交流資源や受入環境を視察・確認を行い、さらに自治体や受入地区の関係者等に話を聞きながら、モデルプログラムの開発を行った。

〈モデルプログラムの開発にあたってのチェックリスト〉

項目		チェックポイント
地域資源	①自然・景観	・ 訪れる人にぜひ見せたい・体験してもらいたい自然や景観はあるか
	②農林漁業体験	・ 時期や季節ごとに体験可能な農林漁業体験の確認
		・ 他地域にはない、独自の体験プログラムはあるか
	③地域産業	・ 農林漁業の加工品など、地域産業の見学・体験は可能か
	④食・食文化	・ 他地域に負けない、自慢の食材や産品はあるか
		・ 地元の人たちが愛する郷土の味、郷土料理は何か
		・ 訪れた人に食べてもらいたい、食べさせたい産品は何か
	⑤文化・伝統・行事	・ 他地域にはない独自性の高い歴史や文化はどのようなものか
		・ 訪れた人に見せたい伝統芸能や行事・風習はあるか
		・ 地域が盛り上がる祭りやイベント（催事）の確認
交流施設	①観光施設	・ 著明な名所旧姓や観光施設（公園等）はあるか
		・ 直売所や未知の駅など、地域産品が購入できる施設はあるか
	②宿泊・滞在空間	・ 農家民宿や漁家民宿、民泊など地域の人とふれあえる宿泊は可能か
		・ ある程度まとまった集団（30 人程度）が宿泊できる施設はあるか
		・ 温泉やリラクゼーション施設はあるか
	③交流施設	・ 集団でのセミナーや研修活動等に利用できる施設はあるか
		・ スポーツやレクリエーション等に利用できる施設はあるか
		・ 地元の人たちとの交流会が実施できる施設はあるか
受入体制	①受入組織	・ 受入のための体制や組織は確立されているか
		・ 受入に対する住民の意識や参加意向は形成されているか
		・ 自治体や関係団体との連携は確立されているか

今回モデルプログラムの開発を行った３地域では、それぞれの資源や特色などをふまえ、次のようなプログラムを開発し、それらを盛り込んだモニターツアーを実施することにした。

〈候補地における主なプログラム〉

地域	モニターツアーに盛り込むモデルプログラム
福島県昭和村	・ フィールドワーク（村内散策と地元学講座）の実施 ・ 温泉入浴 ・ 農家への民泊と農作業体験 ・ 郷土料理づくりとそば打ち体験 ・ 夕食交流会
山形県川西市	・ 川西町で行っているイベント「生活者大学校」への参加（連携） ・ 夕食交流会 ・ 農家への民泊 ・ 体験プログラム（芽の収穫、野菜の収穫、雪囲いづくり等） ・ 郷土料理づくりとそば打ち体験
千葉県館山市	・ フィールドワーク（市内散策と地元学講座） ・ 農家への民泊と郷土料理づくり ・ 農家での農作業体験 ・ 郷土づくり体験（太巻き寿司） ・ 夕食交流会 ・ 市内の各種交流施設の紹介ツアー

【モニターツアーの参加者募集活動について】

モニターツアーの実施にあたっては次のような方法で募集活動を行った。

１） ＪＴＢコーポレートセールス社員による企業への案内と参加呼びかけ
（人事部や総務部など、研修やＣＳＲ担当部署を中心に訪問）

２） ８月に実施した全国セミナーの参加者（企業・団体・地域）への案内と参加呼びかけ

３） ツアー実施地域による周辺の自治体や関係団体等への案相と参加呼びかけ

３. モニターツアーの実施

（１）福島県昭和村でのモニターツアーの実施

①ツアーの実施概要

（実施概要）

平成２５年１１月１１日（月）～１３日（水）　２泊３日

（参加者）

男性８人　女性２人　（計１０人）

性･年代	居住地	職業
①女性・30 代	東京	企業人事部
②男性・40 代	東京	企業 CSR 推進部
③男性・30 代	福島県会津若松市	NGO
④女性・30 代	福島県田村市	企業
⑤男性・30 代	福島県会津若松市	行政職員
⑥男性・40 代	福島県会津若松市	行政職員
⑦男性・20 代	福島県三島町	地域活性化活動団体
⑧男性・30 代	福島県三島町	観光協会職員
⑨男性・30 代	福島県西会津町	行政職員
⑩男性・不明	福島県三島町	地域リーダー（区長）

（日程）

11 月 11 日（1 日目）	・移動（集合） ・入村式&フィールドワーク（村内散策） ・民宿に宿泊
11 月 12 日（2 日目）	・農作業体験 ・郷土料理作り ・温泉入浴 ・夕食交流会 ・古民家に宿泊
11 月 13 日（3 日目）	・フィールドワーク ・意見交換会 ・移動（帰路）

②ツアーの行程

第１日目（11 月 11 日(月)）

◆集合（10：50）　JR 新白河駅

・東京からの参加者は東京発 9：16－新白河着 10：46 の新幹線を利用。

・新白河駅で県内からの参加者と合流し、送迎車で昭和村へ向かう。

◆昼食（12：00）　郷土食伝承館 芋麻庵

・「ばんでい餅」をはじめ、昭和村の食材を使った古くから伝承されてきた郷土料理を味わう。

◆入村式（13：30）

・昼食後に入村式を実施。昭和村村長の歓迎の挨拶のあと、参加者の自己紹介。その後、３日間の予定をオリエンテーションした。

◆昭和村 里のフィールドワーク（14：00～16：00）

・渡辺稔雄氏をガイド役に、昭和村の歴史や風土、産業や特色等をレクチャー。

・レクチャーの後、村内を散策し風景を楽しむとともに、直売所や工芸博物館等の施設を訪問。

・公民館や研修室など、企業が研修の場として利用できる施設も紹介。

◆玉梨温泉に入浴（16：30～18：00）

・昭和村に隣接する金山町に移動し、日本の原風景ともいうべき山里に立地する玉梨温泉で入浴・休憩を行った。

◆昭和村の農家への民泊（18：30～）

・昭和村に戻って、地元の農家に民泊。地元食材を使った手料理ときめ細かなおもてなしに、会話もはずみました。

第２日目（11 月 12 日(火)）

◆農作業体験（午前中）

・朝食後、宿泊した農家で農作業をお手伝い。（農作業体験）

・行ったのは「しいたけの収穫」と「畑の除草や収穫体験」。

・農作業の後は農家のみなさんと一緒に昼食を食べる。

◆郷土料理づくり体験（13：30～16：00）

・しらかば荘に移動し、地元の女性グループのみなさんと一緒に昭和村の食材をふんだんに使った郷土料理づくりにチャレンジ。

・なめこなどの山の幸、大根などの里の幸を使って次々に料理ができていく。また、会津伝統のそば打ち体験も行った。

（ばんでい餅、ザク汁、凍み大根、つと豆腐など）

◆温泉入浴（16：30～18：00）

・しらかば荘内にある温泉（入浴施設）に入浴。交流会に向けて英気を養う。

◆夕食交流会（18：00～）

・温泉入浴後に、地元のみなさん（行政関係者、農家のみなさん、地域起こし活動の関係者等）と交流会を開催。

・自分たちの作ったそばや料理を味わいながら、「農都交流」や「地域活性化」「昭和村や奥会津の文化」などについて語り合った。

◆宿泊

・築 180 年の古民家をリニューアルした農家民宿に宿泊。

第３日目（11 月 13 日(水)）

◆昭和村　山のフィールドワーク（午前中）

・民宿での朝食後、公民館に移動して山の案内人猪股良雄氏から、昭和村の山の暮らしについて話を聞く。(昭和村は周囲を山で囲まれた山村)

・レクチャー後に近くの里山を散策し、山の植物や生き物、ライフスタイル等の話を聞く。

◆意見交換会（11：30～）

・公民館に戻って、昭和村や近隣の行政職員などを交えて意見交換。農都交流の可能性や要望などを話し合う。

・合わせてモニターツアー参加者にアンケートを実施した。

◆昼食

・会津名物の「ソースカツ丼」をみんなで食べる。昼食後は適宜、特産物の買い物なども行った。

◆解散（15：00～）

・JR 新白河駅で解散。

（東京からの参加者は 15：19 分の新幹線を利用。東京着 16：49）

・合わせてモニターツアー参加者にアンケートを実施した。

③ツアー参加者へのアンケート調査結果（回答者 6 人）

質問 1. 今回のモニターツアーで印象に残ったこととその理由

回答者	印象に残ったこと	その理由
東京在住 会社社員 女性	様々な方が連携して地域を活性化させようと検討している姿	危機意識と支え合うという元々地域がもっている風土が、様々な役割や組織間と連携をとる活動につながっているのかなと思い、うらやましかったため。
	山散策での案内人の話（仕事感や生き方）	自然のサイクルに根ざした生き方や仕事の仕方を学べ、人が持続的に生活を営んでいくうえで企業が考えなければならない価値観を学べた気がしたため。
	椎茸収穫体験の際に農家の人が語った食べ物に対する考え方	農作物は買うもの、安ければいい、という価値観の世代を親に持ついまの 30 代は、自分たちの代で考え方を改めないといけないという意識に共感したため。 またセシウムの問題に対する消費者の無知の話があり、自分自身もセシウムの問題に限らず、食の安全に関してもっと関心をもたなければという気づきがあったため。
東京在住 団体職員 男性	農作業体験と農家昼飯（及びフィールドワーク）	普段できない農作業〈草取り、片付け〉と土の匂いに純粋に感動。農家の方との昼食で彼らの日常に触れたこと。
	郷土料理作り　そば打ち	地元料理作りの協働作業の非日常性。新しい発見もあった。名人〈実は農家〉の多芸性に感心。
	交流会	多様な価値観の出会い
福島在住 NPO団体職員 女性	フィールドワーク	学術的な説明ではなくとも、猪俣さんの人生経験から語る猪俣さんの言葉に感動した。また自然からの恵みで生活をし、自然にお返しする気持ちで山の手入れをしていた。自然と人間が“結い”の関係であったというお話から、お金の存在とは…？考えさせられた。
	民宿に泊まる	民宿は、宿主さんとの距離が近いこともあり、自分たちの為に大変な思いをさせては申し訳ないという気持ちと、泊めていただくことの有難さと感謝の気持ちがわいてきた。
	郷土料理づくり	野菜の切り方を尋ねたが、「どんな切り方でもそれがいいんだよ」と言ってくれた言葉は、全てを受け入れて下さっていると感じた。お母さん方の心の広さに人のぬくもりと安心を感じ、ひとの心を温められる料理を作りたいと思える時間だった。
東京在住 会社社員 女性	農作業と農家での昼食（2 日目）	少しでもお役に立てる作業ができたことと、農家のお母さんの手料理がとてもおいしかった。
	意見交換会（3 日目）	NPO、役場、企業（モニター）が意見を交換できて有意義だった。みんな同じ想いで、これからも継続させたいと感じた。
	フィールドワーク（1 日目）	村の歴史が興味深かった。
福島在住 NPO団体職員 女性	フィールドワーク（3日目）	自然は全て循環して共存していることを改めて感じた。調和のサイクルから逸脱してしまった人間がどうしたら戻ることができるのか。一人でも多くの方に案内人の話を聞いて欲しいと思った。
	郷土料理作りとそば打ち	食は生きることの基本。一緒に作ったものを一緒に食べるというプログラムは、一体感を育む手段としてとても有効だと感じた。また、古くから地域に残っている食べ物や調理方法は、その土地で生きる人に合ったものなのだと思う。日本の伝統食の作り方を学ぶことができて良かった。
	交流会（地元のみなさんの笑顔）	交流会で地元の人から「おもてなしをしているという意識が無い」という言葉を聞き、作為の無いおもてなしは受け取る側にも負担が無く、お互いに自然体で接することができ、真の心の交流が生まれることを知った。
福島在住 NPO団体職員 男性	民宿での食事とご主人（ご家族）との交流	何よりまず、昭和村の食の豊かさに魅了された。また、心温かいご家族から昭和村のさまざまな話を聞くことができ、非常に貴重な時間を過ごすことができた。
	からむし織の里見学	昭和村の基幹産業である（あった）からむし織の、成り立ちから具体的な手順まで、非常に分かりやすく理解できた。

質問 2. 都市部の企業・団体等が昭和村のような農山漁村で研修等を行い、自然・農産漁村生活体験や地域の人たちとの交流経験を行うことについての意見

①とても良いことなので積極的に進めるべきだ　　4 人

②良いことなのでそういう機会が増えるとよい　　2人

（主な意見）

- 自然の原風景が残る昭和村のような場所にくると、普段の事業活動が自然に対してどんな影響を与える可能性があるか、考え直すきっかけになる。
- 心の癒し効果、多様な価値観の気づき、農作業を通じた労働の価値体得。
- 企業（都）－地元（農）が win-win で、継続できるプログラムをつくっていただきたい。
- 昭和村の持つ価値は、現在の都市住民にとっては羨望の的である。社会課題を解決する有効な手法として、このような交流の継続を強く推したい。

質問 3. 都市部の企業・団体が組織ぐるみで農産漁村体験・地域との交流や、グリーン・ツーリズムを行うことの効果や良い点・意義・についての考えや意見

回答者	考え方・意見
東京在住 団体職員・男性	・ 共同体験を通じた仲間意識醸成。 ・ 継続して行うことで企業体の第二のふる里創造。
福島在住 NPO職員・女性	・ 企業や団体のネットワークを使い、広範な広報活動が期待できる。 ・ 同一組織に属する方々が集団で同じ体験をして考えを共有すると、個人で動くときよりも大きな力となり、その後の展開が早いのではないかと思う。
福島在住 NPO職員・男性	・ 組織としてある程度の強制力をもって、参加者を動員することで（例えば研修や社員旅行等）、 ・ 農山村に興味を持たなかった層を、巻き込んだ形で事業展開することが可能になる。 ・ 組織が介在することで、農村の問題や価値に無関心だった層に、新たな価値を見出してもらう ・ 機会をより多く提供できるようになる。

質問 4. 都市部の企業・団体が「農都交流」を行う上での課題と、交流を促すための方法やアイデア

◆課題

- 農村の「表面」だけを見る観光ツアーにならないように工夫が必要。
- 何を学ばせるかというテーマ設定
- 農村での活動と、研修の目的を、うまくリンクさせる工夫（理由付け）。
- 企業や団体内（特に上層部）の理解。
- 効果測定
- 受入側とのミスマッチ（双方の期待にズレが生じないように）。
- 都⇒農の一方通行にならずに、反対向きの交流の検討が必要。
- 研修にさける日数が限られている（できれば1泊2日が良い。1週間はむずかしい）。
- 時間創出
- 全てに関わる費用はどれくらいか。
- 参加費や、経費がどれぐらいかかるかが気がかり。
- 農家との接点がない

◆交流を促すための提案やアイデア

- 研修、福利厚生の面からスタートさせ、「人とのふれ合い効果」のメンタルヘルス策として提案することで、企業の事業計画に最初から組み入れる。
- チームビルディングや人材育成等の場として設定するには、農家と企業の仕事の仕方で共通する部分と
- 異なる部分を分け、より詳細にテーマ設定とプログラム設定をする必要があるように感じる。そのため、人事研修というよりはCSR活動や組織活動のテーマの方が進めやすいと思う。
- 1泊2日でも意義を感じられるプログラム
- 受け入れ農家を増やすための説明会
- 企業や団体の事業内容と関連した交流プログラムを提案する。
  (例:登山・ウィンタースポーツ関係→山林整備のボランティア、山里歩きツアー、花屋さん→花畑での作業体験等)
- 地元出身者のいる企業・団体へ、農都交流を提案する。
- 企業・団体の研修担当者および上層部を対象にした、今回のようなモニターツアー
- 交流のみでなく、通常の研修を「農村」で実施できるように受け入れる態勢作り(1－2週間程度)。
- 滞在中、都市と農村の若者同士が、とくに参加して協力して何かを作り上げるような仕掛け(祭り、討論会、婚活パーティー)
- 都市側の団体が農村で聞き取り調査をして、「まちおこし」アイデアを村長に提言するような一連の流れを、研修として構成する。

質問 5. 企業・団体等が昭和村のような農山村地域で適する活動についての考えや意見

回答者	適する活動等	内容・理由
東京在住 会社社員 女性	リーダー、経営幹部研修	農家の方々から、農業の大切さや今後の課題を聞き、実際に農作業を体験し、地域に対して自社ができることを幹部研修生が考えるような研修(今年まで、石巻の住民の方とともに次の地域モデルを考えるという幹部研修を実施していた)。
	会社組織員活動	社会問題に対する関心を高める活動。自然と共生する生き方や食の安全について、実際の農作業や農家との交流を通じて学ぶ。
東京在住 団体職員 男性	新入社員研修、若手育成研修	汗をかく農作業による共同体験の感動を味わう研修。また世代の違いによる価値観の気づき
	顧客サービスツアー (CSR活動の一環)	農山村生活体験による新ツアー構築
	援農隊などのボランティアツアー	社会貢献に寄与する取組
東京在住 会社社員 女性	部署内のチームビルディング合宿	力を合わせた農作業や寝起きを共にし、関係を深める
	CSR活動(利他活動)	農作業のお手伝いを通じて、利他を学ぶ。「ありがとう」と言われる原体験をする
福島在住 NPO団体職員 男性	チームビルディング	共同作業による収穫体験、自炊宿における共同生活、登山
	人材育成	村全体を研修会場として活用。自然豊かで、平穏な環境において、団体内の年次研修などを実施。
	こどものキャンプ事業	放射線量が比較的高い中通地区に住む子どもたちを、昭和村に連れてきて、豊かな自然環境の中で、キャンプおよび農作業体験。

④ツアーを受け入れた地域住民へのアンケート調査結果

質問 1. 今回のモニターツアーへの協力・関与状況

回答者	モニターツアーへの協力・関与内容
フィールドワーク案内（里）	・昭和村の概要や課題、郷土料理や地域文化などの説明。 ・交流会への参加
農業	・食事の提供
農業	・郷土食づくり ・交流会への参加
古民家ゲストハウス経営	・宿泊場所（古民家）の提供 ・交流会の参加
民泊受入（松屋）	・民泊受入 ・農作業体験の受入（ナメコ採りなど）
農業	・農作業の作業手順指導 ・交流会の参加
役場職員	・農作業の指導 ・交流会参加
フィールドワーク案内（山）	・里山の案内（山時と住民との関係を解説）

質問 2. モニターツアーで他地域の人を受け入れた感想

①事前準備についての感想

- それほど大変ではなかった　５人
- 何とも言えない　１人
- 特に事前準備はしていない　１人
- 無回答　１人

②実際の受け入れ時の感想

- それほど大変ではなかった　４人
- 何とも言えない　２人
- 無回答　２人

③交流会の感想

- とても楽しかった　５人
- まあ楽しかった　２人
- 無回答　Ｉ人

④今後の受入活動への参加意向

- ぜひ参加したい　５人
- 参加してもよい　２人
- 何とも言えない　１人

⑤モニターツアーの受入で印象に残っている点や楽しかったこと

- 伝統的生活などの説明に対し、積極的に質問してくることから、昭和村（農山村）への関心の高さが伺われ、今後の農都交流に手応を感じたこと。
- 年齢の差。
- 参加者が大人なので積極的に体験しようと楽しんでいるようで、よかったと思う。
- 一緒に食事づくりをしたことでうちとけたこと。
- お客さんたちが「やってみたい」と言って率先して手伝ってくれたこと。（神棚にお水を供える、食事の手伝いなど）
- 交流会では普段会うことのない村内外の人と会えたこと。
- いろいろな企業の方々がいらっしゃったことで、色々な情報が聞けて、良かった。
- 若者の力で短時間で作業してもらった。
- 交流の中で若い者の考え方がしっかりしている事。
- 次回の体験交流を楽しみにしている。
- 外からの視点で昭和村を見ていただけたことが良い点。
- 参加の皆様が熱心に話を聞いてくれた事。

⑥昭和村が都会の企業などと交流・連携をすすめるための「課題」や「問題」

- 高齢化などにより受入体制を整えるのが難しい。受入体制（分野ごとのグループ化）が整えば受入は容易になる。
- 宿泊施設の問題、農家民泊ができれば村の生活が理解でき、交流が深まる。
- 目的に沿った受入対応をするには、都会の企業の目的を明確にする（理解する）必要がある。・
- 交流は出来ても、連携をうまく続けていく事。
- 大所帯（団体）を年に何回も受け入れる許容量が地元の人にどれだけあるか。
- 受け入れ窓口となる組織にどれだけの中心になってくれる地元の人を巻き込めるか。
- 農家民泊を「やりたい」という家族をどれだけ増やせるか、又は増えない原因をどれだけ解消できるか。
- 交流や受入に関する活動に主体的に取り組める人材が確保できるか。
- 農家が主なので、農体験を受け入れることを多くの村民に知ってもらう事が必要。
- 都会の企業と村の企業との交流を深め、話し合いの場を作る。
- 企業と受入先をコーディネートする組織の育成と運営。

質問 3. 都会の企業や大学が昭和村のような農山村を訪れて交流することに対する考え方

①とても良いことなので積極的に進めるべきだ　　５人

②良いことなのでそういう機会が増えるとよい　　３人

（主な意見）

- 都市と地方の違いを参加者に理解して頂くことが必要と考えている。地方出身者（田舎をもつ者）の二世が中心となっている都市社会では、あらゆる面において地方を理解することができなくなりつつある。
- 農山村体験は癒しの場であり、やすらぎの場でもあるだろうが、活力を培う場にもなる。農山村、都市部の企業の双方に大きなメリットがあると考える。
- 外部の人と交流する事で、じいちゃん、ばあちゃんが元気になれる。
- 普段話さない昔の生活や体験等を話すきっかけになり、価値観が変わったり、再確認する事もある。
- 同じ会社や団体の人が毎年安定してきてくれることにより、農家さんとも交流が深まり、農作業体験の内容もきめやすく、お願いしやすくなる。ただ、地元の人の生活リズムが崩れてしまうと、魅力の半減にもつながってしまうので、機会は多すぎない方がいい。
- 都市部の企業、団体との交流を通じ、農作業体験をしたり、野菜等も買ってもらったり、農地を利用してもらったりして、地域生活に活気が出る。
- 都市部の若い力をかり、交流を深め農村の生活や農作業の体験をしながら永住につなげたい。

質問 4. 都市部の企業等との交流活動の良い点、悪い点

良い点	・ 田舎の暮らしに目が向けられることで、地元民に活気が湧いてくる可能性がある。 ・ 父ちゃんが元気になる ・ 家庭や村に新鮮な空気が入ってくる。 ・ 会社等、特定された団体の人が泊まりに来るので安心（不特定だと心配）。 ・ 昭和村のいいところを発見してもらえる。 ・ 若者の話は自分達の考えとは異なり、これからの生活や作業に取り入れたい。 ・ 交流によって、相互の活性化が出来る。 ・ 農村の営みの価値が再確認でき、誇りを持つことができる。 ・ 山間部の事を知ってもらう機会を持てる。
悪い点 **（改善点）**	・ 農作業が忙しい時期は受け入れるのは大変。 ・ 初心者向けに作業をとっておく必要がある。 ・ 法事や葬式が入った時に直前でキャンセルしにくい。 ・ 過度・無理な受入が心配（身の丈に合った取組）。

⑤ツアー関連資料

１）参加者への案内状

農都交流プロジェクト

「奥会津昭和村モニタープログラム」参加案内書

■実施期間

2013 年 11 月 11 日（月）～13 日（水）3 日間

※詳しい行程については、別添のスケジュール表をご参照ください

■集合（解散）の案内

＜集合＞

2013 年 11 月 11 日（月）

東京駅　9 時 16 分発　東北新幹線やまびこ 207 号（仙台行）

※JR きっぷは、別途お送りします。きっぷに記載された新幹線の座席に直接ご集合ください

※遅れる場合は、下記にご連絡ください

当日緊急連絡先：苧麻倶楽部 飯田 080-4847-5262

＜解散＞

2013 年 11 月 13 日（水）

東京駅　16 時 44 分着　東北新幹線なすの 276 号（新白河から乗車）

※到着次第解散となります

■参加費用

無料（交通費（東京駅～昭和村）、宿泊代、食事代、交流会費、体験料）

■宿泊先：下記のいずれかの施設にご宿泊いただきます

＜1 日目＞

「民宿 松屋」

福島県大沼郡昭和村両原字天狗屋敷 537

0241-57-2284

「古民家ゲストハウス とある宿」

福島県大沼郡昭和村小中津川宮原 1044

0241-57-3131

＜2 日目＞

「田舎暮らし体験住宅」

福島県大沼郡昭和村喰丸三島 974-1

0241-57-3870

「ムラキャンハウス」

福島県大沼郡昭和村野尻字元町 4493

電話なし

※初日・2 日目ともに、どの宿泊施設に泊まるかは現地にてご案内します

■持ち物

洗面用具（シャンプー・リンス、歯ブラシなど）、タオル、着替え、寝間着（ジャージなどで OK）、農作業時の服（屋外での農作業用）、帽子、運動靴、防寒具

※農作業時に必要な長靴・軍手はこちらで用意します。

※2 日目の宿泊施設は、地元地域おこし団体の管理の簡易宿泊施設です。
洗面用具やタオル、寝間着等のアメニティはございませんので、各自ご用意ください。

■食事について

初日の昼食も昭和村で準備します。（お弁当等の準備の必要はありません）

2 日目午後は地元お母さんたちとの郷土料理作りとなります

■その他

宅急便等で荷物を現地に送る場合、以下の宛先へお願いします

送付先：NPO 法人苧麻倶楽部

〒968-0103　福島県大沼郡昭和村下中津川字中島 652

TEL：0241-57-2240

※11 月 11 日（月）午前必着で送ってください

※お送りになる際は事前に上記送付先へその旨をお電話してください

■運営体制（平成 25 年度農林水産省都市農村共生・対流総合対策事業）

企画運営：昭和村農都交流推進事務局（NPO 法人 苧麻倶楽部内）

運営協力：JTB コーポレートセールス、福島県会津地方振興局
昭和村役場、株式会社奥会津昭和村振興公社

■現地緊急連絡先（実施当日）

飯田（NPO 法人苧麻倶楽部 担当スタッフ）：080-4847-5262

■問い合わせ先

昭和村農都交流推進事務局（NPO 法人 苧麻倶楽部内）

Tel & Fax：0241-57-2240　　Mail：info@chomaclub.jp

担当：尾崎、飯田

２）詳細行程表

日次	月日(曜)	地　名	時間	交通機関	スケジュール
1	2013年 11月 11日 (月)	東　京　発 新 白 河 着 奥会津昭和村	０９：１６ １０：４６ 昼 午　後 夕　刻	新 幹 線 送 迎 車	着後：送迎車で奥会津昭和村へ ○昼食「郷土食膳」　会場：郷土食伝承館 苧麻庵 ・ポイント：ばんでい餅をはじめとした昭和村ならではの料理が味わえます ○「入村式」 ○昭和村のフィールドワーク（地元学講座） ・地元ガイド 渡辺稔雄氏の案内で、昭和村を見て歩きます ・ポイント：里山の暮らしや自然、講などの今なお残る風習について気づき、学びます。 また、研修の場として活用できる施設見学も行います（工芸博物館、研修室など） ○玉梨温泉（金山町）入浴 ○昭和村の農家に宿泊 ・ポイント：地元農家に宿泊。家の人たちと一夜を共に過ごし、相互の交流を深めていただきます 〈昭和村・民宿宿泊〉
	11月 12日 (火)	奥会津昭和村	午　前 昼 午　後 夕　刻		○宿泊した農家で農作業 ・白菜または大根とシイタケの収穫を予定 ○地元農家の方と一緒に農作業 ・農家やモニター参加者全員で協力し合いながら取り組みます ○昼食：午前中にお世話になった農家とともに昼食を食べます。 ○郷土料理作り ・ポイント：地元の女性グループと一緒に郷土料理を作ったり、そば打ち名人からそばの打ち方を習ったりします ○昭和温泉入浴 ○地元の皆さん（農家、地域おこし関係者、近隣の市町村職員など）をまじえた夕食交流会 ・会場：しらかば会館　メニュー：手打ちそばなど 〈昭和村・地域おこし団体管理の古民家宿泊〉
	11月　13日 (水)	奥会津昭和村 昭 和 村 発 新 白 河 発 東　京　着	午　前 昼 １５：１９ １６：４４	送 迎 車 新 幹 線	○フィールドワーク（案内人 猪股良雄氏による山歩き講座） ・ポイント：山とともに生きてきた名人の案内で村の人たちが山の恵みをどのように利用してきたかを学びます ○意見交換会 ・近隣の市町村職員を交えて、今回のモニターツアーを振り返ります ○昼食「ソースカツ丼」 ・会津名物ソースカツ丼を味わいます 送迎車で新白河駅へ

（２）山形県川西町でのモニターツアーの実施

①ツアーの実施概要

（実施概要）

平成２５年１１月１６日（土）～１８日（月）　２泊３日

（参加者）

男性３人　女性２人　（計５人）

性･年代	居住地	職業
①男性・50 代	神奈川	出版社勤務
②男性・50 代	東京	元放送会社勤務
③男性・50 代	愛知	元企業勤務。退職後は農業に従事
④女性・60 代	神奈川	元企業勤務
⑤女性・60 代	神奈川	元企業勤務

（参考）

今回のモニターツアーは川西町で毎年行われている「遅筆堂文庫・生活者大学校」と連携して実施した。その概要は以下の通り。

「遅筆堂文庫・生活者大学校」参加者人数　115 名

参加者居住地域・・東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、愛知県、京都府、大阪市、宮城県、福島県、山形県

（日程）

11 月 16 日（1 日目）	・移動（集合） ・地元イベント（生活者大学校）へ参加 ・地元宿泊施設に宿泊
11 月 17 日（2 日目）	・地元イベント（生活者大学校）へ参加 ・夕食交流会に参加 ・農家に宿泊（民泊）
11 月 18 日（3 日目）	・体験プログラム（野菜の収穫、茅の収穫等） ・そば打ち及び郷土料理づくり ・移動（帰路）

②ツアーの行程

第１日目（11 月 16 日(土)）

◆集合（出迎え 12：30）

・従来の生活者大学校では、参加者が会場近くの羽前小松駅から会場まで案内なしの移動を行っていたが、今回のモニターツアーに合わせて、米沢駅から川西町をよく知る案内人「ダリヤの里かわにし案内人」を列車に同乗させ、川西町について案内をしながら会場までの道程を一緒に歩き、参加者と運営側の一体感の向上を図った。

◆生活者大学校（13：00～17：00）

・13：00 より開校式を行う（モニターツアー参加者も加わる）。その後、以下の２つの講座を行った。
　講座①千葉　悦子氏：原発事故前と原発事故後の飯館村の取り組みについて
　講座②山下　祐介氏：社会学者の目線でみた地域再生に向けたこれまでの道程について
　　（モニター参加者も講座に参加し、講座の内容について聞き入っていた）

◆全体交流会（18：00～19：30）

・「かわにしツーリズム」（地元のグループ）による田舎料理、郷土料理の提供による交流を実施。
・普段、都市部の方々には食べる機会のない地域の食材を使った料理を準備し、おもてなしをした。参加者の中には、川西町出身やその関係者が多いため、懐かしい味だと好評であった。

かわにしツーリズムによる『全体交流会提供料理』

◆黒澤　春子さん　：あけびの肉詰め･わらびの一本漬け
◆遠藤　禮子さん　：冷や汁
◆高橋　せつさん　：ぜんまい煮･桜ごはん･瓜の粕漬け
◆佐々木　文代さん：わらび煮･菊のおろし和え
◆原田　加矢乃さん：おから煮
◆須藤　フミさん　：さくらんぼゼリー
◆井上　龍藏さん　：ウコギ茶

◆宿泊

・川西町、飯豊町、長井市の温泉施設、ホテルに分宿。

第２日目（11 月 17 日(日)）

◆朝食

・宿泊先で朝食を進め、生活者大学校の会場（フレンドリープラザ）に移動。

◆フレンドリープラザにて写真展見学（9：00～10：30）

・生活者大学校の一環として、井上ひさしの展示室を見学。

・飯館村の原発前の風景や人々の暮らしなどの写真展も見学した

◆生活者大学校（２日め）への参加（9：30～15：00）

・農村環境改善センターに移動し、生活者大学校に参加し、講義を聞く。

講座③山下　惣一氏：農業者の視点から幅広い視野に思考を向けた講座内容

◆昼食提供

・かわにしツーリズムによる豚汁の提供。

◆山形県立置賜農業高等学校の活動発表会（12：45～13：30）

・川西町特産の「紅大豆」を活用した商品開発を行っている「紅大豆本舗」の運営や、えき・まち活性化プロジェクトによる地域活性化に貢献している山形県立置賜農業高等学校の活動発表会を聞く。

・発表した研修会場は 60 名ほどの会議室スペースだったが、立ち見が出るほど大勢の参加者が集まり、若い高校生の活躍に、関心や励ましの言葉など、置農生の活動に今後も期待する声が多く寄せられた。

◆全体会（13：30～15：00）

・今回のテーマ「3.11 後の福島から地域再生への道程を考える」について参加者や講師から様々な意見が寄せられ、今年度の生活者大学校が無事終了となった。

※ここで「生活者大学校」は閉講となり、参加者は解散の帰路についた。モニターツアー参加者は残ってツアーを継続した。

◆温泉入浴

・町内温泉施設「浴浴センターまどか」において入浴後、民泊や体験先でもある川西町玉庭地区に移動した。

◆地域住民との夕食交流会

・玉庭地区住民との交流や意見交換を図るため交流会を実施した。交流会では、都市と農村違いや農村に求めるもの、川西町の資源をどう活用したらよいかなど、都市部住民の視から意見をもらったり、お互いの情報交換などを行いながら交流を図った。

・また、交流会では、玉庭地区の方から、地元の食材を使った、いわなの塩焼き、もって菊のおひたし、かきのクルミ和え、青菜漬け、ぜんまい煮、新米コシヒカリと、つや姫のおにぎりなどを提供頂いた。

◆宿泊

・玉庭地区の農家に民泊（分かれて宿泊）。

第３日目（11 月 18 日(月)）

◆朝食・移動

・民泊先で朝食後、玉庭地区交流センターに集合。

◆地域資源を活用した体験プログラムの実施（9：15～11：00）

・川西町の主産業たる農業や農家の暮らしを活用した体験プログラムを実施した。

≪①農作業体験≫　体験場所：川西町玉庭地区

講　　師：生田　敏一氏

大根、カブ、ヤーコンの収穫体験を実施。収穫作業は楽しいようであったが、冷たい水で野菜を洗う作業では、農業の大変さを実感しているようだった。

≪②雪囲い体験≫　体験場所：川西町玉庭地区

講　　師：生田　敏一氏

これから冬を迎えるにあたり農村では当たり前となっている雪囲いを体験プログラムとして実施。材木を立てる事や、固定する際のひもの結び方、しっかり木を守る囲い方や、ひもを解く際の手間を考えた結び方などの農村に暮らす住民の知恵にみなさん感心していた。

≪③むくり鮒の加工所見学≫

川西町玉庭地区では、冬場の貴重なタンパク源として米沢藩９代目藩主の上杉鷹山公が推奨したとされる鮒を養殖し､｢むくり鮒｣として加工し販売まで行う６次産業化を推進している。モニター参加者は加工所を見学し、廃校舎を活用した加工所で働く農家のおばあちゃんたちの意欲に関心を示していた。

◆そばづくり体験と昼食（11：15～13：00）

≪そばづくり体験≫ 体験場所：玉庭地区交流センター

講　　師：玉庭地区　髙橋氏

玉庭地区の髙橋さんにそばづくり体験の講師になっていただき、参加者と共にそばづくり体験を実施した。参加者のほとんどが初めてのそば打ちで、水まわしの際の水加減や、伸ばし方、切り方などなかなか上手くいかなかったようだが、昼食時に自分で打った蕎麦を食べ、おいしいと、満足していた。

◆アンケート記入と意見交換会（13：00～13：30）

・昼食後アンケートに記入するとともに、ツアーの感想などを述べる意見交換会を実施した。

◆送迎解散

・米沢駅まで送迎し見送り。（山形新幹線つばさ 144 号）

③ツアー参加者へのアンケート調査結果（回答者 5 人）

◆モニターツアーンケートの実施

2 泊 3 日のモニターツアーを通し、参加者および受入側協力者にアンケートを実施した。

◆モニターツアーのアンケートについて

モニターツアーの内容について検証し、都市部企業・大学の研修受入れ等を目的とした、川西町農都交流事業を推進するための参考資料とするためアンケートを実施した。

○アンケート調査対象・・・モニターツアー参加者、玉庭地区関係者

○アンケート調査方法・・・モニターツアー体験後に配布し回収

○アンケート回収率・・・・モニターツアー参加者　5 名中 5 名　回答率 100%

玉庭地区関係者　　10 名中 7 名　回収率 70%

各アンケートの集計については次のとおり

質問 1. 今回のモニターツアーで印象に残ったこととその理由

	印象に残ったこと	その理由
民泊	斎藤家に民泊、多くの食材をご夫婦で作られ、それをごちそうになったこと	仲の良いご夫婦のおもてなしをうけた 家は人が集まりやすいようにリフォームされており、斎藤家の方の新しい人をすぐ受入れる広い心に感銘をうけた
	農家に宿泊	都会とは違う齊藤さん宅の営みに地産地消のお手本をみた 地元の美味しい食べ物をたくさん豊富に味わうことが出来て感動した。食材をとても丁寧に大切に使っていたことが心に残った
	農家のお宅に宿泊する	家族のみなさんと家の歴史（玉庭）や川西の農産物などの話が聞けてこの場所に住んでいる人の心に触れられたこと
	地元農家宿泊	地域の歴史、日常生活などを知る上で貴重な機会となった
	民泊した家の人たちとの交流	民泊を初めて受け入れるということだったが、手厚い心配りはもちろんですが、ご家族それぞれの人柄が、直に伝わってきて、人の繋がりの温かさを味わうことが出来た 旅に出たときに結局心に残るのは人との交流の思い出であることが多かったことを今更ながら思い出した
交流会	・玉庭地区の方々との交流 ・イワナの塩焼き ・つや姫・こしひかりのおむすび ・もってのほか、ぜんまい煮、	玉庭地区の方々の人柄から玉庭地区の良さがうかがえた（他人を受け入れて気軽に集まれる） 新米のおいしいおむすびの食べ比べができた 地元食材を使った料理から素材の良さを感じた
	玉庭地区での夕食兼交流会	玉庭の方々との話を通して小松に何度も通っていたが、その時には見えなかった暮らし方や農業への思いが伝わってきた 町長さんの様々な取り組みに川西町の勢いを感じた
	地元の人たちとの交流会	生活者大学校の交流会は地方から集まってきた人との懇親会で興味深いものがあったが、時間も少なく、話が弾む場面も少なかったが、玉庭地区での交流会はヒザを突き合わせて会話が弾んだ
	交流会（玉庭地区）	オールスターズでの歓迎をうけたという印象 また、この企画の将来にかける意気込みも感じた
体験プログラム	大根、カブ、ヤーコンの収穫体験、雪囲い体験 玉庭マップでの玉庭散策（瑞光寺・長沼家） むくり鮒の加工現場見学	収穫は楽しいものであった。400 年の下史のある寺をうかがった 長沼さん宅は牛を 2 頭程飼っていて小規模農家と思った むくり鮒は、良い味でした

	大根、カブ、ヤーコンの収穫体験 農作業（大根ほりなど）	普段食べている大根がこんな形で畑で育っているのかと思うと楽しくなってきた 初めてヤーコンを食べてイモ類であることに実感がもてました。農家の育てて食べることの喜びを感じられた（いつも当たり前のように無感覚でこなしていただけ）
	そば打ち	自分で打って食べることが出来て、次回自分でも作ってみようと思った
	大根収穫などの農業体験、そば打ち体験	興味があっても普段の生活ではなかなか体験できないもので面白かった
	そば打ち体験	個人的な興味関心も高く、最も印象に残ったことの一つである。また、むくり鮒の味にも感動した。調理していた女性たちもいきいきしていて 6 次産業化のすそ野の広がりの大きさを感じた

質問 2. 都市部の企業・団体等が川西町のような農山漁村で研修等を行い、自然・農産漁村生活体験や地域の人たちとの交流経験を行うことについての意見

①とても良いことなので積極的に進めるべきだ　　4人

②良いことなのでそういう機会が増えるとよい　　1人

（主な意見）とても良いことなので積極的に進めるべきだ

- 都会では情報に振り回され人間としての営みをコントロールできない人が増えている。人は助け合って生産し、工夫して食べて（出来るなら芸能などもあればよい）この交流経験によって「生活の基本」を感じて今の生活を振り返ってみることが必要だと感じた為。
- 都市部では今の仕事に充実感がなく、お金や生活の為に働いている人もいる。そういった生活と川西町の生活の違いで新たな自分を見出せると思う。
- 日本人の生活能力が昔（昭和）と比較すると非常に低下していると感じられる。農村の生活はそういう失われた生活能力を今も残している。そういう能力を、交流を通して見直すチャンスだと思った。
- 「企業活動の最終的な目的が営利に終わらないように」という思いの具材的なプレゼンテーションとして人が生き、繋がって生活を営む社会（共同体が成立しているという意味の農山漁村）での体験は意義深いと思う。

（主な意見）良いことなので、そういった機会が増えると良い

- 都市の人と玉庭の方の交流の場や体験の場を増やし、若い人に農村の良さを伝承していく。

質問 3. 都市部の企業・団体が組織ぐるみで農産漁村体験・地域との交流や、グリーン・ツーリズムを行うことの効果や良い点・意義・についての考えや意見

考え方・意見
・3 泊 4 日ぐらいの休日を利用して地域の方々ともっと深い交流に繋がるようなツアーを、回数を重ねて実施していくのが良いと思った。
・グリーン・ツーリズムも一長一種だと思う。どんな人が、どういう目的で、どこの地域に行くかによると思う。川西町は農村としての魅力がすごい。コンビニ、大企業の侵入もなく、日本本来の原風景が根付いている場所だと感じた。
・交流を通して毎年一回でもいいので、もう一度グリーン・ツーリズムを行いたいということになれば。そして、そういう企業団体が少しでも増えていけば、経済的にも文化的にも意義があることになると思う。
・都市部の企業の業務はマニュアル化が進み効率の良さが追求され、人間同士のコミュニケーション世代を超えた交流などがなくなってきていると思われる。そういう点を農山村体験で見直すことになれば意義あると思う。

質問 4. 都市部の企業・団体が「農都交流」を行う上での課題と、交流を促すための方法やアイデア

◆課題

- 農都交流事業の意義を企業側がどのようにとらえるか。相互の意義や目的が異なってもかわないし、たぶん違うだろうと予想されるがいわゆるWIN-WINの関係をどのように位置づけていくことが最大の課題であり醍醐味であるように思える。
- ［までい」な生活を継続か復活か望む声を広める
- 交流の方法アイデアについてこういった課題などについて交流し合える場があれば良い
- 農村部が豊かでなくて都市部が豊かになるはずがない。までいな生活が都市でもできるような支援についても学びたい。その為にも交流は必要である。アイデアはすぐには浮かばない、今後の私の課題でもある。心のこもった対応ありがとうございました
- どこの地域にも冬は雪が多いとか車がないと生活できないとかマイナス面がありますそのマイナス面をどうプラスにするか
- 一般的な経営に余裕がある企業は少なく、なかなか業績アップに直結しない企業に時間と資金を出してくれることは難しいと思われる

◆交流を促すための提案やアイデア

- 都市では若者は仕事がある無しに関わらずストレスの多い日常を過ごしています。ニュースでは事故が多いと報道され、こういった環境の中で育つ若者に同じ環境でこれから育つ子供たちをどう思うか農村での暮らし体験から考えてもらう
- 実際にいいところもマイナス面も含め体験してもらいその感想を踏まえてその町に足りないものまたは、活かせることを提供していく
- 企業・団体に呼びかけることも大切だろうが、関心を持ってくれる一般の市民に幅広く呼び掛けることも重要だと思う
- 農村部が豊かでなくて都市部が豊かにはならない
- までいな生活ができるような支援について学べる場や交流も必要であると思う

質問 5. 企業・団体等が川西町のような農山村地域で適する活動についての考えや意見

適する活動等	内容・理由
音楽を通しての交流	東京でライブ活動をしているバンドなどのリハーサル室と宿泊施設の提供と地元のバンドなどのライブ芋煮会？（発表会？）
真冬積雪2mの雪を体験 屋根の雪下ろし、除雪車の体験	積雪2mにもなる雪に興奮する人は多いのではないかと想像。除雪車の運転などできれば貴重でしょう。その後に熱燗で交流会
「正しい芋煮会をマスターするツアー」	薪を割って釜戸でご飯を炊かなければ食べられないサバイバルツアー、不便さには魅力がある
農作業の収穫体験	収穫物をその場で調理して食す 畑に植えてある自然薯（長芋）を傷つけずに折らずに掘り出すコンクール
テレビや映画などのロケーション、コーディネート	山形県出身者を中心とした監督やプロデューサーを集めて川西町で撮影できる提案をしてもらう
川西町の情報発信援助	私企業が直接自治体のPR活動に協力しにくいが、川西町にあるNPO法人とは連携して活動できそうだ
芋煮会体験	奏山村の資源を活かして川原で芋煮会を行う 芋の収穫、火を起こす薪、全てグループで準備し協力し、調理を行う。
	芋煮をグループごとに川原で作る 芋の収穫、火起こし等の準備など全て協力し、芋煮を作る。教えるのは地域の方々で交流しながら食事まで行う。

【その他参加者からの意見】

◆印象に残ったこと

- 玉庭地区の方々の一生懸命な気持ち
- なんとかしたいという思いが直に伝わってきた
- 朝、霧の中を移動したといは一種の幻想的なあじわいだった
- 耕地が多く、山林も近接し以外にもなだらかで豊かな土地だと思った
- 水田が多く、水も豊かで、耕作放棄地が少ない
- 歴史的、・民族的な文化資源
- 冬の豪雪と牛飼いを念頭に置いた伝統的農家の造り
- 調理場にお邪魔した時のおばあちゃんたちの楽しそうで元気な様子を見ただけで
- この試みは成功瀬ではないか
- 玉庭地区の伝統的なおせち料理をつくってみる

◆何ができるか考えてみたこと

- 真冬、積雪2m近くなったときの玉庭を体験してみたい
- 雪下ろし作業や、除雪車の運転も貴重な体験になる。そのあとに飲む熱燗、五臓六腑にしみわたる
- 現代社会でとっておきの異文化体験は不便を味わうことではないかという持論がある。不便さには魅力がある。おじいちゃんおばあちゃんの世代がもつ文化は十分に異文化である
- 農作物の収穫体験は調理して食すとこまでセットとしたい
- 畑で長芋堀コンクールなど（傷つけずに、折らずに掘る）

◆予想される課題（懸念されること）

①過剰サービス（都会への迎合）

- ありのままの異文化交流

②対等でない関係

- 双方に得られるものがあって成り立つ関係でなければならない
- お金に換算できないようなものを交換したときの満足度は大きい
- 対等な関係で価値の交換が行われなければならない

◆戸惑ったこと

- 都市部とか学生の団体を受入れるという着想がなじみにくかった

④ツアーを受け入れた地域（玉庭地区）住民へのアンケート調査結果（回答者 6 人）

質問 1. 今回のモニターツアーへの協力・関与状況

回答者	モニターツアーへの協力・関与内容
地区交流センター事務局長	・ 交流会に参加、受入れについての会議に入った。
農業、地区施設副館長	・ 農作業は牛を飼っているので藁の始末の方法を指導した。 ・ 食事はアレルギーの方がいるということで、山菜や、山形の芋煮、おみ漬けなど肉を入れない山中の料理をごちそうした。
自営業、交流センター関係者	・ 交流会の計画、農作業の準備及び会場までの案内
団体職員、民泊受入	・ 18 日（日）農作業の指導、17 日（土）交流会での面談
地区施設振興部会長	・ 朝食事の提供
農業、民泊受入	・ 打合せ会議や交流会に参加した。

質問 2. モニターツアーで他地域の人を受け入れた感想

①事前準備についての感想

・大変だった　１人
・それほど大変ではなかった　４人
・なんとも言えない　１人

②実際の受け入れ時の感想

・それほど大変ではなかった　５人　※無回答１人

③交流会の感想

・とても楽しかった　２人
・まあ楽しかった　３人
・なんとも言えない　１人

④今後の受入活動への参加意向

・ぜひ参加したい　２人
・参加してもよい　４人

⑤モニターツアーの受入で印象に残っている点や楽しかったこと

・ お正月行事、お盆の行事などについていろいろお話を聞いて、私達と少し違ったこともいろいろあったこと。17 日の夜は 12 時までお話し、雪が家の前にあったのでびっくりだった。
・ 今回参加された方は、生活者大学校を通じて川西町に何度も来ている方が多く、いろんな面で川西町を知っている方であり、話が合ったように思う。また、交流会に町長も参加していただき大変有意義な交流会になったと思うが、秋祭り反省会と合わせての会となったため、地域の方々がどう思われたかについても検討する必要があると考える。
・ モニターになって参加している方は、理解者である。初心者ではない。本音が聞けないと感じた。（何回も生活者大学校の生徒さんとして来町している方々でしたから特に）
・ 初対面とは思えないほど、それぞれがうちとける事が出来たのはとても良かったと思う。合同で、夕食兼交流会を行えば宿泊受入れ者の負担も減るし、より多くの方と親交を深める事ができるので、今後進めて行く上でも望ましい形なのではないかと感じた。
・ 食事の提供は朝食だけだったので負担が少なかった。しかし、滞在時間が短かった為なんとも言えない。

⑥川西町（置賜地域）が都会の企業などと交流・連携をすすめるための「課題」や「問題」

・ 受入れの民宿の確保がなく「まどか」での宿泊となれば体験の意味がうすれるのではないか。
・ 1.来町する方が何を求めているかを把握する。
2.受け入れる私たちも無理のかからない程度で取り組む為の体制作り
3.一度だけの交流でなく、長いスパンで何回も来ていただくための対策を考える

- 一時的な参加者でも良いから、会話する時間をかけ、聞き取りしていけば「課題、問題」が感じ取れると思う。1 泊 2 日の日程に無理があったと思う。
- 交流会や、農作業の時間が少ないので半日ぐらい時間が欲しかった。
- 受入れ側が負担にならない仕組みづくりは必要だと思う。
- 目的がはっきりしないと難しい。

質問 3. 都会の企業や大学が川西町（置賜地域）のような農山村を訪れて交流することに対する考え方

①とても良いことなので積極的に進めるべきだ　　３人

②良いことなのでそういう機会が増えるとよい　　３人

（主な意見）

- 地域の活性化を図る一つの方法だと思います。また、多くの人に内容を理解されるようにしていかなければならないと思う。
- 空気も良いし自然の山々、食べ物も良い所ですから都会の方々や多くの人に来て住んでもらいたい。
- 都会から来町される方のニーズが現実にこの地で生活している私達の状況を体験する中で、その方自信にとって一つの生き方の選択のきっかけとなれれば良いのではないかと考えている。
- 都会で行っても行かなくても良いという方々を地方に招く事を真剣に考えていくことが大切。
- 人口減少、少子高齢化などで年々地区に活気がなくなっていく中で、都会の方達との交流はこの土地での暮らしそのものを地区の人たちが見直し、誇りに思うきっかけとなり、そのことが地区を活性化していく原動力になると思うので。
- 交流は大変良いが家族が忙しくなり、負担になる。

質問 4. 都市部の企業等との交流活動の良い点、悪い点

良い点	・様々な出会いと交流で地区に活気がうまれる。農村や地元の実状を知り、考えてもらえるきっかけになる。交流する事でそれぞれが抱えている問題や欠けている所を補うことが出来る ・初めてなのでよくわからない ・山形の不便さをしってもらい参加される方々の本音をお聞きできれば田舎の提供すべきものが判明すると思います。 ・都会に住んでいる方から見た川西町の良さを知ることができる ・交流を通して農村の暮らしを理解していただける ・農作業を手伝ってもらえれば大変良い。
悪い点 **（改善点）**	・交流の仕方やプログラムによっては、お互いによくわからないまま、場合によっては悪い印象を持ってしまう可能性があるのではないか。 ・田舎の良いところを見て頂けているようだが、そのことについて本音が話せていないと感じる。 ・参加する方と十分に交流する時間が持てないように思う。受入れ側に十分に理解していただくには会を重ねた交流が必要である。 ・雪国なので半年間何も仕事ができないから生活が大変だと思う。

●自由回答

＜モニター参加者から＞

- より良い交流につなげていくためには、交流に仕方やお互いの目的をしっかり理解し実施していく必要がある。しかし、受け入れる側の負担を考慮したうえで体制づくりをしていくことが必要（もてなしすぎない）
- 参加の方がもう一度玉庭地区に来たいと思うようなツアーであること
- 雪や不便さといったマイナスな印象を、どのようにプラス活用していくかが重要
- 今回の参加者の方々のアイデアをどのように生かすかが検討してほしい（音楽の交流、真冬の積雪 2m、地域住民との芋煮会、テレビや映画などのロケーションへの活用）

＜受入側から＞

- 受入までの準備を含むモニターツアー全体を通し概ね良い受入れであったと評価できるので、次回の実施も検討していく
- 参加者の方が川西町や農村に理解のある方が多かったため、密度の濃い話ができているようだった。
- 今後農都交流事業を推進するにあたり、目的や方向性をきちんと定めていく必要がある。
- 今回の受入れは滞在時間が短く十分な内容を提供できたとは言えないため、次回開催時はもっと滞在時間をのばす必要がある。ただし、受入側の過度の負担とならないことが重要。
- 玉庭地区の自然、食べ物、農業が都会との交流資源として活用し、地域の活性化につなげていく活動としていきたい。
- 交流することによりお互いが抱える問題の解決や農村の現状を考えてもらうきっかけづくりとしても進めていく必要がある。
- 交流やプログラムの内容によっては悪い印象を与えてしまうことも感がられるので十分な検討を行う必要がある。

⑤ツアー関連資料

１）参加者への案内状

川西町農都交流事業

○「川西町の暮らし体験」モニターツアー参加要項

都市と農村を交流によりつなげる農都交流事業の一環として「川西町の暮らし体験」モニターツアーを実施します。町内の資源を活用した都市部住民との交流イベント参加のほか、農家に民泊し地域の方とのふれあいの中で暮らし、食、文化を体感していただくモニターツアーです。

◇実　施　日：平成 25 年 11 月 16 日～17 日　2 泊 3 日

◇参加要件：①「川西町の暮らし体験」モニターツアー2 泊 3 日の全行程に参加していただける方
②モニターツアーの内容についてアンケート等にご協力いただける方

◇行　　程：1 日目（11 月 16 日）
川西町到着後、生活者大学校講座、生活者大学校交流会、ホテル宿泊
2 日目（11 月 17 日）
生活者大学校講座、玉庭地区へ移動し地元住民と交流会、農家民泊
3 日目（11 月 18 日）
体験プログラムのモニター、アンケート回答、東京へ出発
※詳しい行程内容については別添のスケジュールをご確認ください

◇定　　員：10 名

◇参加費用：○モニターツアーで無料となるもの
①東京・川西間の新幹線および在来線のチケット代購入にかかった実費
※ 金額については上限 25,000 円まで負担いたします。
※ 3 日目アンケート回収時にかかった実費をお渡しさせていただきますので、チケット等については、自己負担で事前にご購入ください。（領収証を持参願います）
②２～３日目のモニターツアー経費
（11/17～18 日　宿泊代、夕・朝・昼食代、体験料、保険料等含む）

○モニターツアーで有料となるもの
①生活者大学校参加費用　19,000 円
（11/16～17 日　受講費、交流会費、宿泊代、朝食・昼食等含む）

申し込み：第 26 回遅筆堂文庫・生活者大学校にて申し込み後（申込書同封）、電話または裏面申込書をＦＡＸまたはメールにてお送りください。
すでに生活者大学校に申し込み済でも参加できますのでぜひご連絡ください。

締　切　日：平成 25 年 10 月 31 日（木）

２）詳細行程表

日次	月日(曜)	地　名	時間	交通機関	スケジュール
一日目	2013年 11月16日 (土曜日)	東　京　発 羽前小松駅着 (米沢経由)	午　前 午　後	新幹線 在来線	**◇羽前小松駅にて地域住民のお出迎え後、会場まで移動（徒歩）**
		川西町農村環境改善センター (川西町上小松)	午　後		**―　モニターツアー　１日目　―** **◇地域資源を活用した都市と農村の交流イベントに参加** **○第26回遅筆堂文庫・生活者大学校　１日目講座** 劇作家井上ひさし氏（故）を校長とし、生活者の視点から自らの生活を見直そうと毎年１回、井上ひさし氏生誕の地川西町で開催されており、毎年町外から多数の方が来町しています。 今年度のテーマ　**「3.11後の福島から地域再生への道程を考える」** ・生活者大学校講座 千葉悦子（福島大学教授） 山下祐介（首都大学東京准教授） **○第26回遅筆堂文庫・生活者大学校　交流会** 地元酒蔵から提供されたお酒や、かわにしツーリズムのお母さん方が地元に伝わる郷土料理を提供のほか、地域住民や参加者同士が交流を図ります。
			夜	送迎車	**◇宿　泊** 川西町、飯豊町、長井市に分泊する。 ・浴浴センター「まどか」（川西町） ・白川荘（飯豊町） ・タスパークホテル（長井市）
二日目	2013年 11月17日 (日曜日)	宿　泊　先 (川西・飯豊・長井)	午　前		**◇宿泊先で朝食後**
		川西町農村環境改善センター (川西町上小松)		送迎車	**―　モニターツアー　２日目　―** **◇地域資源を活用した都市と農村の交流イベントに参加** **○第26回遅筆堂文庫・生活者大学校　２日目講座** ・生活者大学校講座 山下惣一（農業・作家）
			午　後		**○昼食およびオプション講座** （昼　食） 川西町の食材を活用した弁当（ひょうたん弁当）の提供 地元農業高校生または地域住民による料理提供 （オプション講座） 地元農業高校生による活動紹介（農業、町づくりなど）や川西町の食材を活用した商品の試食や販売 **○第26回遅筆堂文庫・生活者大学校　全体会** 今年度のテーマについて、参加者全員で討議を行う。
		浴浴センターまどか (川西町上小松)	夕　刻	送迎車	**◇浴浴センターまどかで入浴**
		玉庭地区	夜	送迎車	**◇地元住民（玉庭地区住民、町職員、生活者大学校関係者）をまじえた夕食兼交流会** 会　場：玉庭地区交流センター　四方山館 内　容：新米のおにぎりや地元食材を活用した料理の提供 地元住民との交流（内容については予定）
				送迎車	**◇川西町玉庭地区の農家に宿泊** 川西町の農家に宿泊し、相互の交流を深めていただきながら農家の暮らしを体験

三日目	2013年 11月18日 （月曜日）	玉庭地区 （川西町）	午前		**◇宿泊先で朝食** **―　モニターツアー　３日目　―** **◇体験プログラムのモニター体験** 川西町玉庭地区の地域資源を活用した体験プログラムを実施 ・茅（かや）の収穫 ・野菜の収穫 ・雪囲い　など
			午後		**◇昼食** そば打ち体験や郷土料理づくり。 地元住民と交流しながら自分たちが調理したそばや料理を食べる。 **◇モニターアンケートの実施** ２泊３日のモニターツアーの内容についてアンケートに回答いただきます。
		玉庭地区出発		送迎車	**◇羽前小松駅着**
		羽前小松駅発 （米沢経由）		在来線 新幹線	**◇地元住民のお見送り**
		東京着			

（３）千葉県館山市でのモニターツアーの実施

①ツアーの実施概要

（実施概要）

平成２６年１月２０日（月）～２２日（水）　２泊３日

（参加者）

男性４人　女性１人　（計５人）

性別	居住地 （会社所在地）	職業
①男性・30 代	東京	会社員（人材関連企業）
②女性・20 代	千葉県千葉市	会社員（人材育成部）
③男性・30 代	神奈川県	会社員（館山に自社工場あり）
④男性・30 代	千葉県千葉市	会社員（研修担当）
⑤男性・40 代	東京	会社員

（日程）

1 月 20 日（1 日目）	・移動（集合） ・入村式 ・フィールドワーク ・地元農家に宿泊（民泊）
1 月 21 日（2 日目）	・農作業 ・太巻き寿司づくり ・夕食交流会に参加 ・ペンションに宿泊
1 月 22 日（3 日目）	・市内案内 ・昼食意見交換会 ・移動（帰路）

②ツアーの行程

第１日目（１月 20 日(月)）

◆集合（11：00）　JR 館山駅

・送迎車で「たてやま夕日海岸ホテル」（入村式会場）へ移動。

◆入村式（11：30）

・歓迎の挨拶のあと、参加者の自己紹介。その後館山の概要紹介やツアーの予定等をオリエンテーションした。

◆昼食（12：00）

・郷土食である「さんが焼ご膳」を味わう。

◆フィールドワーク（14：00～16：00）

・市内の農村集落等を散策しながら、地元住民のガイドから館山の歴史や風土、産業や特色等を学ぶ。

◆宿泊先である館野地区の農家に移動（17：00）

・宿泊先となる農家に移動。一緒に夕食を準備（郷土食づくりの手伝い）し、夕食を共にしながら、地域や生活(ライフスタイル)、農業の話などを聞く。

第２日目（１月 21 日(火)）

◆朝食

・宿泊先の農家で朝食づくりの手伝いをして一緒に朝食。（地域の常食を知る）

◆農作業体験（午前）

・宿泊先の農家で指導を受けながら農作業体験を行う。
（ソラマメへの肥料やりトラクターでの耕運等）

◆昼食（12：00）

・館野地区の山本青年館にて、「さんがそぼろ丼」等地元食材を使用した料理を味わう

◆農作業体験（午後）

・農家に戻り、引き続き指導を受けながら農作業体験を行う。
（精米体験など）

◆太巻き寿司づくり体験（16：00）

・宿泊先となるペンションに移動。

・地元の皆さんから指導を受けながら、房総の郷土料理である「太巻き寿司づくり」を体験

◆夕食交流会（18：00

・地元の皆さん（農家、地元関係者）を交えて夕食交流会 を行う。みんなで作った太巻き寿司も登場。

・館山の暮らしや伝統、農山村の魅力や厳しさなどを語り合う

◆宿泊

・交流会会場のペンションに宿泊

く

第３日目（１月 22 日(水)）

◆朝食

・ペンションで朝食。

◆市内見学（各種施設の紹介）

・地元ガイドと一緒に、市内の公共施設や体験施設を視察。研修、宿泊、食事、農業関連、漁業関連施設など、農都交流活動に利用できる施設を知る。

◆昼食（12：00）

・休暇村館山にて昼食。メニューは館山ご当地グルメの「たてやま炙り丼」

◆意見交換会（12：30）

・関係者や行政職員などを交えて今回のモニターツアーを振り返り意見交換。農都交流の魅力や可能性や要望などを話し合う。

・合わせてモニターツアー参加者にアンケートを実施。

◆解散（14：00～）

・JR 館山駅で解散。

③ツアー参加者へのアンケート調査結果（回答者５人）

質問 1. 今回のモニターツアーで印象に残ったこととその理由

印象に残ったこと	その理由
高山様宅への宿泊	農家の人の生活を体験で来て大変楽しい時間を過ごせた
農業体験	トラクター等に乗って畑を耕したりして、とても勉強になった。農かの人たちと話をすることができて楽しかった。
ペンションキャッチボールでの交流会	若い農家の人たちと意見交換ができてよかった。また、参加者たちの交流もできたのがよかった。
ソラマメ畑での肥料を撒いたり、草取りをしたこと	最初はとまどい退屈を感じたが、やっているうちに花がさき、実がなる様子を思い、5/10 にはソラマメを摘み取るイベントがあるというので、来てみることにした。 これからも時々鈴木さんのところへ行ってみたいと思うようになった。
農家民泊	集団で生活をしてコミュニケーションが図れた。
農作業	農業の大変さ食の大切さを感じ取れた。
夕食交流会	地元農家さんと対面でゆっくりと話ができた。
農家民宿での宿泊	現地の方々との会話、触れ合い、現状把握、人の温かさ、これからのビジョン、地域の在り方を学ぶ。
朝（散歩）	風や雰囲気を肌で感じる。本当は、夜の散歩（星空体験）とかも入れたら…
農業体験（トラクター運転、肥料植え）	都会ではできない学びがある。どうやって、食物ができるのか座学ではない学び。

質問 2. 都市部の企業・団体等が農山漁村で研修等を行い、自然・農産漁村生活体験や地域の人たちとの交流経験を行うことについての意見

①とても良いことなので積極的に進めるべきだ　　4 人

②良いことなのでそういう機会が増えるとよい　　1人

（主な意見） とても良いことなので積極的に進めるべきだ

- これからさらに高齢化が続く日本で1次産業への考え方見直し
- TPPに対する日本の食ブランドへのかかわり
- 震災等、災害時の食料自給への考え方
- コミュニケーション力の醸成
- 農業体験は貴重な経験になり食の大事さを感じ取れ、コミュニケーションが図れた。
- 原点回帰、視野視座の拡大
- CSV活動の重要性
- 都市部の人たちは農村部にくることによって新しい発見ができると思う。
- 企業の人たちにもっと来てもらえるようにしたい

質問 3. 都市部の企業・団体が組織ぐるみで農産漁村体験・地域との交流や、グリーン・ツーリズムを行うことの効果や良い点・意義・についての考えや意見

考え方･意見
・ 毎日の生活でのストレスやコミュニケーション能力などをフルに使えるのが農山漁村体験だと思う。 ・ 企業での仕事では得られない能力も築けるかと思う。 ・ B2Cだけでは、消費者を動かすにはハードルがある。 ・ 最終的には個人が大きく動きムーブメントを作るための初動きっかけづくりとして、まずは企業組織での活動が重要。 ・ 効果としてはコミュニケーション能力の向上、職業観の考察ができる。人生観の幅が広がる。

質問 4. 都市部の企業・団体が「農都交流」を行う上での課題と、交流を促すための方法やアイデア

◆課題

- 企業の研修を対象として考える場合、建物、道路、食べ物などがおいしいなどのハードウェアの他に、ソフトウェアーの開発（研修プログラム）整備があってよいと思う。
- ①時間、②金、③手間、④効果、⑤定期的なディスカッション（地域ごとに課題が異なるため）（時とともに変化するため）
- 農都交流を研修として行う際の趣旨を明確に参加者に伝え、行動に促すこと
- 農都交流の趣旨、理念はほとんど、企業担当者が賛同。最後にいわれるのが「実績は？」「費用効果は？」
- 企業等にどう知ってもらいたいかが大切。農都交流という言葉をもっと広める。

◆交流を促すための提案やアイデア

- 教育心理学に対する知識経験のある人、スタッフが農業体験プログラムに、たとえば認知行動療法、あるいはエンカウンター等の手法を加えて提供する。これらの手法を取り入れると研修期間は少なくとも2～3日の期間が必要となるが確実な実績をあげることができ、リピーターを確実にえることができると思う。そのように思う理由としては、認知行動療法、エンカウンターにはすでに効果ができるという科学的な統計がすでに取れています。 ※エンカウンター→集団感受性訓練
- ①研修年間プログラムへ組み込んで担当者への無料モニター。②モニターは無料、初年度は確認で実施。③農家とつなぐハブ機能を地元に観光会社やJTBが担う。④理解、コミュニケーション力、メンタル力、日本社会への理解へ繋げる。
- 研修前に説明会を開催し（可能であれば）、企業側の趣旨を説明していただき、グループディスカッション等をして参加者のやる気を促す。
- まずは象徴的な3つくらいの実例づくりが最優先。（モニター的に）「どういう目的で」、「どういうプロセスで」、「どうやって」、「どうなったか」をリアルに目に見える形にすることが最大の材料となると考える。
- TVやメディアを使って、もっと知ってもらえればと思う。企業に売る込にいければよいと思う。

質問 5. 企業・団体等が農山村地域で適する活動についての考えや意見

適する活動等	内容・理由
コミュニケーション力アップ	普通のコミュニケーション研修とは違う実際の農村の人たちを相手に話すことができるので、わすれることができない研修になると思う。
新入社員研修	入社して間もない人たちに農業を体験してもらい、チーム力、コミュニケーション力を身に着けてもらえると思う。
オフサイトミーティング （戦略キャンプ）	部署、世代を超えた横断的なメンバーで未来のあるべき姿を考える。その際に職業、年齢、価値観の異なる方々との交流が大きなヒントに。
チームビルディング	段取り力、タイムマネジメント、目に見える成果→達成感、チークワーク、絆醸成
労働組合行事	家族の絆再確認→仕事の原動力、離職、年齢、組織へのロイヤリティ向上
農家の販路拡大活動	農協さんだけでなく、インターネット等、道の駅都市部アピール
休耕地の利用	個人、法人に休耕地を貸し出し
次の世代に農業をつなげる	農業を教える場を作り、都市部から人材を入れる。
企業研修（人材育成）	チーム力向上、社会の理解力向上、ボランティア精神
被災地支援活動の一環	CSR 限界集落等日本の将来への理解力
防災的パートナー醸成	自給自足精神 国民的協力体制

④ツアーを受け入れた住民へのアンケート調査結果（回答者６人）

質問 1. 今回のモニターツアーへの協力・関与状況

モニターツアーへの協力・関与内容
・進行の補助、全行程の参加、企画・集客・営業
・地域の歴史文化ガイド
・体験交流協会としこの農都交流プロジェクトにスタッフとして参加。 （交流会の食事等の提供、宿泊所として、ペンションキャッチボール施設提供等）
・農作業の指導
・宿泊、食事等の提供、農作業の指導
・企画の手伝い、資料作成（農業分布マップ、太巻きレシピ、ガイドマップ等）

質問 2. モニターツアーで他地域の人を受け入れた感想

①事前準備についての感想

・大変だった	１人
・それほど大変ではなかった	２人
・なんとも言えない	３人

②実際の受け入れ時の感想

・大変だった	２人
・それほど大変ではなかった	２人
・なんとも言えない	２人

③交流会の感想

・とても楽しかった	３人
・まあ楽しかった	２人
・なんとも言えない	１人

④今後の受入活動への参加意向

・ぜひ参加したい	３人
・参加してもよい	２人
・なんとも言えない	１人

⑤モニターツアーの受入で印象に残っている点や楽しかったこと

・農家さんの夕食・・・地域の人との交流、地域ならではの食事

・地元のお母さんの昼食・・・集会所を使った食事会、地元のお母さんの手料理

・農業体験（昔ながらの道具を使った体験）

・企業の方との交流は初めてでしたが楽しかった。ぜひこれからも希望したい。

・農作業の大変さが理解できた。

・緊張感がよかった。

・今後が大切と感じている。まだスタートということではなく、どのようにしてスタート準備をしていくか、もっと具体的な情報提供を出し合い、館山スタイルで今何をすべきか、どのようにしてプログラムを開発していくかを打ち合わせし、仲間に呼掛け、みんなでベストなスタイルを開発し、企業側の意見を聞き、型にはめず、つくりあげていきたい。なにはともあれ、動き出すことが重要と考える

・未知のエリア、産業が多く、PRに向けて勉強が必要

・地元とのたのしい交流の道筋ができた

⑥都会の企業などと交流・連携をすすめるための「課題」や「問題」

・農家民宿・・・現状では少ないため ・企業側の目的の聞き取り、理解する能力 ・農家民宿がどれだけできるか ・漁を加えたらよいのでは ・農家民宿の受け入れ体制の強化が課題 ・農家民宿のサポートがどれだけできるか ・企業にとってのテーマは何か ・企業側は何を望んでいるのか ・健康維持の予防体験の話がほしいと思います ・医療削減につながると感じています ・受入側としては、まだまだ情報が少なすぎるので地域の交流をしながら模索し動き出しが重要 ・対企業側に意見を聞くことが重要で、その意見に則したスタイルを作りあげること。課題、問題点を集め、交流していくなかで、早めに実行してきた。 ・受入側の増強→人材育成、人数、意識、知識、経験、システム ・安全安心情報の発信

質問 3. 都会の企業や大学が川西町（置賜地域）のような農山村を訪れて交流することに対する考え方

①とても良いことなので積極的に進めるべきだ　　５人

（主な意見）

・地域の活性化 ・館山ファンの育成→個人旅行、リピーターへ ・ターゲットをしぼり、目的等を目標に情報を聞き出し、地域の交流を進めていきたい ・人的交流が増えるとともに館山の認知度を常に向上させられる ・館山には歴史・文化・自然・食材、よそに負けないものがたくさんある。ぜひ、活かして元気な館山にしてほしい

質問 4. 都市部の企業等との交流活動の良い点、悪い点

良い点	・若手農業者の理解 ・地元が元気になる ・経済向上によい ・農家にやる気が出る ・地元PR、人的交流 ・農作業はとてもよいメニューだったと思う ・食事はおもてなしができたと思う ・すべて良いことでありました ・今後が大切でこの交流を機会に組み立てが重要 ・地域の活性化、収益の発生

悪い点 （改善点）	・課題が何かは交流（話し合い）して、それぞれの思いを聞き出したい。 ・目的がはっきりしない。 ・特になし　事後対応で先に進めるべき。 ・農だけでなく漁が参加するとなおよいと思う。 ・農漁が加わることで館山らしさがでるのではないか。 ・高齢者の積極的な参加が必要。

⑤ツアー関連資料

１）参加者への案内状

「農都交流プロジェクト２０１３」
千葉県館山市 農都交流プログラム モニターツアー参加のご案内

■実施期間　：平成２６年１月２０日（月）～２２日（水）　２泊３日

■集合・解散　：【集合】　ＪＲ館山駅西口　１月２０日（月）　午前１１時００分
【解散】　ＪＲ館山駅西口　１月２２日（水）　午後　２時００分
※別紙案内図を参照

■行程　：詳しい行程については、別添スケジュール表をご覧ください。
１日目（１月２０日）
館山市到着後、農村地域でのフィールドワーク、農家に宿泊
２日目（１月２１日）
農家で農作業、郷土料理づくり体験、地元農家等との交流会、ペンション宿泊
３日目（１月２２日）
活用施設の紹介、意見交換、アンケート

■宿泊先　：【１日目】
以下のいずれかの施設にご宿泊いただきます。現地にてご案内します。
① 農家民宿「ペンションスズキアグリ」　館山市山本 1038
②米生産農家「高山誠宅」　館山市広瀬 876-1
【２日目】
以下の施設にご宿泊いただきます。
ペンション　キャッチ・ボール　館山市洲宮 768-76

■参加費用　：無料（交通費（東京駅・千葉駅～館山駅）、宿泊代、食事代、交流会費、体験料）
※ご参加される方のご出発地～館山駅までの交通費の清算について
東京駅・千葉駅～館山駅間の高速バス料金相当額を当日現地にてお支払いします。

■持ち物　：洗面用具（シャンプー・リンス、歯ブラシなど）、タオル、着替え、寝間着（ジャージなどでＯＫ）、農作業用の服（屋外での農作業用）、帽子、運動靴、防寒具
※農作業時に必要な長靴・軍手はこちらで用意します。
※１日目の宿泊施設は農家民泊ですので、洗面用具、タオル、寝間着等のアメニティはございませんので各自ご用意ください。

■運営体制　：企画運営　たてやま農都交流推進事務局（館山市経済観光部農水産課内）
運営協力　ＪＴＢコーポレートセールス、館山体験交流協会、また旅倶楽部、館山市

■緊急時連絡先：たてやま農都交流推進事務局　勢見（セイミ）090-1660-4213

■問い合わせ先：たてやま農都交流推進事務局（館山市経済観光部農水産課内）担当：勢見・前田
ＴＥＬ0470-22-3396　ＦＡＸ0470-23-3115
E-mail nousuisanka@city.tateyama.chiba.jp

２）詳細行程表

館山市農都交流プログラム モニターツアースケジュール

(2014.1.9)

日次	月日(曜)	地 名	時間	交通機関	スケジュール
1	2014年 1月 20日 (月)	東京等発 館山着	午前	高速バス等	
				送迎車	11：00集合（館山駅） ・着後、送迎車で入村式会場へ ○入村式　会場：たてやま夕日海岸ホテル ・自己紹介、地域概要説明、その他相互理解の場です。
			昼		○昼食：「さんが焼ご膳」会場：たてやま夕日海岸ホテル
			午後	送迎車	○フィールドワーク（地元学講座） ・地元ガイドの案内で市全域、農村集落を見て歩き、館山市の歴史や農村の暮らしなどについて学びます。
			夕刻・夜	送迎車	○館野地区の農家に宿泊 ・地元農家にて夕食及び宿泊。家の人たちと一夜を共に過ごし、相互の交流を深めていただきます。 ・農家と共同で夕食の郷土料理を調理します。 〈館山市内・農家宿泊〉
2	1月 21日 (火)	館野地区	朝 午前・午後		○朝食づくり手伝い、朝食 ○農作業（午前・午後） ・宿泊した農家の農地にて、野菜の栽培作業、水田の耕運作業などを行います。 ※昼食：「さんがそぼろ丼」等地元食材を使用した料理 会場：山本青年館
			夕刻	送迎車	○「太巻き寿司づくり体験」　会場：ペンション ・房総の郷土料理である「太巻き寿司づくり」体験を行います。
			夜		○地元の皆さん（農家、地元関係者）を交えた夕食交流会 会場：ペンション ※夕食交流会メニュー ・地元の海の幸、山の幸を使用した料理 ○ペンションに宿泊 〈館山市内・ペンション宿泊〉
3	1月 22日 (水)	館山市内	朝		○朝食
			午前	送迎車	○企業活動に利用できる施設のご紹介 ・地元ガイドの案内で、研修、宿泊、食事、農業関連、漁業関連など企業活動に利用できる施設を現地にてご紹介します。
			昼・午後		○昼食及び意見交換会　会場：休暇村館山 ・昼食：たてやまご当地グルメ「たてやま炙り海鮮丼」 ・地元関係者を交えて、今回のモニターツアーを振り返ります。 ・アンケートにご協力いただきます。
				送迎車	14：00解散（館山駅）
		館山発 東京等着		高速バス等	

ご注意：スケジュール内容は天候等により変更となる場合がございますのでご了承ください。

第２節　相互交流を促すための情報発信と情報共有活動

１. 全国セミナーの開催

農山漁村と企業・大学等の交流活動を促すために、交流に関する情報発信と情報提供を目的にセミナーを２回開催した。

第１回は農山漁村と企業・大学等との交流活動への関心喚起や理解形成を目的に８月に実施。２回目は平成２５年度の取組等を踏まえた情報共有を目的として平成 26 年３月に、いずれも東京において実施した。

（１）第１回セミナー

①開催概要

（実施概要）

平成２５年８月３０日（金）14：00～15：00

大手町サンケイプラザ　３階会議室

（参加者数）

１２１人

（プログラム）

◆第１部	
開会挨拶	農村政策としての都市農村交流について
基調講演	企業の課題と地域の価値 －これからの社会における農山村の可能性－
プロジェクト概要紹介	農山村地域･都市型企業双方が Win-Win となる農都交流プロジェクト － 都市企業・大学との交流で、地域はどう変わりつつあるか？－
◆第２部	
事例紹介	山形県飯豊町で取り組んでいる『農都交流プロジェクト』 － 都市企業・大学との交流で、地域はどう変わりつつあるか？－
パネルディスカッション	企業担当者から見た農山漁村地域での企業活動

②セミナー発言要旨

【第１部】

１）開会挨拶（冒頭アピール）

「農村政策としての都市農村交流について」

大澤　祐一氏（農林水産省農村振興局 都市農村交流課長）

日本の農山漁村地域には豊かな自然と魅力ある食、また時代を超えて受け継がれている伝統文化や生活様式がある。農林水産省ではこうした農山漁村の資源を、集落自身が観光や教育、健康分野などに活用して、農山漁村と都市生活者の活性化を図る「都市農村交流」を支援・推進している。

平成 20 年度からは文部科学省や総務省と連携して、小中高校生を対象に農山漁村での宿泊や体験活動によって「生きる力」を育み、農山漁村への理解を深める「子ども農山漁村交流プロジェクト」を実施し成果をあげている。今後はこうした交流を大学生や社会人など様々な世代へと拡大・推進していきたいと考えているところだ。

今回の「農都交流プロジェクト」は、企業の研修等をきっかけに都市と農村が交流を進め、体験活動や交流活動を通じて双方の抱える課題を解決するというものだ。農都交流プロジェクトが新しい都市農村交流のスタイルにつながるものと期待している

２）基調講演

「企業の課題と地域の価値―これからの社会における農山村の可能性」

澁澤　寿一氏（東京農業大学農山村支援センター 副代表、NPO 法人共存の森ネットワーク理事長）

◆高度経済成長期を挟んで劇的に変化した日本社会

日本の変化や農山漁村の生活史を残し継承するために高校生による高齢者への「聞き書き活動」を行っているが、そこから日本の社会は高度経済成長によって劇的に変化したことが見えてくる。

1960 年前後の高度経済成長によって、日本は別な国、別な社会に変わってしまった。一言でいえば高度経済成長を経て日本は経済（お金）と物質文明中心の社会になったということだ。かつては第一次産業従事者が７割を占め農山漁村が日本の中心であり、自然と向き合いながら自給自足や相互扶助の暮らしが広がる社会だった。

ところが高度経済成長によって、製造業が基幹産業になり農山漁村から都市への人口移動が進行。食べ物は育てるものではなく買うものになり、電化製品や自動車のある暮らしが「豊かさ」とされた。そして高校を出て都会の大学に通い、そのまま都市の大企業に就職してサラリーマンとして人生を送るという「人生モデル」が理想とされるようになった。

この時期農山漁村でも耕耘機（トラクター）やチェーンソーが入るなど機械化が進み、生産性は上がったが、ガソリンや機械の挿入・更新のために現金収入が必要となった。現金収入のために兼業化が進み、子供たちは成長とともに都市部に出ていくことが多くなった。それまでの、住んでいるところから歩いて行ける範囲で「自然とともに、生きるために働く」という暮らしが大きく変化したのだ。

◆「不安の時代」の到来

今、日本社会には「不安」が広がっている。高校生たちに聞くと、リーマンショックや年金問題などを目の当たりにして、都市でサラリーマンとして働き、将来は年金で暮らすという高度経済成長以降の「人生モデル」「社会モデル」への不安を感じ、自分たちが何を目標に生きていけばよいかわからないという。こうした将来への不安は若い世代だけでなく各世代に広がっている。

地球環境問題への不安も大きい。かつて人間は自然の成長量の半分程度を消費していたものが、現在は 1.5 倍を消費するに至っている。いわばこれまでの蓄積を人間が食いつぶしているということだ。これも将来への不安の大きな要因となっている。

日本は経済と物質文明の発展を中心とする「豊かな社会」をめざし実現してきた。その結果として先進国の地位を得たとされている。しかし次世代が将来に希望や展望を持てず、不安を感じる現在の日本社会は本当に先進国といえるのだろうか。

◆「農都交流」とは 50 年後の日本社会を創る試み

全国の農山漁村を訪ねると、どこでも一様に「高齢化」「少子化」「過疎化」「公共交通」「医療への不安」などが問題という。ところが同じ問題が都市でも起こっている。高度経済成長期に誕生した東京のニュータウンでは、今、高齢化や過疎化、孤独死、買い物難民などが大きな課題となりつつある。いわば農山漁村は都市の課題を先取りしているわけで、都市あるいは日本の社会が直面する 20 年後の姿といっても過言ではない。

その意味では、現在の農山漁村はこれからの日本社会のモデルであり、良い意味で実験の場として大いに活用していくべきだろう。その一つの方策が「農都交流」である。

聞き書きを行った高校生の中には、山村の暮らしを知るにつけ、現在の人生モデルとは違う生き方の存在に気付いた子供たちも多い。日本人の多くは大学に進学し企業に所属する。その大学や企業が、単なる

観光ではなく、農山漁村の生活や生き方を体験・交流することの意味は大きい。

ただ注意すべきはただ訪問するだけでは十分ではないということだ。都市と農村ではコミュニティの約束事も個人のライフスタイルも異なっている。相互理解や交流を進めていくには、両者をつなぐインタープリター（通訳、仲介者）が欠かせない。

都市の抱える問題や課題は都市だけでは解決できない。同様に農山漁村の抱える問題や課題も農山漁村だけでは解決できない。日本の社会がその歩みの中で生み出した問題・課題であり、その解決は日本の社会全体の仕組みや価値観を変えていく中にしかない。人づくりも重要だ。

「農都交流」とは、単に農山漁村を活性化する取り組みにはとどまらない。農山漁村と都市の関係の再生を目的とするものであり、すなわち 50 年後の日本社会のあり方を考えるものだ。「農都交流」とは 50 年後の日本はどうあるべきか、どうつくっていくかという試みだと位置づけられる。

【参考】※講演資料より一部抜粋

現代社会の課題と将来像

農山村の問題	都市の問題
・過疎化	・退職高齢者の役割・居場所
・高齢化・少子化	・食の安全・安心（確保）
・都市との所得格差	・ストレス・不安・落ちこぼれ
・教育環境	・健康
・医療	・若者の雇用・働く場
・働く場	

・循環型社会（共通）
・自然共生型社会（共通）
・低炭素・生物多様性（共通）
・新しいライフスタイル（価値観）の構築

対極ではない都市と農山村

農山村と都市の共生モデル

都市の問題は都市だけでは解決できない。

農山村の問題も、農山村振興策だけでは解決できない。

日本の問題も、グローバルマーケットだけでは・・・

⇒環境モデル（環境システムづくり） ＋ 生き方のモデル（新しい価値観づくり・人づくり）

３）プロジェクト概要紹介

「農山村地域・都市型企業双方が Win-Win となる農都交流プロジェクト」

石川　智康氏（JTB コーポレートセールス　チーフマネージャー）

現在、農山漁村では「交流」をキーワードに地域外の人たちを呼び込み、食や自然体験を提供する活動が活発化している。地域外の人たちが訪れることで地域の賑わいや活力が高まり、産品の購入などで経済効果が期待できるという狙いによるものだ。成功している地域も見られるが、取り組んだもののうまくいっていないという地域も多いようだ。

実際に地域の人たちに話を聞くと、「よその人たちに見せるようなものがない」「『おもてなし』といわれても何をすればよいかわからない」「来た人たちの相手をするのは疲れる」「安定的に人が来ない」などといった問題を挙げる声が多い。そうした声に共通するのは、従来の「観光」客を受け入れるという考え方で、何か珍しいものを見せる、あるいは地元の人はめったに食べない料理をだそうといった、日常的な体験でもてなそう、満足してもらおうと、頑張りすぎていることだ。

普段と違うことをするのは大変だし、頑張れば疲れるのは当たり前だ。しかも訪れる人たちが何を求めているかをあまり考えない（＝マーケティングができていない）から、リピーターが獲得できない。いつの間にか活動が低迷し、受け入れる力が弱くなるという悪循環に陥ることになる。

「農都交流」の考え方は従来のものとは全く異なる。「農山漁村を観に来てもらう」ことが目的ではなく、「課題解決のために農山漁村というフィールド・資源を利用してもらう」ことが目的となる。したがって、訪れる人は一方的にもてなされる人ではなく、農山漁村の人たちも一方的にもてなす人という構図にはならない。むしろ双方が当事者として一緒にプログラムを作り、一緒に実施していくという、観光とは異なる新しいスタイルの交流活動と位置づけられる。

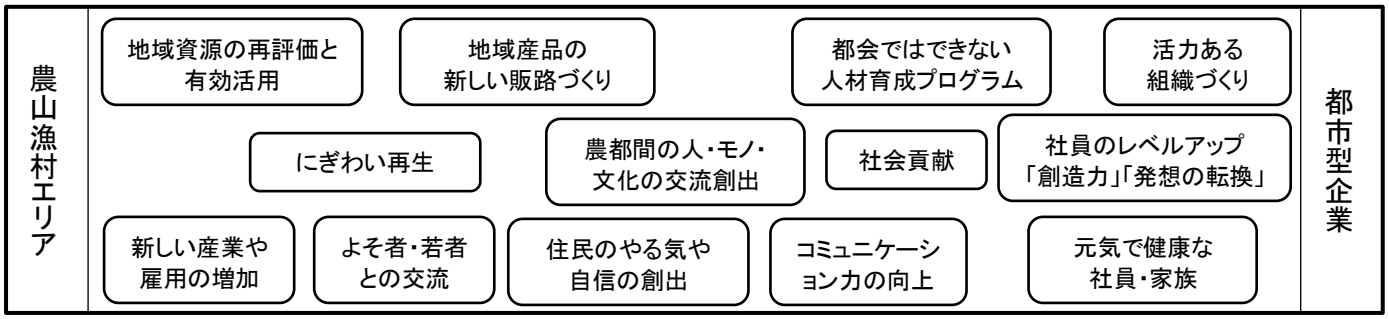
農山漁村地域も都市型企業、都市生活者も、それぞれ様々な課題を抱えている。一方で農山漁村には豊かな自然や支えあうコミュニティやライフスタイル、都市型企業や生活者には情報や人材、ネットワークといった資源がある。「農都交流プロジェクト」は、こうした都市と農山漁村の課題や資源に着目して、交流・連携を進め双方の課題を一緒に解決していこうという取り組みである。

企業や都市生活者の課題やニーズ、受け入れ地域の資源をマッチングさせながら、問題解決につながるプログラムや交流活動を開発・実施していくために、これを行えばよいという定型のプログラムはない。基本となる活動をカスタマイズしていくことが求められる。それだけに１）受け入れる地域の住民のみなさんのやる気・本気度、２）双方をつなぐマッチング機能や体制、３）企業や大学生等の明確な目的意識が問われる活動である。しかしその先には、農山漁村の賑わいの再生や地域振興、企業には元気な企業風土、大学生には新しい価値観への気づき、といった果実（効果）が期待できる。

ぜひ農都交流プロジェクトにご理解をいただき、取り組みの輪をご一緒に広げていただきたい。

【参考】※講演資料より一部抜粋

◆農都交流によって期待される効果（例）



②セミナー発言要旨

【第２部】

１）事例紹介

「山形県飯豊町で取り組んでいる『農都交流プロジェクト』について」

小松　一芳氏（飯豊町商工観光課長）

飯豊町は山形県の南西部、百名山の一つ飯豊山のふもとに位置し森が広がる小さな町だ。山の木を利用した林業と農業が中心の里山地域、農山村地域ということになる。山森川の豊かな自然や、散居集落の景観などから「日本で最も美しい村連合」に加盟している。

飯豊町は 1970 年代から住民参加のまちづくりを進めており、住民とともに「街づくり・人づくり」を推進してきた。少子高齢化や過疎化、賑わいや活力の低下といった課題がひろがる中で、2006 年（平成 18 年）頃から「都市と農村の交流」に力を入れ始め、「日通の森」などの誘致活動を行った。これに伴い、住民による農家民宿、農業体験や自然体験を中心とするプログラム開発、都市との交流を推進する協議会などの受け入れ体制を官民一体となって整備してきた。また台湾で「（日本の）田舎に泊まろう」をコンセプトに誘客活動も展開してきた。

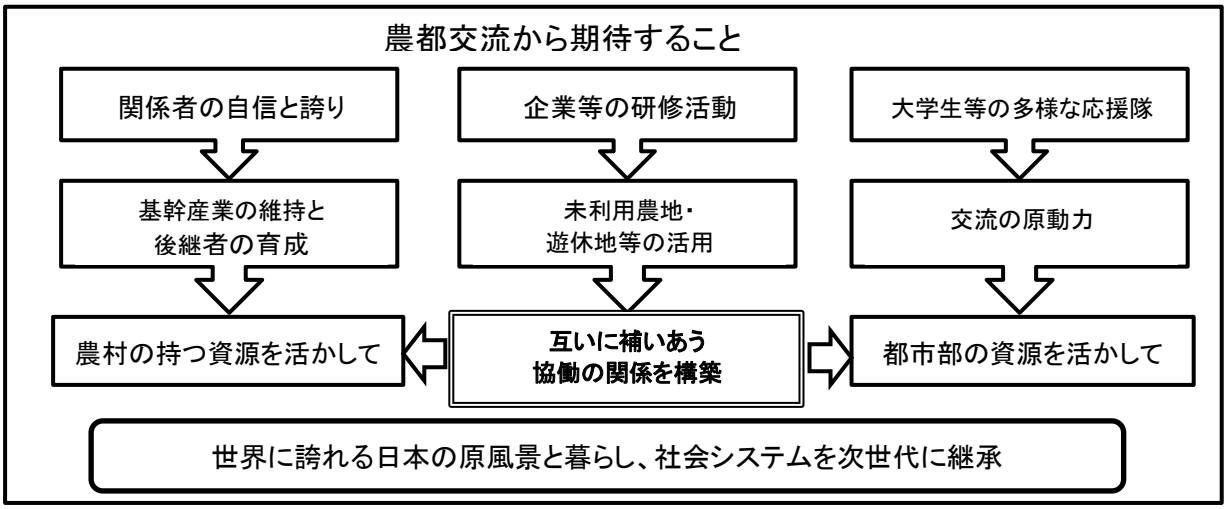
こうした交流の中心となっているのは「中津川地区」とで、ここ 50 年で人口が 10 分の 1（3200 人から 320 人へ）になり、高齢化率が 53%という里山地域だ。住民のみなさんは大きな危機感を感じており、集落・地域を残すために外部（都市生活者）との交流に積極的に取り組んでいる。

これまでの活動の延長上で、昨年度から「農都交流プロジェクト」に取り組んでいる。森や農業体験をした都市生活者が「感動」する姿を見るにつけ、単なる観光的な体験から一歩踏み込み、企業や都市生活者の問題解決に寄与するような交流が可能ではないかと考えて取り組んでいるものだ。

「農都交流」の取り組みは都市型企業や生活者との関係をより深め、継続的な関係やリピーターの育成につながるだけでなく、地域住民の活性化、さらに自信や誇りの回復にもつながると考えている。昨年実施した雪のイベントでは、都市の大学生が住民と一緒にイベントの企画・運営にも参加したが、若い人たちの存在は住民を笑顔にしたし、雪の暮らしや知恵を大学生に語る中で自分たちの暮らしや地域に自信や誇りを感じた住民も多かったようだ。

飯豊町は都市との交流を通じて「共生と自立できる地域の創造」を目指している。中でも「農都交流プロジェクト」は、農山村と都市のお互いの資源を活かして、お互いが補うあう協働の関係を構築する取り組みであり、世界に誇れる日本の原風景と暮らし、社会システムを次世代に継承するという意味でも大きな意義を持つと考えている。

【参考】※講演資料より一部抜粋



２）パネルディスカッション

「企業の立場から見た農山漁村地域での企業活動」

（パネリスト）

片岡　久 氏　（株式会社アイ･ラーニング代表取締役社長）

大塚　雅樹 氏（株式会社JTBコーポレートセールス 取締役マーケティング部長）

小松　一芳 氏（山形県飯豊町商工観光課長）

澁澤　寿一 氏（NPO法人共存の森ネットワーク理事長）

（コーディネーター）

石川　智康 氏（JTB コーポレートセールス　チーフマネージャー）

◆都市型企業から見た農山漁村（飯豊町での体験から）

（大塚）　弊社は首都圏の企業や法人を顧客として、旅行を中心とした各種商品を企画・営業しているが、中には新人研修やマネジメント研修の会場手配やプログラムづくりのお手伝いを依頼されることもある。最近感じるのは、会場を含めて企業は研修の場や研修プログラムに苦労しているなということだ。

昨年 6 月に「農都交流」を実感してみようと、飯豊町で社員研修を行った。農作業のお手伝いや森の散策、中津川地区の住民との交流など様々なプログラムを行ったが、社員の顔つきは明らかに変化し、最終日に行った課題発表では感極まって涙を流す社員まで現れた。都会で一人暮らしの社員には、中津川の人たちの温かさが身に沁みたようで、人間性の回復面でも効果を感じた。都会の研修室では味わえない体験や研修が可能なことを実感した。

（片岡）　弊社はＩＢＭなどＩＴ分野の研修などを生業としている。社会のデジタル化が進行しているが、デジタル化できるものすぐにコピーされてしまう。つまり「価値」が低減してしまう。ところが「感動」や一度しか経験できないものはコピーできないから、デジタル社会では非常に価値のあるものとなる。

昨年 10 月のモニターツアーに社員とともに参加したが、飯豊町の体験はまさにコピーできない大きな価値にあふれるものだった。特に農家民宿でご主人から、「飯豊町にはデマンドタクシーがある」という話を聞いたが、限られた資源をみんながシェアするという発想は今まさに私たちが取り組んでいることであり、驚きとともに強く印象に残っている。

飯豊町のような農山漁村は、都市型企業にとって気づきや柔軟な発想をもたらす場ともなる。「感動しつつ学ぶ」という体験は得難いものであり、大きな可能性を感じている。

（大塚）　仕事のできる人間というのは「リセット」が上手な人が多いように思う。やり方は人さまざまだろうが、飯豊に行った時に「ああこういうところに来ればリセットできるな」と感じた。研修には次のステージに上がるためのリセットの役割もある。「農都交流」はそういうとらえ方もできるのではないか。

◆企業が求める「感動しつつ学ぶ」プログラムをどのようにデザインするか

（澁澤）　企業はこれまで商品を通じて社会とつながってきたが、商品だけでなく社員やＣＳＲ活動など、企業総体で社会とつながっていく時代を迎えている。どのような社会を目指すのかという目標意識を共有し、その目標から逆算して行動していくことが求められている。

農山村には次に目指すべき社会や行動のヒントがあり、それゆえ農都交流が注目されるのだが、受け入れる側の地域の方がそのことに気づいていないことが多い。シェアするシステムや支えあう暮らし方は、彼らにとっては「当たり前」のことだから、それが研修のプログラムになることが理解しづらいわけだ。

農山村の価値をすくい上げ、プログラムや感動体験にデザインしていくには、やはり外部の視点（よそ者の力）が必要になるだろう。任せるのではなく、自分たちも次世代に残すべき社会を一緒に考え、それを学ぶために何が提供できるかを具体化していく。外部の力を利用しながら受け入れについて考えることも重要だ。

◆「農都交流」で農山漁村はどう変化するか

（小松）　外部からの受け入れをするとなると住民はどうしても頑張ってしまう。普段とは違うおもてなしをしようとするのだが、それでは長続きしない。できるだけ普段の生活を見せること、頑張りすぎないようにしてくれとお願いしている。

研修やモニターツアーの受け入れを通じて住民自身も「感動」を体験している。最終日にバスが出発する時に、どこからともなく受け入れにかかわった住民が集まってきて見送りをするようになってきた。短いとはいえ時間を共有したことで、住民も変わってきているのだろう。

以前に比べて地域外の人たちの話を聞くようになったこと、自分たちの暮らしや自然に誇りや自信を持つようになったことなど、前向きな変化が起こっている。

（片岡）　飯豊だけでなく農山村には豊富な資源や可能性がある。それを活用するには、住民自身の気づきが必要だ。「あれっ」という気づきが行動を生み、成長につながる。そのために自分たちとは違う「異化物」（よそ者）を活用して、気づきや変化を生みだしてほしい。

◆「農都交流」の目的は自治・自立する地域づくり

（澁澤）　「農都交流」の目的あるいは理想形を地域の側から見ると、企業が来ることは手段であって、最終的な目標は「自治・自立する地域づくり」にあるだろう。単なる観光で企業の人たちにお金を落としてもらうのではなく、訪れたあるいは交流する企業の人たちにも地域づくりを手伝ってもらう、という関係が理想形なのだろう。

飯豊の場合、受け入れの中心となっている中津川地区は過疎化と高齢化が進み、集落が消滅するという危機的状況に追い込まれている。そうした中で中津川の人たちは「頑張って集落を残す」という選択をした。集落を残すために外部の人を受け入れ、パートナーとして地域づくりを手伝ってもらおうということを全員で決めた。それゆえ中津川の人たちは驚くほどオープンマインドであり、おもてなしの心にあふれている。

「農都交流」を成功させるには受け入れる住民の覚悟や本気度が欠かせない。自治・自立の地域づくりを進めるという、根幹の部分をしっかりと抑えたうえで、住民のみなさんの合意を形成し地域全体で受け入れ態勢を形成していただきたい。

③第１回セミナー参加者へのアンケート調査結果

１）企業・大学等関係者へのアンケート結果

１．セミナーの認知経路と参加した動機

所属企業・団体		セミナーの認知経路（Q1）	セミナーに参加した動機・理由（Q2）
1	NPO法人	・自治体などの職員から	・農山漁村を活用したビジネスの可能性
			・「農都交流」という言葉に関心を持った
2	無回答	・JTBの社員からの案内	・研修活動の場として農山漁村に関心がある
			・福利厚生の場として農山漁村に関心がある
3	旅行会社	・農政局から	・現在行っている事業の延長で
4	旅行会社	・JTBの社員からの案内	・近く農村で研修を行うため
5	旅行コンサルタント	・農政局から	・農山漁村を活用したビジネスの可能性
6	大学	・農水省のメールニュース	・社会貢献活動の場として農山漁村に関心がある
7	教育研究	・友人・知人から	・商品開発・研究の場として農山漁村に関心がある
8	IT会社	・アイ・ラーニング社のセミナー	・顧客へのサービスへの利用の可能性
			・農山漁村を活用したビジネスの可能性
			・「農都交流」という言葉に関心を持った
9	インフラ関連企業	・インターネットの記事やブログ	・地域振興に興味がある
10	建設コンサルタント	・農政局から	・農山漁村を活用したビジネスの可能性
11	建設業	・JTBの社員からの案内	・農山漁村を活用したビジネスの可能性
12	総合建設業	・友人・知人から	・研修活動の場として農山漁村に関心がある
			・社会貢献活動の場として農山漁村に関心がある
			・農山漁村を活用したビジネスの可能性
13	情報サービス	・インターネットの記事やブログ	・「農都交流」という言葉に関心を持った

【認知経路】

（3人）　「農政局から」「JTBの社員からの案内」

（2人）　「インターネットの記事やブログ」「友人・知人から」

（1人）　「自治体などの職員から」「農水省のメールニュース」「アイ・ラーニング社のセミナー」

【参加した動機・理由】（複数回答）

動機・理由	人（%）
・農山漁村を活用したビジネスの可能性	6人（46.2%）
・「農都交流」という言葉に関心を持った	3人（23.1%）
・社会貢献活動の場として農山漁村に関心がある	2人（15.4%）
・研修活動の場として農山漁村に関心がある	
・福利厚生の場として農山漁村に関心がある	1人（7.7%）
・商品開発・研究の場として農山漁村に関心がある	
・顧客へのサービスへの利用の可能性	
・現在行っている事業の延長で	
・地域振興に興味がある	
・近く農村で研修を行うため	

２．農山漁村における研修活動等の状況と今後の意向

所属企業・団体		現在農山漁村で行っている体験や交流活動（Q3）	農山漁村での活動意向（Q4）	
			意向	取り入れたい活動
1	NPO法人	・スポーツ部やサークルの合宿	実施中	・スポーツ部やサークルの合宿
2	無回答	・会社の福利厚生活動（レジャー）	○	・会社の福利厚生活動
3	旅行会社	・現在検討中	◎	・新入社員の研修活動 ・部門や部署ごとの研修活動
4	旅行会社	・新入社員の研修活動	□	
5	旅行コンサルタント	・スポーツ部やサークルの合宿 ・社員旅行やお客様招待ツアー	○	・社会貢献活動（CSR）
6	大学	・社会貢献活動（CSR）	□	
7	教育研究	・社会貢献活動（CSR）	○	・部門や部署ごとの研修活動
8	IT会社	行っているものはない	□	
9	インフラ関連企業	・海外植林ツアー	×	
10	建設コンサルタント	行っているものはない	◎	・会社の福利厚生活動 ・新入社員の研修活動 ・社会貢献活動（CSR）
11	建設業	行っているものはない	○	・管理職昇任時などにおける研修活動
12	総合建設業	・社会貢献活動（CSR）	○	・管理職昇任時などにおける研修活動
13	情報サービス	・社員旅行やお客様招待ツアー	○	・会社の福利厚生活動 ・社員旅行やお客様招待ツアー

※◎＝ぜひ取り入れてみたい　○＝機会や適当な地域があれば取り入れてみたい　　□＝わからない・何ともいえない
×＝まったく取り入れたいとは思わない

【現在行っている活動】

（3人）　「社会貢献活動（CSR）」

（2人）　「スポーツ部やサークルの合宿」「社員旅行やお客様招待ツアー」

（1人）　「会社の福利厚生活動」「新入社員の研修活動」「海外植林ツアー」

※行っているものはない、現在検討中　（3人）

【農山漁村での活動を今後取り入れることについて（意向）】

・ぜひ取り入れたい　2人

・機械や適当な地域があれば取り入れてみたい　6人

・わからない・何とも言えない　3人

・まったく取り入れたいと思わない　1人

・現在実施している　1人

【取り入れてみたい活動】（複数回答）

・研修活動　6人

（新入社員研修　2人　管理職昇進時などの研修　2人　部門や部署ごとの活動　2人）

・会社の福利厚生活動　3人

・社会貢献活動（CSR）　2人

・社員旅行やお客様招待ツアー　1人

・スポーツ部やサークルの合宿　1人

3．「農都交流（農山漁村での体験や交流活動）」の企業や社員への効果

所属企業・団体		「農都交流」による企業や社員への効果（Q5）
1	NPO法人	団体スポーツチームのチームビルディングに、農村生活が活かせるのではないか？
3	旅行会社	ご存知の通りですが、旅行会社は個人プレーが多いのですが、こういった事業はチームであたる必要があるので、チームビルディングが必要かと思います。また、私どもの地域は、特に少子高齢化、人口減少がマーケットの課題でもあるので。
7	教育研究	・チームとしての一体感 ・非日常体験によるリフレッシュ ・相手を思いやる気持ちとか？
8	IT会社	・人材育成（コミュニケーション、ヒアリング（聞く力）、気付きのチャンス、話す力など） ・生き方モチベーション向上 ・ビジネスチャンス（ネットワーク構築）
9	インフラ関連企業	ツーリズムではだめでインターンシップのようなある程度時間をかけた取り組みでないと効果はないと思う。
10	建設コンサルタント	非日常の生活体験から浮世のアカ落としができる。人の生きる根元的なパワーを与えることができる。自分自身を受け入れることができる。当たり前のことが、当たり前と思うようになる。
11	建設業	物事を考えるきっかけ。研修以外に何かないか。メンタルヘルス。
12	総合建設業	体を使って考える発想力を全社員に身につけさせたい。会社人間が退職後に地域社会にソフトランデンクできるために、いろいろなコミュニケーション力を学ぶ場、研修の場としたい。企業の社会貢献の1つとして、企業の持つ力と資源（リソース）を地域社会に結びつけ、事業にも結びつけることを検討中。

4．「農都交流」を進めるうえでの企業の課題

所属企業・団体		「農都交流」を進めるうえでの課題（Q6）
1	NPO法人	選手育成
3	旅行会社	ご存知の通りですが、旅行会社は個人プレーが多いのですが、こういった事業はチームであたる必要があるので、チームビルディングが必要かと思います。また、私どもの地域は、特に少子高齢化、人口減少がマーケットの課題でもあるので。
7	教育研究	・日程調整 ・フィールド調整 ・会社経費か個人負担か？など
8	IT会社	・活動費用 ・企業への効果（企業成長、社員育成への効果） ・活動地域、業種（農業or山林or漁業）
9	インフラ関連企業	効果が明確に見えない
10	建設コンサルタント	体験活動や交流活動を進めたらどうなるのか？地域の人口が増えたところがどれだけあるか？農家民宿の体験の話は素晴らしいと思うが、その時のおじいさん、おばあさんは10年後に生きているのか？その家の御子息は同じことを続けられるのか？飯豊町に移住しようと考えている人がどれだけいるのか？飯豊の10年後はどのようになっているのか？企業から見れば飯豊が無くなっても別な地域を探せばいい。しかし飯豊の人は飯豊から離れられない。なぜ飯豊に住んでいるかわかりますか？研修に来ている人も自分の“いなか”＝“ふるさと”といえる場所があると思います。そのふるさとはどのような状況ですか？東京に出て行ってしまって、ふるさとをないがしろにしているとは感じませんか？生まれた所で職につけることがどうしてできないのでしょうか。日本全体で人口が減っている。深刻な問題です。人間の誕生は最高の幸せであると思います。生まれた所から離れなければならないのは最大の不幸であると思いませんか？赤ちゃんが生まれた時、家族、まわりの人（地域の人）は一番喜んでいたと思います。お祝いとしてかなりのお金をもらえるところもあります。それだけ価値のあることなのです。しかし、そこを出る時、そのお金を戻すようなことは考えないのでしょうか？『農都交流プロジェクト』の本当の目的は、地域の人口が増える成果を実証することだと思います。
11	建設業	地域選定にあたっての根拠づくり、「何故その地域を選んだのか」
12	総合建設業	組織的に農都交流に参加する場合、「なぜ○○村か」「どうして△△町」を選んだのかという理由づくりが課題になる。企業としての取り組む理由やスタンスを明らかにしたい。交流活動を通して、何か可能性をさぐること。

２）地域（受入）関係者へのアンケート結果

1. 回答者の属性(54 名)

（1）所属機関

（人）

自治体職員	観光協会等観光関係機関	商工会JC等	農林漁業者	NPO・地域づくり関係団体	企　業	大　学	その他（第3セクター等）	不明（無回答）	合　計
14	6	1	3	21	1	1	4	3	54

（2）都道府県

（人）

山形	福島	栃木	茨城	群馬	千葉	神奈川	東京	新潟	長野	山梨	富山	静岡	滋賀	和歌山	島根	不明	合計
3	7	3	2	1	8	1	3	1	1	6	1	4	2	1	1	9	54

2.調査結果

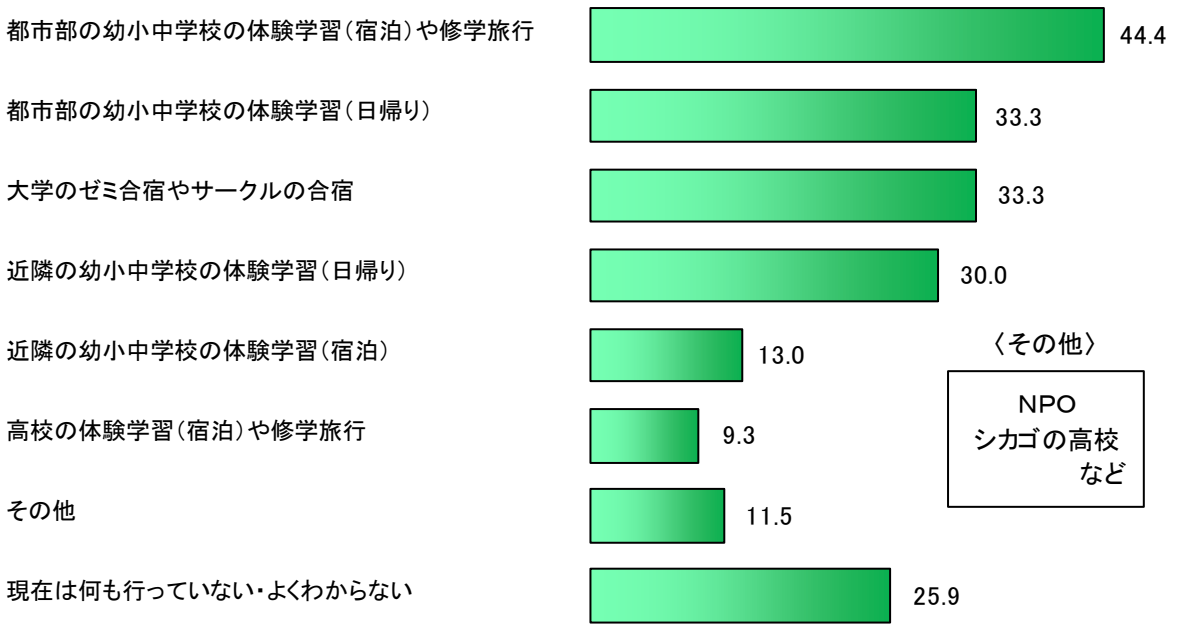
（1）セミナーの認知経路

（上段：人）
（下段：%）

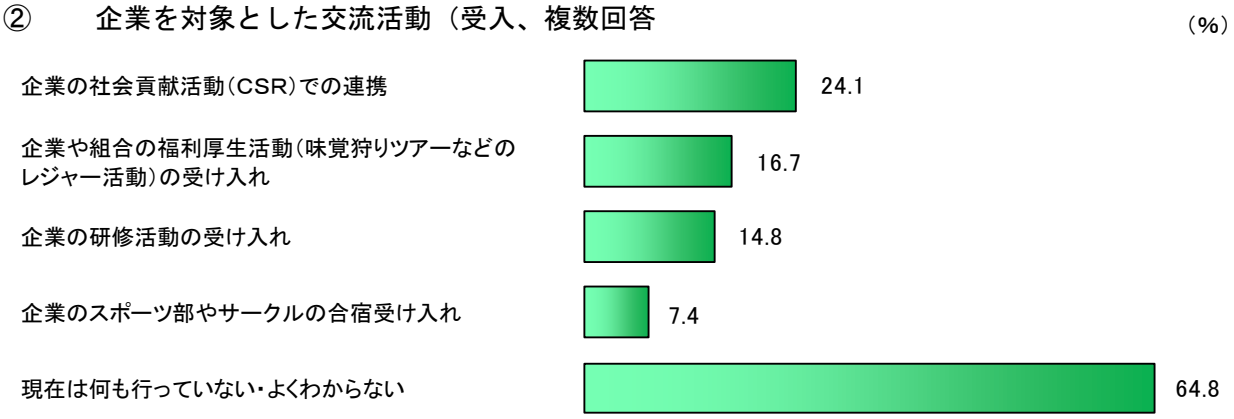
新聞雑誌	インターネットの記事やブログ	農水省のメールニュース	友人・知人	自治体職員	JTBの社員から	農政局から	不　明
1	6	6	4	10	9	15	3
1.9	11.1	11.1	7.4	18.5	16.7	27.8	5.6

（2）都市部の企業・学校・生活者との交流活動の状況

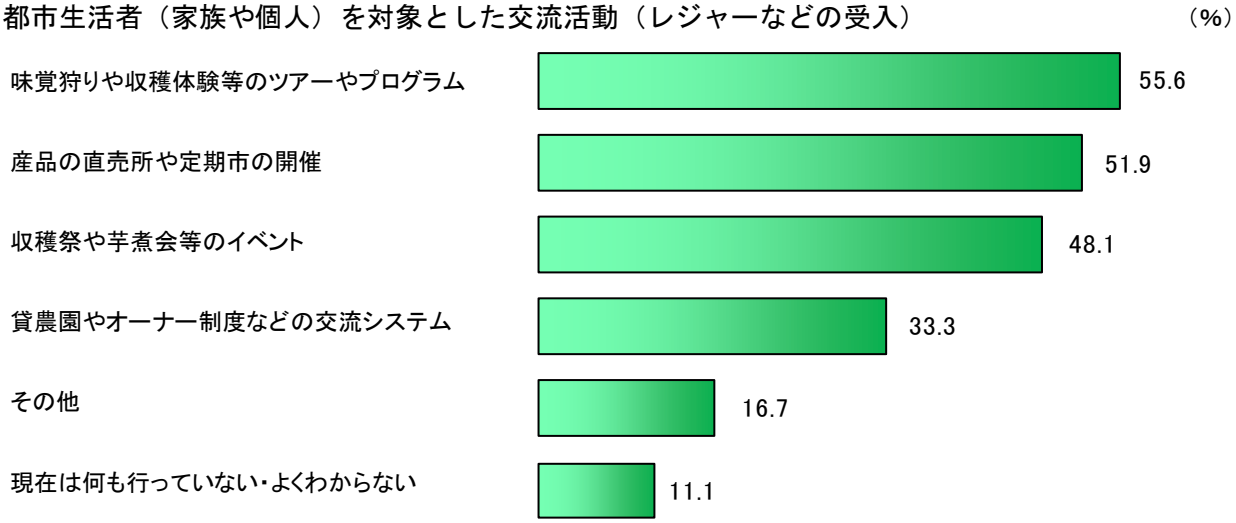
① 学校を対象とした交流活動（受入、複数回答）



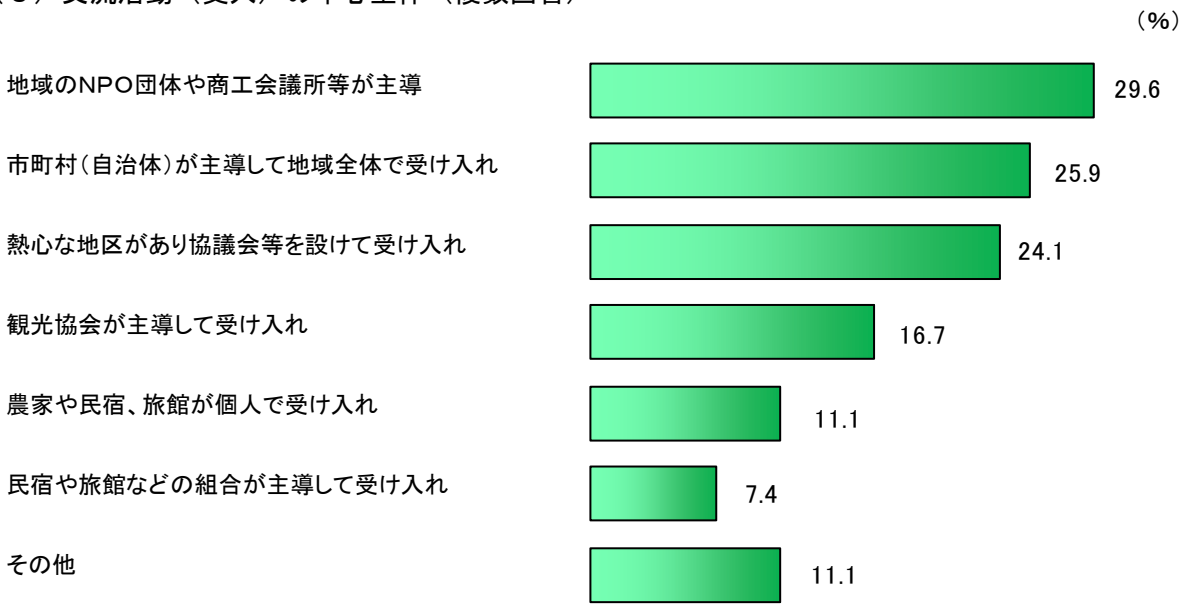
② 企業を対象とした交流活動（受入、複数回答



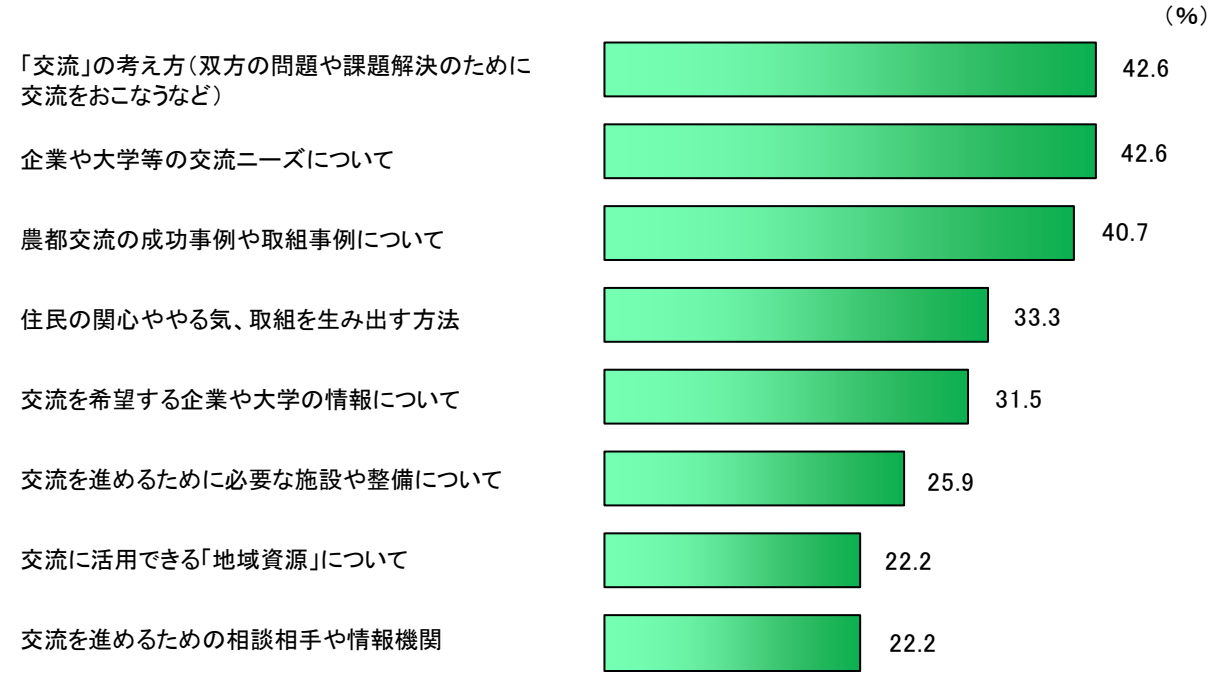
③ 都市生活者（家族や個人）を対象とした交流活動（レジャーなどの受入）



（３）交流活動（受入）の中心主体（複数回答）



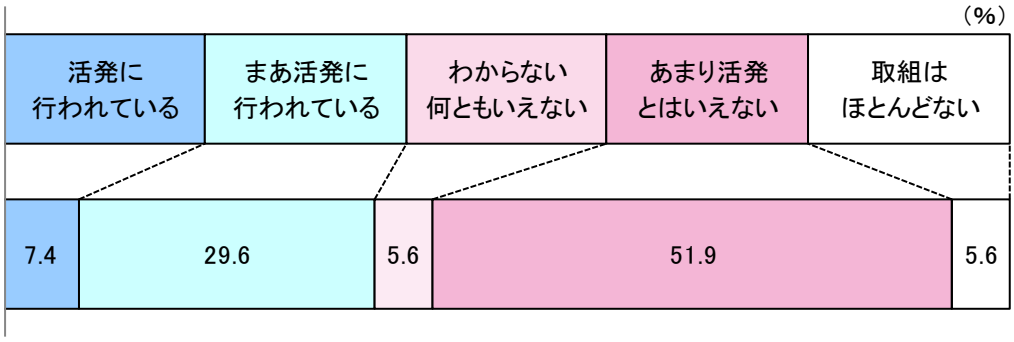
（4）セミナーで関心があったこと（複数回答）



〈最も関心があったこと（３人以上）〉

- 「交流」を希望する企業や大学の情報　６人
- 住民のやる気や取組を生み出す方法　５人
- 「農都交流」の考え方　５人
- 交流を深めるための相談相手や情報機関　３人

（5）交流活動（受入）についての現状への評価（複数回答）



（6）都市の企業や大学等交流活動を進める上での課題

【地域住民の取組意識や体制づくり】

・地域の合意形成。

・地域住民の関心度の向上。

・地域住民のやる気、本気度を引き出す。

・地域のリーダーづくり、組織づくり。

・核となる組織や人がいつも同じで体験メニューづくりに苦労している。

・都市農村交流の意義への理解醸成。

【受入施設（民宿等）の未整備】

・農家民宿に泊まらせたいが、軒数が十分ではなく、大人数の受け入れができない。

・農家民宿が少なく、宿泊を伴う受入が不可能（近隣の旅館や民宿との提携を検討）。

・農家民泊の不足や体験受入施設の規模が小さいこと。

・12 軒の農家民宿があるが点在しているため地域としての取り組みが難しい。

【企業等のニーズとのマッチング】

・企業の目的と地域の受入目的をいかにつなげることができるかが最大の課題。

・企業とのつながり）がない、取り組みたいが、どこに相談し、何をきっかけにすればよいか分からない。

・都市側と農村側のニーズの把握。・コーディネーターの育成。

・農業体験が企業研修となる場合、“チームワーク”以外に企業は利点があるのか疑問。

・受入体制は構築できてきたが、都市部企業・大学等へのアプローチの手法が確立していない。

【その他】

・地域の人材不足（育成が必要）や受入団体の人材・資金不足。

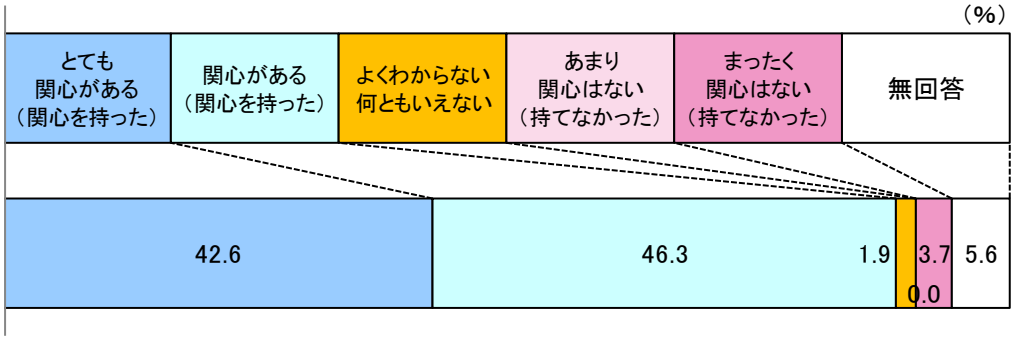
・地域資源の有機的連携のコーディネートが居ないこと。

・受け入れ体制を整えても、人がこない。収益があがらない。モチベーションがあがらない。マイナスサイクルになってしまっている。

・体験が遊び、レクレーションの範疇を出ない。

・行政関係、自治体、団体の足なみのふぞろい。

（7）「農都交流」（都市の大学・企業と農山漁村地域の交流）への関心



（8）「農都交流」を進める事での地域への効果

・一地域だけではなく、広域にまたがる交流の仕組みづくり（相乗効果を生み出すためのツールとして）。
・次の時代へ向けた生き方、働き方モデルの創出に対する地域の役割やできることの認識向上、地域内ネットワークの構築。
・感動の共有、当たり前の見える化（地域の魅力）や価値観の共有。
・都市部の人にとってはストレス解消等精神衛生上メリット、「食」に対する意識向上。
・農村では雇用の創出、環境・文化の維持意識、郷土の誇りの向上。
・地域の生活インフラ、農業インフラ（水路・農道等）の維持が地元民だけでは難しくなる中、定期的な交流・体験の中でこれらの問題が解決できないか？
・交流から地元特産品（米・野菜等）の安定的な販路へとつながらないか。
・日本の中山間地域が豊かさを共有できる様に、そして若者が残れる地域づくりになる事を期待する。
・地域の活性化、人が生き生きとした暮らしに変化。
・高齢化、人口減少対策（止めることは出来ないと思うが、遅くすることが期待される）。
・都市部の住民が人口減少している町を訪れる事で地域の活性化を図ることができる。また、地域の方にとって自分の暮らす農村にある資源を再発見するいいチャンスになると思う。
・農業者・農村の「誇り」を取り戻すことが一番の効果だと思う。
・地域に新しい人材が定着。通うことで周囲も活性化する。
・農村でのサービスが都市のシビアな目にふれることでブラッシュアップされる。
・地域への誇りが増すこと、関心が高くなること、定住者の増加。
・地域と都市とのアンバランスの解消。
・両地域の人の交流による豊かな生き方の見直し。
・地域の活力、元気をもたらせることが、地域にお金が落ちるとかの経済効果よりも重要だと思う。
・地域の人のまとまりができる。自分達のしていることに誇りを持てるようになる。元気に地区になっていく。
・地方の農山漁村地域が抱える課題は日本全国同じようなもの。地域活性化も農村どうしの競争のようになっているが、そうではなく、市民運動のようになってほしい。
・経済雇用の活性化、人口増加（若年層）、・自然保護の意識向上

（関連資料）第１回セミナー案内書

農林水産省　平成25年度都市農村共生・対流総合対策（広域ネットワーク推進対策）事業

農山漁村地域と都市型企業双方の課題を解決する新しい交流・連携のスタイル

農都交流プロジェクト2013
全国セミナー開催のご案内

【農都交流プロジェクトとは】

都市と農山漁村の交流は、都市と農山漁村それぞれに住む人々がお互いの地域の魅力を分かち合い、理解を深めるために必要な取組であり、農林水産省の施策として進められています。

「農都交流プロジェクト」は、都市型企業・組織が、農山漁村地域で研修を実施することを契機として、農山漁村地域と都市型企業・組織双方が抱える様々な課題を解決する、都市と農村漁村の交流の新しいスタイルです。

本プロジェクトの効果や意義、都市型企業・組織のニーズなどは、昨年度山形県飯豊町で実証されており、大きな効果をあげています。

ぜひ、本セミナーにご参加いただき、「農都交流プロジェクト」の概要や意義をご体感ください。

2013年8月30日（金）　午後2時開始（午後1時30分開場／午後5時終了予定）

会場：大手町サンケイプラザ　3階会議室　303・304号室

○冒頭アピール：「農村政策としての都市農村交流について」　・・・農林水産省農村振興局都市農村交流課長　大澤祐一氏

○基調講演：「企業の課題と地域の価値ーこれからの社会における農山村の可能性ー」　・・・
東京農大「農山村支援センター」副代表、NPO法人共存の森ネットワーク理事長　澁澤寿一氏

○プロジェクト概要紹介：「農山村地域・都市型企業双方がWINWINとなる農都交流プロジェクト」・・・
JTBコーポレートセールスチーフマネージャー、山形県飯豊町ニューツーリズムアドバイザー　石川智康氏

○事例紹介：「山形県飯豊町で取り組んでいる『農都交流プロジェクト』プロジェクト
ー 都市企業・大学との交流で、地域はどう変わりつつあるか？ー　山形県飯豊町　商工観光課長　小松一芳氏

○パネルディスカッション
「企業担当者から見た農山漁村地域での企業活動」　・・・　(株)アイ・ラーニング　代表取締役社長　片岡　久氏
(株)JTBコーポレートセールス取締役マーケティング部長　大塚雅樹氏

□本セミナー参加の対象の方は・・・

①「農都交流プロジェクト」に取り組みたいとお考えの農山漁村地域の皆様（自治体、各種団体、農林漁業従事者、観光関係者など）

②農山漁村地域との交流を通じた組織（企業・団体、大学など）の課題解決に関心のある都市型企業・組織、大学生の皆様

□参加費：無料　　**□定員：100名様**（ただし、先着順の受付とさせていただきます）

□参加申し込み方法

参加ご希望の場合は、以下のURL内の「申し込みフォーム」にて、お申し込みください
（複数名でご参加の場合は、お手数でもお一人ずつ参加申し込みをお願いします）

http://www.jtbbwt.com/noto/

※受講票等の発行はいたしません。当日は直接会場受付にお越しください（満席の場合は、別途ご連絡いたします）

□主催：　農都交流プロジェクト2013推進チーム
□企画・運営：(株)JTBコーポレートセールス
□協力：　山形県飯豊町　ほか

◎お問い合わせ：　農都交流プロジェクト推進事務局（JTBコーポレートセールス営業推進本部内）
TEL　(03)5909-8439　　メール　noto@bwt.jtb.jp

担当：堀内、中村、石川

山形県・飯豊町で実施した農都交流実証活動（2012年度）「地元の声」「都市企業関係者・大学生の声」

地元関係者の声

○「企業人」を地元に迎えることに最初は不安もあったが、実際には皆さん大人で目的意識もしっかりしていたので、プログラム運営など問題はなかった
○都会の人たちといろいろな意見を交換できて、楽しかった
○夏の農作業や真冬のイベント運営など手伝ってもらい、助かった
○若い人たちと一緒に作業すると、こちらまで元気が出てくる。ぜひ、また来てほしい
○企業研修で来た人が、その後プライベートで繰り返し来てくれています

実証プログラム（モニターツアー等）に参加した企業関係者（人材育成、CSRなどの担当者）や大学生の声

○農山漁村地域では、都会では効果を上げるのがむずかしいコミュニケーション能力向上や組織力強化・チームビルディングなどの人材育成プログラム実施が有効だ
○里山に暮らす人々との交流から、「生きる力」「考える力」「行動する力」などを体得することができる
○農山漁村地域の抱える課題（過疎・高齢化、限界集落化など）解決に、都市の企業が自社の活動を通じて力を貸すことは大切だと思った
○4メートルの雪の中で元気に暮らしている飯豊の人たちのパワーはすごい！

■農都交流プロジェクト2013：今後の予定

○農都交流ワークショップ・事例研究会・・・・10月23日～25日（於：山形県飯豊町）
○まちづくり・むらづくりに関心のある大学生のためのセミナー(11月予定：東京)
○研修会（プログラム検討会）・・・・2014年2月（東京）
○「冬の里山暮らし楽校」(大学生対象)・・・・2014年2月下旬（於：山形県飯豊町） ※飯豊町との共催

■農都交流のプログラムの実施・導入に向けた支援体制

①農都交流のプログラムを実施し、都市との交流を創造したいと考えている地域に対して・・・・
→都市型企業等との交流を創出するための、地元での意識醸成や地域資源再評価、プログラムづくりなどをお手伝いします
②農山村地域で、自社（組織）の活動（人材育成、CSRなど）展開を検討している企業のみなさん・・・・
→貴社の課題やニーズに合致したプログラムを展開できる地域とのマッチングをお手伝いします

☆問合せ先・・・・農都交流プロジェクト推進事務局（JTBコーポレートセールス営業推進本部内）
TEL (03)5909-8439　　メール　noto@bwt.jtb.jp

□8月30日(金)全国セミナー研修会会場アクセス　会場：「大手町サンケイプラザ」
・東京メトロ（丸ノ内線、半蔵門線、千代田線、東西線）・都営三田線　大手町駅下車　A4・E1出口直結
http://www.s-plaza.com/access/index.html

（２）第２回セミナー

①開催概要

（実施概要）

平成２６年３月６日（木）14：00～15：00

大手町サンケイプラザ　３階会議室

（参加者数）

１１０人

（プログラム）

◆第１部	
開会挨拶	農村政策としての都市農村交流について
基調講演	これからの日本における企業と農山漁村地域の関係づくり
プロジェクト活動紹介	活動報告とこれからの展開について
◆第２部	
今年度農都交流実践地域の活動紹介とプログラムのＰＲ	①山形県飯豊町　②福島県昭和村 ③山形県川西町　④千葉県館山市
パネルディスカッション	成熟期を迎えた日本における『農都交流』の意義と効果

②セミナー発言要旨

【第１部】

１）開会挨拶（冒頭アピール）

「農村政策としての都市農村交流について」

志田　麻由子氏（農林水産省農村振興局 都市農村交流課課長補佐）

農林水産省では、平成４年頃から都市と農山漁村の交流に取り組んできた。最初はグリーン・ツーリズムということだったが、平成 20 年から「子ども農山漁村交流プロジェクト」をスタートさせた。これは、小学生を対象に農山漁村での交流や体験を促すというもので、これまでにたくさんの子どもたちの農山漁村体験を実現してきた。

こうした取り組みは現在でも続いているが、最近では企業の研修などで農山漁村との連携や交流ができないかと考え、都市部の企業や大学との交流に取り組んでいる。

子どもたちや企業・大学等との交流活動を通じて、双方が元気になる、活性化することがねらいだが、交流にはいろいろな形があり、相手も多様だと考えている。例えば、近頃観光庁と農水省の間で「農観連携」を進めようと協定を結んだところだ。また、福祉分野との交流ということで「福祉農園」の取り組みも進み始めている。

このように全国の農山漁村が、いろいろな方々と結びついて活性化していくために、様々な交流を模索している。都市の企業・大学と農山漁村の良き交流の実現のために、ぜひみなさんとご一緒に推進していきたい。

２）基調講演

「これからの日本における企業と農山漁村地域の関係づくり」

澁澤　寿一氏（東京農業大学農山村支援センター・副代表、NPO 法人共存の森ネットワーク理事長）

私自身、農都交流のモニターツアーでお話をさせていただいたり、ツアーに参加した企業の方々（経営者や総務担当者など）とお話させていただく機会を得たが、印象的なのは農都交流に対する企業の意識だ。例えば、企業にとって農山漁村で過ごしたり交流することは良いことか、あるいは自分たちの課題解決につながるかという問いかけに対しては、「いいことだ」「役に立つ」という声が圧倒的に多い。

ところが、「交流は農山漁村の課題解決につながるか」という問いかけには、まあつながるだろうと答えるが、「企業は交流を通じて農山漁村の課題解決に取り組むべきだ」という問いかけになると意見は２分する。一方は「農山漁村の課題は都市部の企業とは関係ない。自ら解決すべきだ」とする意見であり、他方「都市の企業はこれまで農山漁村から労働力を奪い、自然や食などを一方的に頼ってきた。そのお返しの意味でも協力すべきだ」とする意見もある。後者の考え方が現在のＣＳＲ活動につながっているのだが、どちらが正しいとはいえないかもしれない。

企業が農山漁村との交流で最も期待しているのは、実は「コミュニケーション力の向上」だという話がある。対外的なそれはもちろんだが、仕事をする上では社内との人間関係や意思疎通が重要であることは間違いのないところだ。農山漁村とは人間関係を保ちながら意思疎通がうまくいかないと生きてはいけない。また生きるためには、周辺の人々と協調し、協働しなければならない。自ずとコミュニケーション力を高めなければいけない。

1960 年前後の高度経済成長によって、日本は別な国、別な社会に変わった。経済成長を経て日本は経済（お金）と物質文明中心の社会になった。農山漁村から都市への人口移動が進行。食べ物は育てるものではなく買うものになり、電化製品や自動車のある暮らしが「豊かさ」とされた。

日本社会には「不安」が広がっている。高校生たちに聞くと、リーマンショックや年金問題などを目の当たりにして、都市でサラリーマンとして働き、将来は年金で暮らすという高度経済成長以降の「人生モデル」「社会モデル」への不安を感じ、自分たちが何を目標に生きていけばよいかわからないという。こうした将来への不安は若い世代だけでなく各世代に広がっている。

今必要なのは「経済的豊かさ」だけではない。自然や地球、他者とともに生きるという「新しい生き方」だ。バーチャルではないリアルな社会の生き方だ。日本の農山漁村には、まだそのリアルな生き方、現代から見れば「新しい生き方」が残っている。

農山漁村はよく「日本の原風景」と呼ばれる。原風景とはその風景の中に生きるために必要なすべてのもの（衣食住）があるということだ。米や野菜、魚や家畜があり、稲や茅、綿や蚕がある。里山からは木材や薪がとれる。つまり農山漁村は一つの完結した世界となり得る空間なのだ。

日本の農山漁村には「稼ぎ」と「仕事」がある。「稼ぎ」とは日々暮らすために必要なものを得るために働くこと。「仕事」とは今ではなく、次の世代やその次の世代のために働くことだ。それは「祭り」であり「結」や「山仕事」である。農山漁村ではその両方ができて一人前とされる。

現代社会は「稼ぎ」ばかりで「仕事」を考えることが少ない。それでいいのか、次世代のことを考え行動することが企業にも問われている。農山漁村と交流することは、その問いかけに対する答えに至る道だといえるだろう。

３）プロジェクト活動紹介

「農都交流プロジェクト　活動報告とこれからの展開について」

石川　智康氏

（農都交流ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾘｰﾀﾞｰ、(株)JTB ｺｰﾎﾟﾚｰﾄｾｰﾙｽﾁｰﾌﾏﾈｰｼﾞｬｰ、山形県飯豊町ﾆｭｰﾂｰﾘｽﾞﾑｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）

この一年間、都市の企業・大学と農山漁村の交流をテーマに様々な活動を進めてきた。最初は 2013 年の８月で、この会場で第１回の全国セミナーを開催し、「農都交流」という考え方をご紹介した。先駆的に取り組んでいる山形県飯豊町の事例を紹介しながら、飯豊町の考え方や受入体制等を町の担当者から語ってもらった。また飯豊町でのモニターツアーに参加した企業の方からは、農山漁村での研修活動や交流活動の魅力や可能性について語ってもらい、「双方が『ウィンーウィンの関係』で問題解決につながる交流をめざす」という、農都交流の考え方を確認した。

その後、セミナー参加者を中心に呼びかけて、10 月に飯豊町で農都交流ワークショップ（研修会）を開催。飯豊町のプログラムを実際に体験しつつ、企業にとっての意義や受け入れ地域のあり方等をテーマに意見交換とブレーンストーミングを行った。

11 月には初めての試みとして、在日外国人（ブラジル人、ギリシャ人等）を対象に、農山漁村での交流ツアーを実施した。テーマは「国際化」で、在日外国人や訪日外国人旅行者の農山漁村への誘客や交流の可能性を探るもので、都市の企業や生活者向け（日本人向け）のプログラムで、十分に外国人を受け入れられることが確認できた。

また 11 月下旬からは、福島県昭和村、山形県川西町、そして１月に千葉県館山市でモニターツアーを実施。７月からの取り組みで開発した交流・体験プログラムをモニターツアーで検証したもので、参加者の満足度や評価は良好だった。

こうした取り組みと並行して、都市との交流活動に取り組んでいる農山漁村や都市部の企業等を対象に、農都交流の状況や交流意識等をテーマにアンケート調査を実施した。

調査結果では、現在の交流活動は学校教育との連携によるものや、家族やグループを対象としたレジャー型の取り組みが多く、企業等と定期的・継続的に交流している事例は多くないことが判明した。しかし、ＣＳＲ活動などで農山漁村を訪問する企業は増加傾向にあり、また農山漁村も企業も、お互いが定期的・継続的に交流することは双方の問題解決につながり、交流を推進すべきとうい考え方で一致していた。

しかし、農都交流の意義や有効性は理解しているものの、農山漁村では受け入れ体制づくりやプログラムへの不安が、都市部の企業ではコストや効果等を課題としており、推進するための課題が明らかになってきた。また共通する課題として、交流相手に関する情報の不足や相談相手の不在があげられており、今後の推進方策へのヒントが得られた。

こうした 2013 年度の取り組みをふまえて、さらに農山漁村と都市の企業等との交流を推進していく必要があると考える。

【第２部】

４）今年度農都交流実践地域の活動紹介とプログラムのＰＲ

①山形県飯豊町　本間　真紀氏（飯豊町商工観光課）

②福島県昭和村　飯田　大輔氏（NPO法人苧麻倶楽部）

③山形県川西町　原田　俊二氏（川西町町長）

④千葉県館山市　神保　佳代子氏（また旅倶楽部）

各地域ともに 2013 年度に行ったワークショップやモニターツアーの行程及びプログラムを紹介した。その内容は各モニターツアー及びワークショップの項で紹介したものと同じのため、ここでは省略する。

５）パネルディスカッション

「成熟期を迎えた日本における『農都交流』の意義と効果」

（パネリスト）

癸生川　心氏　（(株)インソース　営業部・教務部マネージャー）

高辻　光乃氏　（(株)JTB コーポレートセールス　教育旅行第 2 事業部）

本間　真紀氏　（山形県飯豊町商工観光課）

澁澤　寿一氏　（NPO 法人共存の森ネットワーク理事長）

（コーディネーター）

石川　智康氏　（農都交流プロジェクトリーダー）

癸生川

インソースは企業や観光庁に研修の企画や運営を提案する人材育成会社だ。私自身、飯豊町のツアーに参加して農業体験や交流会を楽しませてもらった。とても良い体験だったが、この経験を研修プログラムとして商品化することを考えた時に、立ち止まらざるを得なかった。

農業体験や地域の人たちとの交流が、企業によってどのような効果をもたらすのかを上司や会社に説明し、納得してもらわないと実現はしない。農山漁村の様々な資源と企業の研修をどう融合させるか。いろいろ考えているところだ。コストの問題（適正であることを納得してもらう）こととあわせて、この理論化や説明できる資料づくりが、企業研修を農山漁村で展開・実現していくための課題だと考えている。

高辻

飯豊町で新人社員研修を経験して感じたのは次のような点だった。

①「便利＝幸せ」なのかということを、コンビニもなく夜は真っ暗な中で改めて考えさせられた。

②農家民宿のもてなしが、客ではなく家族と接するようだった。こんな関係もあるのかと感じた。

③過疎化する地域がくやしくて、何とかしようと農家民宿を始めたという話に感激した。

飯豊町は日本だが、私にとっては異文化体験だった。そのせいか視野が広がった感じがしている。

本間

農業に従事している人は、農業指導を行うために改めて作業について考える機会となっている。また人に教えることで、農業に誇りをもてるという声も聞こえてくる。まちづくり活動に取り組んでいる町民は、ツアーを契機にフェイスブック等でやりとりを始めるなど、ネットワークが広がるという効果が生まれている。都市との交流は確かに飯豊を元気にしている。

澁澤

農都交流の究極的な目的とは、地域も都市の訪問者も「誇り」や「自分」を取り戻すことだと思う。

企業人は、農山漁村の体験を通じて自分の命がどこに結びついているのかを考えたり、自分が自分であることや本当に楽しいこととは何なのか、さらには先ほど述べた「稼ぎ」と「仕事」について考える場としてほしい。

農山漁村は都市の人たちとの交流を通じて新しい価値観や情報に出会うとともに、改めて自分たちの暮らしや地域の歴史・文化を見直し、誇りを再確認するきっかけにしてほしい。

③第２回セミナー参加者へのアンケート調査結果

１）企業・大学等関係者へのアンケート結果

◆回答者の属性（業種等、１９人）

業種･分野等	参加人数	所属部署等
サービス業（IT、観光等）	５人	・人材育成　・人材開発　・総務
公務員（国、自治体）	４人	・観光　・開発　・政策立案
コンサルティング会社	３人	・研究員　・営業
大学・高校	２人	
ＮＰＯ団体	２人	・地域づくり
建設・製造業	２人	・営業
不明（無回答）	１人	・ＣＳＲ部
合　計	１９人	

Ｑ１.セミナーの認知経路

・ＪＴＢ社員からの案内　８人
・友人・知人・同僚から　３人
・自治体などの職員から　２人
・農政局から　２人
・新聞・雑誌記事　１人
・インターネットの記事やブログ　１人
・農水省のメールニュース　１人
・その他　１人

Ｑ２.セミナーの参加理由（複数回答）

順位	参加理由	回答数（人）
1	研修活動の場として農山漁村に関心がある	8
	農山漁村の体験・交流を活用したビジネスの可能性	8
3	社会貢献活動の場として農山漁村に関心がある	6
4	「農都交流」という言葉に関心を持った	4
5	福利厚生の場として農山漁村に関心がある	3
6	顧客へのサービスへの利用の可能性	2
	商品開発・研究の場として農山漁村に関心がある	2

※その他　１人　「賑わい創出とまちづくり」

Ｑ３.参考になったプログラム、印象に残ったプログラム（複数回答）

順位	プログラム	回答数（人）
1	基調講演	１５
2	実証地域プレゼンテ―ション（報告）	7
3	パネルディスカッション	5
4	冒頭アピール	2
5	プロジェクト状況報告	I
	質疑応答	I

ＳＱ-１　参考や印象になった点

・澁澤先生のお話、本当に学ぶことが多かった。新しい社会づくりのヒントとして、是非、本校の教職員に講演して頂きたい。
・自分たちのやってきた取り組みと合致した。
・企業が抱える社内コミュニケーション不全に起因する種々の問題を改めて考えさせられた。
・今後、どう企業にすすめるかが少しわかった。
・実際に田舎の方が“誇り”について話してくださり、とても感動した。それを手伝える手伝いをしていきたいと感じた。
・パネルディスカッションの中で、日本人の中で、異文化体験ができた、との感想。
・受入プログラムの具体的な内容。
・CSRとしての取組、人の原点としての位置づけを認識する。
・澁澤先生の講演からの参考となるキーワード。世代へつながる町づくり。世代間のコミュニケーション作り。仕事依存からの脱出。資源の参考事例。
・澁澤先生の講演の内容に深く考えさせられた。
・澁澤先生のご講演が大変心に残った。貴重なお話を伺うことが出来た。
・聴き手の率直の感想について。パネラーの方から多方面からの意見を伺えたので。
・プレゼンを開いて是非体験したいと思い、当職場でも何らかの形で研修に活用できないか検討したい。

Ｑ４.農山漁村との現在の交流状況（複数回答）

順位	プログラム	回答数（人）
1	組合の福利厚生活動	4
2	社員旅行やお客様招待ツアー	3
3	会社の福利厚生活動（味覚狩りツアー、レジャー）	2
4	新入社員の研修活動	1
	管理職昇任時などにおける研修活動	I
―	その他　　（修学旅行等）	2

行っているものはない　　８人

Ｑ５　企業研修等における農山漁村との交流活動の取り入れ意向

・ぜひ取り入れてみたい　５人
・機会や適当な地域があれば取り入れてみたい　２人
・わからない・何とも言えない　４人
（無回答　８人）

ＳＱ１．（取り入れたいと答えた７人に）取り入れたい活動（複数回答）

・社会貢献活動（ＣＳＲ）　４人
・会社の福利厚生活動（味覚狩りツアーなどのレジャー）　３人
・組合の福利厚生活動　３人
・部門や部署ごとの研修活動　３人
・社員旅行やお客様招待ツアー　２人
・スポーツ部やサークルの合宿　１人
・新入社員の研修活動　１人
・商品開発や商品企画のための合宿　１人
・その他　２人　（継続的な教育活動、社旗貢献としての社員活動）

Ｑ６．農都交流の効果

・新たな発想やアイデア。
・農山漁村への理解促進。コミュニケーション能力向上、人脈づくり。
・物質中心社会からの価値転換→社会変革へ。
・新入社員の意識改革。
・政策の企画立案、能力の向上。
・机上ではなく、実際に体験する重要さに気づく事を期待する。
・企業の生産性向上やモチベーションUPなど。
・異なる世代間でのコミュニケーション力向上。
・社員のリフレッシュ、視野が拡がる。
・農村の実態を自ら体験する機会を得ることにより、企業の今後の新たな可能性を考えるきっかけができる。
・社員のモチベーションの向上、Face to Face のコミュニケーション、コミュニケーションをはかろうとする姿勢。
・①.生活の根幹に触れることで、生きる事について考える。 ②多様な職業に触れることで生き方について視野を広げる。 ③現地との協同で6次産業とは何かを具体的に考えさせる。 ④.特色ある教育サービスを確立し、広告・宣伝を期待する。

Ｑ７. 農都交流を進めるうえでの問題点や課題

・コスト、研修の意義。
・①コスト全般（活動費、交通費、手当など）、②研修として位置づけした際のアウトプット方法。
・私達の研修に比べてコストをどのように成果につなげるかの一点にかかると思う。
・決定権者の意識、費用対効果を求められる、ここをどう「見える」かたちで説明するか？
・コスト、必要である理由（必要性）。
・農都交流プログラムの啓蒙方法を考えたい。
・交流疲れが出てこない受け入れ体制。
・1.交通手段、2.コスト。

Ｑ８. 農都交流に関して今後欲しい情報（複数回答）

順位	プログラム	回答数（人）
1	研修や活動に利用できる「地域資源」について	9
2	農都交流の成功事例や取組事例	8
3	「農都交流」の考え方や意義	6
	農山漁村での研修や活動のモデルプログラム	6
	住民の受入意識や協力意識	6
6	交流を希望する地域の情報（立地や施設等）	5
7	農山漁村との交流を進めるための相談相手や情報機関	4
－	その他　（住民の声や意識、定量的な効果データ）	2

２）地域（受入）関係者へのアンケート結果

１. 回答者の属性(15 名)

（1）　所属機関

（人）

自治体職員	観光協会等 観光関係機関	農林漁業者	NPO・ 地域づくり 関係団体	企　業	不明 （無回答）	合　計
9	1	1	2	1	1	15

（2）　都道府県

（人）

山　形	福　島	千　葉	島　根	沖　縄	不　明	合　計
6	3	2	1	2	1	15

2.調査結果

（1）セミナーの認知経路

（上段：人）
（下段：%）

自治体職員	JTBの社員から	そ　の　他	不　明
5	7	2	1
33.3	46.7	13.3	6.7

（２）セミナーで参考になった内容、印象に残った内容（複数回答）

順位	参考になった・印象に残った内容	人
1	基調講演	10
2	農都交流プロジェクト実証地域プレゼンテーション	7
3	.パネルディスカッション	5
4	プロジェクト状況報告	3
5	冒頭アピール	1
	質疑応答	1

SQ1. 参考になった点・印象に残った点

・実際に体験した人たちの感じた意見は貴重。参考になった。
・人から求められている取組、農山漁村の重要性、時代の変化、地域活性のヒント等参考になった。
・改めて農都交流の効果を知り、今後の事業に取り込みたいと考えられるようになった。
・澁澤氏の企業の立場からの幅広い講演内容。今だけでなく、次世代との関係性の大切さなど。
・農都交流プロジェクトの目的と課題
・企業人が農村社会にむいてきているとの報告
・おもてなしの民家での交流
・取組全体の体形的な解説、わかりやすかった。
・本市で実施するうえでの参考となります。具体的なプログラム内容。
・実際に受け入れている地域の取り組みが参考になった。
・受入れ側のステークホルダーや体験プログラムが参考になりました。

（3）グリーン・ツーリズム等都市部の学校や企業・大学等との交流状況（行っている取組、複数回答）

順位	交　流　状　況	人
1	幼小中学校の体験学習（日帰り）	9
	幼小中学校の体験学習（宿泊）	9
3	味覚狩りや収穫体験等のツアーやプログラム	8
4	産品の直売所や定期市、イベントの開催	6
5	高校の体験学習や修学旅行	5
	企業の社会貢献活動（ＣＳＲ）での連携	5
	貸農園やオーナー制度などの交流システム	5
8	大学のゼミ合宿やサークルの合宿	4
9	企業の研修活動	2
	その他	2
11	企業のスポーツ部やサークルの合宿	1

（4）セミナーで関心があったこと（複数回答）

順位	受入の中心主体	人
1	市町村（自治体）が主導して地域全体で受け入れ	7
2	地域のＮＰＯ団体や商工会議所等が主導	5
3	熱心な地区があり協議会等を設けて受け入れ	3
	その他	3
5	観光協会が主導して受け入れ	2
6	農家や民宿、旅館が個人で受け入れ	1

（５）都市の企業や大学等交流活動を進める上での課題

【宿泊施設など受入体制】

・推進体制の整備。農家民泊の拡大。

・宿泊施設不足。組織的の対応

・宿泊先の確保

・宿・プログラムなど受入体制の整備。住民の意識。

【受け入れのためのノウハウや人材不足】

・受け入れのノウハウをどう学んだらいいかわからない。

・受入に関するノウハウを持っている人材がいない。

・受入に関するマンパワーが足りない。

・各自治体（特に離島）は活性化を強く望んでいるが他力本願で積極的な取組ができない。一番の原因は、そのノウハウがわからない。又、ステークホルダーを認識できていないからである。

【その他】

・地元側で交流についてのメリット・意義を明確にイメージ出来ない。

・当事者の問題意識が低いように感じる。腰が重いというか積極的に何かに取り組む余裕がない。また、都市部と地域をつなぐものがない。

（６）都市の企業や大学等交流活動を進めることへの気体

・お年寄りの生きがいづくり、元気をとりもどす。自分たちの地域の良さの再確認なくしてはいけない気持ち。郷土愛を育み、それが子供たちの定着化へ。

・日本人としてアイデンティティの確認。地域の活力になる情報教育。地域経済の活性化。

・地域活性化。

・活気が生まれ、元気な町をつくる。若い世代の農業の伝承。

・農業にたずさわる人たちに元気がない。都市部の方が入ることにより、地域の資源が再発見され、地域の人が自信を持って農業に取り組めるようになればいいと考える。

・地域の若返り。やる気の創出。

・移住・定住のきっかけ（交流人口が増えることで移住のきっかけが増える。地域に活力、雇用の場が生まれることで人口流出の抑制につながる）。

・CSR活動の推進により、経済的メリットが生まれること（農産物の流通など）。

・人手不足の解消につながる面もある（除雪ボランティアなど）。

・地域の人々、関係団体、自治体に自覚が芽生え、受入の強化につながり持続的な事業になり、1つの基幹産業としてのプロセスを歩んでいける。

（7）今後の「農都交流」の取組志向

- ぜひ活発に進めたい　６人
- できる限り進めたい　３人
- 無回答　４人

（8）「農都交流」に関して今後欲しい情報

順位	今後欲しい情報	人
1	企業や大学等の交流ニーズについて	8
2	交流を希望する企業や大学の情報について	7
3	交流に活用できる「地域資源」について	6
	住民の関心ややる気、取組を生み出す方法	6
5	交流を進めるために必要な施設や整備について	5
6	農都交流の成功事例や取組事例について	4
7	「農都交流」の考え方（双方の問題や課題解決のために交流をおこなうなど）や意義	3
8	交流を進めるための相談相手や情報機関	2

（関連資料）第２回セミナー案内書

農林水産省　平成25年度都市農村共生・対流総合対策（広域ネットワーク推進対策）事業

農山漁村地域と都市型企業双方の課題を解決する新しい交流・連携のスタイル

農都交流プロジェクト

第2回全国セミナー開催のご案内

【農都交流プロジェクトとは】

都市型の企業・組織が、農山漁村地域で何らかの活動（人財育成やCSR活動など）を行うことを契機として、農山漁村地域と都市型企業・組織双方が抱える様々な課題を解決し、ウィンウィンの関係をつくることを目指した「農都交流プロジェクト」。2013年度には、山形県飯豊町をはじめとした4つの地域で、プログラムの実証と、実際の企業活動がスタートしました。

各地でのプログラムに参加された企業や大学生の皆様からは、農山漁村地域での活動からは都会にはない、さまざまな効果やメリットを得ることができるというご意見をいただきました。

一方、プログラム実施地域の関係者からは、「これまでとは違った都市生活者との交流は、地域のにぎわいや人々の自信・誇りややる気・がんばる力の再生につながる。交流人口拡大や新しい観光・ツーリズムの手法でもある」という声が多数あがりました。

これら農都双方の「声」を受け、プロジェクトでは2014年に具体的な企業などの農山漁村での活動が本格稼働するよう、プログラム策定や農都間のマッチングに注力していく方針です。

ぜひ、本セミナーにご参加いただき、「農都交流プロジェクト」の取り組みをご検討ください。

2014年3月6日（木）　午後2時開始（午後1時30分開場／午後5時終了予定）

会場：東京・大手町サンケイプラザ　2階201号室

大手町サンケイプラザ

セミナーのプログラム

○冒頭アピール：農林水産省農村振興局都市農村交流課

○基調講演：　「これからの日本における企業と農山漁村地域の関係づくり」
東京農大「農山村支援センター」副代表、NPO法人共存の森ネットワーク理事長　澁澤寿一氏

○プロジェクト活動紹介：
「2013年農都交流プログラムと、農山漁村地域×都市型企業連携の可能性について」
農都交流プロジェクト・リーダー、JTBコーポレートセールスチーフマネージャー　石川智康氏

○2013年度農都交流プロジェクト実践地域や各地でのプログラム紹介と、都市の企業・組織、大学生などのみなさんへのアピール：
＜発表地域（順不同）＞（予定）
①山形県飯豊町　②福島県昭和村　③山形県川西町　④千葉県館山市

○パネルディスカッション：「成熟期を迎えた日本における『農都交流』の意義と効果」
パネラー（予定）・「農都交流プログラム」を実体験した企業関係者・・(株)インソース（研修会社）、(株)JTBコーポレートセールス（飯豊で実施した新入社員研修の研修生）、「冬の里山暮らし楽校」に参加した大学生
・農都交流プロジェクト実践地域の方　・澁澤寿一氏、石川智康氏

○農都交流プロジェクト推進地域と都市型企業・組織等との情報交換コーナー

□本セミナー参加の対象の方は・・・

①農山漁村地域の皆様：「農都交流プロジェクト」に取り組み、都市型企業等との連携で地域の元気づくりを目指す地域の方（自治体、各種団体、農林漁業従事者、観光関係者　など）

②都市の企業・組織、大学生の皆様：農山漁村地域との交流・連携（農都交流のプログラム）を活用し、自組織の抱える課題（例：人財育成、組織力向上、CSR活動、福利厚生）の解決・良化をはかることに関心をお持ちの方

□参加費：無料

□参加申し込み方法

参加ご希望の場合は、以下のURL内の「申し込みフォーム」にて、お申し込みください　※申し込み締め切り：2月28日(金)
（複数名でご参加の場合は、お手数でもお一人ずつ参加申し込みをお願いします）

http://mng.jtbbwt.com/form/31305-1087/

※受講票等の発行はいたしません。当日は直接会場受付にお越しください（満席の場合は、別途ご連絡いたします）
※先着順での受付とさせていただきます（定員になり次第締め切りとさせていただきますのでご了承ください）

□主催：　農都交流プロジェクト2013推進チーム　□企画・運営：(株)JTBコーポレートセールス

□協力：　山形県飯豊町、川西町、福島県昭和村、千葉県館山市、　ほか

農都交流プロジェクト(2013年度)プログラムに参加した「地元関係者の声」「都市企業・大学生の声」

農都交流プログラム実施に携わった地元関係者の声

◇都市の企業との交流は、地域の農業者たちの「誇り」や「やる気」「元気」の復活にもつながる
◇知らない人と一緒に時間を過ごしたり、いろいろな話をするのは本当に楽しい！農都交流をやっていなかったら、こういう出会いはなかったはずだ
◇当地は都会の人々との交流とは無縁かと思っていたが、農都交流の手法をつかえば可能なのだと気付いた
◇すでに地域にある素材をつかえばよい、普段の自分たちの暮らしを見せればよい、ということなので、それほど無理なことではないと思った
◇都会の人と顔の見える関係がつくれれば、農業問題の解決にもつながる
◇一回限りのイベントではなく、継続性のある交流が実現できる。企業の研修で来た若い人が、今度はプライベートで来てくれるようになった

農山村での企業研修やモニターツアーなどに参加した企業・組織関係者や大学生などの声

■若い社員向けに、異空間・異年齢・異業種の人たちとの交流経験の場をつくることで、農村や里山を深い学びの場として活用できるのではないか。仕事の場をはなれたOFF-JTとしての効果も大きい(研修会社)
■農山村での目に見えないノウハウは、日常の仕事をする上でのヒントになる。農山村で日常行われているコミュニケーションは、都市で働く社員に新たな気付きをもたらす (機械メーカー)
■農村でのプログラムから学ぶことは多いが、とくに自らの「生き様」や自然環境に対する意識改善がメインになるような気がする(OA機器メーカー)
■仕事の基本は人とのつながりや助け合うことだと気づかせてくれる (機械メーカー)
■一緒に来た同期との共同作業からは、チームワークや時間管理など、仕事に直結する気づきが得られた(旅行会社新入社員)
■私は大学時代に日本に来たが、今回は新しい「日本」を感じることができた(旅行会社新入社員:中国人)
■企業の人財育成のほか、労働組合のレク活動などにもつかえる(企業コンサルタント)
■日本に来て10年以上たつが、田舎に来るのははじめて。村の人たちはフレンドリーだし、食べ物はおいしいし、最高。日本にふるさとができた。また来たい (日本企業のブラジル人従業員)

■農都交流推進チーム:農都交流のプログラムの実施・導入に向けた支援体制

①農山漁村地域: 農都交流のプログラムを実施して、都市との交流を創造したいと考えている地域のみなさん
→都市型企業等との交流を創出するための、地元での意識醸成や地域資源再評価、プログラムづくりなどをお手伝いします
②都市型企業・組織、大学など: 農山村地域で、自社(組織)の活動(人材育成、チームビルディング、CSRなど)展開を検討している企業や組織、大学生のみなさん
→貴社の課題やニーズに合致したプログラムを展開できる地域とのマッチングやプログラムづくりをお手伝いします

◎お問い合わせ: 農都交流プロジェクト推進事務局(JTBコーポレートセールス営業推進本部内)
TEL (03)5909-8439 メール noto@bwt.jtb.jp
担当:堀内、中村、石川

□3月6日(木)全国セミナー会場アクセス 会場:「大手町サンケイプラザ」 2階201号室
・東京メトロ(丸ノ内線、半蔵門線、千代田線、東西線)・都営三田線 大手町駅下車 A4・E1出口直結
http://www.s-plaza.com/access/index.html

２. ワークショップの実施

８月に開催した全国セミナーに参加した地域関係者を中心に、「農都交流」についてより深い理解を形成するとともに、実際に取り組むための方策を考える場として、ワークショップを開催した。

ワークショップの会場を、一早く農都交流活動に取り組み成果をあげている福島県飯豊町として、飯豊町の取り組みやプログラム等を体験する事例研修会としても実施した。

①ワークショップの実施

（実施概要）

平成２５年１０月２３日（水）～２４日（木）（２日間）
山形県飯豊町中津川地区

（参加者）

男性１７人、女性７人、計２４人

（参加地域）

山形県（新庄市、川西町、村山市、鮭川村）
福島県（山都町、昭和村）
岩手県（遠野市）、宮城県（丸森町）、静岡県（掛川市）、千葉県（館山市）、奈良県、滋賀県、その他
山形県（新庄市、川西町、村山市、鮭川村）

（プログラム）

◆１日目
- 開講式
- 基調講演
- フィールドワーク実習
- ワークショップ（グループワーク）
- 交流会

◆２日目
- ワークショップ（グループワーク）
- グループ発表会と討議・講評
- 閉講式

②ワークショップの行程

第１日目（10 月 23 日(水)）

◆集合（JR 赤湯駅又はホテルフォレストいいで（飯豊町中津川））

◆開講式（13：30）
・飯豊町からの挨拶
・オリエンテーション

◆午後（13：45～17：30 頃）
①基調講演「農の立場から「農都交流」を考える」
（講師）星　寛治氏（農業・詩人）
②フィールドワーク実習「地元を知る」
（講師）澁澤　寿一氏
③ワークショップ（グループワーク）
「都市と農村をつなぐ。農都交流のプログラムを考える」

◆夕食交流会
・飯豊町の食材や郷土料理を使った夕食と町民との交流

第２日目（10 月 24 日(木)）

◆午前（9：00～12：00）
①ワークショップ（グループワーク）
１日目の「都市と農村をつなぐ。農都交流のプログラムを考える」を引き続き実施
（昼食）

◆午後（12：30～14：00）
①グループ発表会
②意見交換

◆閉講式（14：00 頃）

◆解散

③ワークショップ参加者へのアンケート結果

Q1. 印象に残ったプログラム

№.回答者	印象に残ったもの	理由
01 山形県 女性	中津川展望台	中津川を見おろした時、改めて自然に囲まれた素晴らしい所だと感じました。中津川という場所が一生残っていてほしいと思った。
	草木塔、炭焼き小屋	山に囲まれた田畑の風景がとてもきれいでした。 きれいな水に、手入れされたところが、自然な風景ですごくいやされた。いやしやパワーをもらえるような気がした。
	2日目モデルプログラム 農家民宿の方との交流	プログラム制作中に、民宿のおかあさん方を交えることでたくさんアドバイスや、ポイントなどを教わることができてとても良かった。
02 福島県 男性	グループワーク②	自分の地域でのプログラム作りに対して、最近考えすぎて煮詰まってしまったので、異なる地域で異なる資源を活用するアイデアを考える、他人のアイデアを聞くことで自分の頭の中をリフレッシュさせることができた。
	交流会	いろんな地域の方と情報交換ができてよかった。また、牛がめちゃくちゃおいしかった！
03 静岡県 女性	中津川地区展望	静かなたたずまい。四方をきれいな山々に囲まれてステキでした。
	農家民宿拝見や地元の方々とのお話を聞けた	アットホームに迎える事の大切さ。
04 山形県 女性	2日目のワークショップ	他の地域のことを、様々な所から来た人で話し合うことが楽しかったし、いろんな意見があるのだなと勉強になりました。
05 静岡県 女性	基調講演	いのちを守る農を貫く、自分の代だけではなく、次の世代につないでいく事の大切さを知った。
	フィールドワーク	農家民宿のみなさんのいきいきと自信を持って語られる事に感動しました。
	グループワーク	自分の地元を他地区の方にプロデュースしていただき、自分の気づかない新たな発見ができたと思います。
06 宮城県 男性	展望台視察	展望台から集落を俯瞰することで、中津川地域の特性が理解できた。また、澁澤氏の丁寧な説明により、中津川の生活の歴史を知ることができた。
	グループワーク	私のグループは館山市を対象地域として研究を行った。自分の町で活かせる様な意見が多数あり、参考になった。
	農家民宿視察	実際にお宅を見せてもらうことで、農家民泊の具体的なイメージを掴むことができた。
07 千葉県 男性	農家民泊	実際に農家民泊の中を見学することができてよかった。
	古民家	町が管理して有効活用していることに感心。活用の幅の広さなど、この事業に最適でよいと思う。
	農家民泊のお母さんとの交流	農家民泊に対する思いが聞けてよいと思う。
08 山形県 女性	展望台	桃源郷、展望台から見下ろした村の景色は、まさしく桃源郷財産ですね。
	懇親会	農家民宿のお母さん達の生き生きとした笑顔に元気をもらいました。自信を持ってやっていますね。
	グループワーク	初めて会った人達と同じ問題で話し合い考えて行く過程の楽しさ、むずかしさ。
09 山形県 女性	フィールドワーク	展望台から地域全体が見わたせることに感動しました。また、農家民宿がまとまっていて、家の前に表示をするなど、工夫されていて勉強になりました。
	交流会	農家民宿を実際に行っている方々と直接お話ができ、勉強になりました。交流会の際もお母さん方が席をまわっている姿に、おもてなしの心を感じました。米沢牛（飯豊牛）おいしかったです。
	グループワーク	実際にプログラムの作り方を学ぶことができ、今後地元にもちかえって参考にしていきたいと思います。
10 奈良県 男性	農家民泊への訪問	初めて家の中まで入らせていただき、様子をうかがうことができました。
	夜の交流会	地元の方と話しをすることができました。金もうけにならないけど、人もうけができると渡部さん＠農家民宿から聞けました。
	石川さんと澁澤さんのお話し	盛りだくさんでしたが、理解しやすく良い勉強をさせていただきました。
12 福島県 男性	2日目のワークショップ	企画づくりからのフィードバック
	夜の交流会	米沢牛のBBQ

No.回答者	印象に残ったもの	理由
13 千葉県 男性	中津川展望台	来訪された方々に地域を知って頂く。 ※中津川:キレイだが何も無い。
	農家民宿	普通の家・生活の中に入ってもらう事の重要性。
	交流会	民宿のおかみさんの生の話。
14 静岡県 女性	展望台	紅葉が色づいて、山のグラデーションがステキでした。飯豊山が雲にかかって残念だった。
	農家古民家	家の周りの風景が古民家とマッチして、絵になるようだった。
	班によるグループワーク	実際に実現するようで、おもしろかった。
15 山形県 男性	フィールドワーク	里山の美しさと民宿が実際に見学できてよかった。
	基調講演	星先生の熱意に感動。
	グループワーク	他地域の方々から、さまざまなアイデアをいただき、視点・視野が広がった。
16 山形県 男性	農家民宿とその皆さん	初めての見学でしたので、想像以上の主体的なお話しをいただいたと思う。 またJTBの皆さんを深く信頼していること。
17 山形県 男性	中津川展望台	中津川集落のすばらしさを別の角度から見る事ができたのと、農村のすばらしさを自ら認識した。
	グループワーク	違う地域の方とく討議をしながら迫ることで、それぞれの地域の考え方で知る事ができ、勉強になった。
	交流会	中津川に暮らす方と話しをし、自分が暮らす地域との相違を知る事ができた。
18 滋賀県 男性	グループワーク	それぞれの地域の現状を聞きながらプランを検討していくことは楽しかった。
19 宮城県 男性	フィールドワーク	澁澤先生の講話が印象に残っている。
	交流会	ブッフェスタイルがよかった。また、地区の方も参加されたところがよかった。
	グループワーク	最初からグループ分けしているところ。早くコミュニケーションがとれてよかったと思う。
20 岩手県 女性	星先生のお話	地元の方が伝統の大切さに気付き、長らくそれを継承する活動をされていること。 地元の若者への結果(経過？)が出始めていること。
	中津川地域視察	移住者として東北で生活している身として、東北はどこも綺麗(四季の移ろいの明確さ)だと感じる。
21 福島県 男性	展望台	集落周辺が一望できる場所があるのが、素晴らしい。山都でも探してみます。
22 福島県 男性	古民家	かやぶき屋根が残っていたので。
23 千葉県 男性	交流センターのように利用されている萱ぶき古民家	生活習慣、風土、景観、環境のいぶきを古民家を通じて感じられた。
	プログラム作成のワークショップ交流会	固定観念にとらわれない新しい考え方や方法に「目からうろこ」の時があり、他地域の方々と知り合えたこと。
	農家民泊の見学と女将さん達のお話と交流	民家民宿の実態と、経営者の意識や考え方が理解できた。
24 東京都 男性	グループワーク	普段作成することのない研修プログラムを各地域の実状を把握しながら、実行するための想像を行う経験ができたことが良かった。特に講評いただいたお話に今後の参考となるご意見があり、とても身になったと思う。
	フィールドワーク	飯豊町さんが大切にしている地域の資源をどう活用するのか、また、農家民宿を拝見したことで、農家のお母さんとの距離が身近に感じることができたこと。
	交流会	地元の方との意見交換で、なぜ飯豊に町に人が魅せられているのか、お母さんのぬくもりやあたたかさなど感じることができたこと。

Q2. 飯豊町について感じたことと自地域と比べての感想

①施設や交流資源・地域資源について

No.	感じた事	感想
1	町全体でのもてなしを感じる。皆さんの協力性や、一体感にあたたかさがある。	やる気や、自信、協力性などがまだ一体化していないと思う。
3	初めて訪ねた山形ですが、とてもきれいな処だった。	同じような山間地。山のきれいさと比べるなら茶畑のきれいさを見て頂きたい。
4	きれいな自然で大勢利用できる施設があって良い。	施設があって良い。
5	すべてに感動！熱い思いのまま帰ります！	―
6	住民や人といった資源を最大限に活用していると感じた。	当地域も中津川地区と同様に高齢化等の問題を抱えているので、中津川の取り組みを参考にしたい。
7	古民家や農家民泊など農村に触れることのできる施設が充実していてよい。	自分の地域にはない資源が豊富。
8	中津川の自然はうらやましいほど素敵な所。それに古里公社のような施設なども有り、本当にいやしの空間が有る。	私の住む集落は街場に近く、中津川のような自然にはかなわないが、それとはちがう文化財などが有るのでその辺を売りにしたい。
9	豊かな自然と施設もきれいでよかった。	私の村も自然は豊かでありますが、施設としては温泉などがある。
10	豊かな自然がいっぱい。山の紅葉がきれい。遊休農地がきれいに保全されている。	―
11	この環境の元に育ったみなさんステキだった。	―
12	豊富な施設があり、多様な受入プログラムができる。	施設面では課題はあるが、ソフトは足りている部分もある。
13	白川ダムの活用 ・カヤック ・カヌー	・水が豊富
14	年中そのままの自然が素晴らしい。	お茶時期の忙しい時の受け入れが課題。
15	きれいに整備されている。	―
16	―	多種多様な資源がある訳ではないこと。
17	農家民宿をはじめ交流施設が充実している。地域資源の活用がうまい。	農家民宿取得までいかない。同じような資源はあるが、うまく活用できていない。
18	全国の農村地域にある古民家や風景であると感じた。	―
19	豊かな自然環境、田舎風な建物など、ストーリー性が語られると思う。	目玉となる(象徴となる)ものがない。
20	農村が無理なく出来ることをやっている。	いているが、遠野の場合は古民家集落を施設化して提供しているのがさびしい。
21	展望台で書いたように、ロケーションを大事にしていていいと思った。	―
22	山々に囲まれた大自然。	何とも言えません。
23	地域で共有してきちんと保全しているなぁと感心した。	方向や方針がばらばら。
24	豊かな自然	都会の人を引きつける魅力があると感じた。

②受入に対する住民の態度や組織体制

No.	感じた事	感想
1	皆さんが同じ気持ちでもてなそうと一生懸命なのがとても伝わる。楽しそう。	まだ大変とか、疲れそうとか、マイナスイメージの人、収入や利益だけをもとめる感じがある。
3	地域全体でソフトに受け入れてもらえている感じがした。	
4	ウェルカムな感じで良いなと思った。	外部から来た人に対しての意識が高い。
6	地域の方々が一体となって外部からのお客を受け入れていることが強く印象に残った。	当地域では、残念ながら農村地域特有の閉鎖性が目立つ。今後改善したい。
7	民泊のお母さんは非常に元気で意欲的。	自分の地域の農家のお母さんたちは、これから気運を高めることが必要。
8	農家民宿をやっている人達、役所地域の人達が一体となって支えているように思う。	まだまだ私達の所は外からの人達を受け入れという事に積極的になれない。
9	積極的に人と話をされる方ばかりで、親しみやすくあたたかさを感じた。	私の村にも地域の中に結（ゆい）が残っている地域があり、人もあたたかい。
10	あたたかく迎え入れてもらった。なぜこんなに支障なく受け入れられるのか、まだ不思議に思っている。	―
12	受入を楽しむ姿勢。	同じく楽しむ姿勢を大切にしている。
13	なめこ栽培、炭、そして農家民宿等新しい事へのチャレンジ精神及び必要性。	今後の課題（受け入れ組織）。
14	町全体で受け入れ体制ができている。	住民の理解が充分に得られていない。
15	おもてなしの気持ち、地域愛を強く感じた。	―
16	たいへん重要で、それがまたしっかり実行体制ができていること。ここがかざらないおもてなしを組織のルールとして、実行されていること。	―
17	中津川集落の受入れに対する意識の高さを感じた。また、自分達の暮らす地域をどうしていくかすごく考えている事がすばらしかった。	受入や地域の将来についての意識がまだまだ低い。
18	地域の将来に不安を感じておられることはよく分かった。	―
19	「受け入れ」という意識が発展して「おもてなし」になっている感じがする。	「宿泊」の部分がどうしても手薄な今次がしている。
20	交流会に参加して詳しく聞きたかった。	同じ山間地の農村として、同様の印象。
21	農泊の多さに代表されるように、よその人との交流をみなさん楽しんで生きがいにしているように思った。組織の役割分担もすばらしい。	交流する楽しみが浸透していないというか知られてないので、「めんどくさい」など、食わず嫌いの面がある。
22	とてもよく感じた。	何とも言えない。
23	素朴だが心がこもっている。	まだまだ及ばない。
24	おもてなしをすることの考え方が違うと感じた。	観光に対するおもてなしになっていると感じる。

③飯豊町（行政）の事業や各種支援施策

No.	感じた事	感想
1	前向きである。	前進している。
2	首長をはじめ、行政の積極姿勢が感じられた。	役場と協力体制はとれているが、もっと一体となって取り組んできたい。
3	慣れていらっしゃる様子で立派だった。	－
4	とても整っていると思った。	みなさん積極的だと思った。
6	行政・公社、実践者間での連携が非常にうまく行っていると感じた。	各関係者の連絡、調整が効率的に行われていない。より強固な連携を目指したい。
7	発展途上の事業ではあるが、町一丸となってとりくんでいると感じる。	一部のもので検討するのでなく、市を上げてとりくんでいくべき。
9	町長自らワークショップに参加し、フィールドワークにも一緒にまわっている姿に感激した。説明なども課長が行うなど体制がすばらしいと思った。	交流に向けた受け入れ体制の整備がまだこれからなので、勉強しながら進めていきたい。
13	公的機関の重要性	今後の課題
14	積極的に取り組んでいる。	特定の人だけに限られていて、体勢が整っていない。
16	立場によって、役割が決まっており、片寄らないこと。	－
17	行政と連携がうまくできていて、すごくやりやすいと感じた。	行政との連携については、同じようにできている。
18	行政やまちづくり業議会の方々が、どこまでされているか分からないが、首長が当事業の戦闘となってされていることは、充分伝わってきた。	－
19	すごく体制が整っていると思う。	体制はその状況での対応になっている。
20	行政と住民の連携具合の詳細が知りたかった。	住民の主体性から行政が動き始める際の状況など。
21	すばらしいと思った。そういった「空気」が流れているのが。	火付け役はやはり行政が担うべきだなと思うが、そこまでいっていないような。
22	すばらしい体制ができていると思う。	何とも言えない。
23	これしかないっていう感じ。	いろいろあって的がしぼれていない。

Q3.今日のワークショップについて

①ワークショップへの評価

・とても参考になった　20 人
・まあ参考になった　3 人
・わからない、何ともいえない　1 人
・無回答　1 人

（とても役に立った）

・ いろいろな地域の取り組み特徴を学ぶことができた。夜の交流会も、とても中津川のイメージアップになるような素晴らしいもてなしだった。
・ 表面と重複するが、他の参加者の意見・アイデアが参考になることが多かった。
・ 私たちはこれからどう取り組んで行ったらよいのか検討しているところ。参考になるよい御意見を聞かせて頂いた。
・ いろんな意見がある中、まとめて一つの考えにするのは、とても難しいことだなと感じたが、勉強になった。
・ 当町でも将来的に民宿を利用したグリーン・ツーリズムに取り組みたいと考えているので、実践者の方達が農家民宿を中心とした農村体験で「人」という資源を最大限に活用していることに感銘を受けた。
・ 農家民泊の方との交流により、思いを感じ取ることができる。 ・ 他地域の方々との交流により参考となる情報が得られた。
・ グループごとに話し合い作り上げて行く過程が初めてだったので、勉強になった。
・ プログラムの作り方や考え方が学べたこと。 ・ 企業の求めるものをしっかりと理解することの重要性が学べたこと。 ・ 実際に受け入れをされている方の話が聞けたこと。 ・ 他の地域の話が聞けたこと。
・ いろんな地域、立場の方と話ができた。自分の仕事に活かせるヒントをいただけた。
・ 自分達がやっている人とのつながりの思いがやってよかったなぁと確信することが出来た。
・ ブループワークでのノウハウや課題の共用。 ・ 企画づくりからの講師のフィードバック。
・ 農家民泊のおかみさんのお話し及び見学ができた。
・ 参加の皆さんの取組みも、たいへん参考になった。グループワークでは、各地の状況を知ることができ、情報交換ができた。
・ 農都交流についてそれぞれの地域の現状や考え方を知る事ができ、今後の参考になった。また、モニターツアー実施まで進めている地域が少ないと改めて認識。自分達のやっている事について農都交流に興味がある団体にフィードバックしたいと思った。
・ モヤモヤしていたことがあきらかになり、地域の方々に話ができそうな気になった。

（まあ役に立った）

・ 実際自分の地区で受け入れるよう段取りをグループで考えて、他県の人達とも話し合いができてよかった。農家民宿の中村さんも交えて参考になった。
・ 全国の地域でどのような活動をされているのか、勉強になった。様々な地域の方々とお話させてもらうことは、楽しかった。
・ 東北内はどこも課題や取組みは似たりよったり。東北外から来られた方がこれからすすめようとされていることが新鮮だった。

（何ともいえない）

・ 農家民泊がなくても、この農都交流のプログラムを作ることは可能ということであったが、やはり、宿泊については、農家民泊がメインで考えていかなければならないと感じるところがある。 地域の人で農家民泊を実践していこうという人、またコミュニティを発掘、促進していかないといけない。

Q4.「農都交流」について知りたいこと、聞きたいこと

No.	聞きたいこと、知りたいこと
2	まずは一回実施してみてから、こういう場でプログラムをブラッシュアップしていきたい。
3	・農家民泊を営むには、どのような許可が必要か。 ・茶農家は一年中管理仕事があり、忙しい職業で受け入れをしようとするにはなかなか大変な面がある。大変な農作業を手伝ってもらうメニューでも良いのか？
6	今回は農都交流に関する方々と情報交換ができて非常に参考になった。従来のように「都会」と「農村」を対立軸として捉えるのではなく、相互に補完できるものとして考えていきたい。
7	・農家民泊の許認可関係のマニュアルがあればよいと思う。
9	本村でも今後、農都交流を推進していきたいと考えている。今回のワークショップの経験を自分の地域にあてはめてもう一度資源の見直しから行ってみようと思った。
10	当県で地域づくりに関わる多くの人に本プロジェクトを受講していただきたい。 米沢牛いっぱい食べたが、これも貴重なお土産、思い出だ。
13	・法的な諸問題 ・旅行業法の関係 ・企業、大学等へのアプローチ方法 ・アフターフォローの対応に関して ・利用可能な補助金に関して 以記情報入手を希望
14	農家民宿のおかあさん達もみえてくれて、話がきけて良かった。
16	交流するためのアイテムは、多数ある方だと思う。宿泊部分が問題で、農家民宿と組むべく地域をしぼった勉強会をしていくつもりだ。今回感じたのは「主役は農家、地域の人」であり、意識が高く、まっすぐで、もてなしの心が重要だということ。
17	都市部企業や大学とつながりが少ないため、地元の受入体制を整備しても、どのようにつながっていけばよいかが難しい。都市部企業や大学と地元をつなげるため、様々なアドバイスや手助けを頂きたい。
19	まだまだ勉強不足ということもあるが、農都交流事業というのは、教育旅行の大人版というイメージが今のところ強いと感じる。「そこでしかできない」というものは何があるのか、この事業を実施していくことが何の目的でお互いにどう効果をもたらすのか、という大きなテーマを作る必要があると感じた。
21	先進地巡検のボリュームをもっと増やしてもいいのではないかと思う。
24	次回以降も参加したいと思った。ネットワークのつくり方は、これからの課題になると思う。

（関連資料）ワークショップ開催案内書

農林水産省　平成25年度都市農村共生・対流総合対策（広域ネットワーク推進対策）事業

農山漁村地域と都市型企業双方の課題を解決する新しい交流・連携のスタイル

農都交流プロジェクト2013

ワークショップ＆事例研修会 開催のご案内

都市型企業と農山漁村地域間の新しい「交流」「連携」を創造し、双方に利益やメリットを生み出すという「農都交流プロジェクト」。
次回の研修は、すでに農都交流プロジェクトに取り組み、都会の企業との関係創出を実践している山形県飯豊町において、ワークショップ形式で実施します。
有機農業家としても有名で、自らも農都交流の必要性を説く星寛治さんの講演（予定）や、各地で里山地域と企業を結ぶ活動を行っている澁澤寿一さんのフィールドワーク実習、ワークショップ参加者が自ら実践するプログラムづくりグループワークなどを予定しております。
ぜひ、ご参加ください。

◇日程：2013年10月23日（水）～24日（木）　2日間

※オプション農家民宿宿泊体験参加者は、25日（金）までの3日間となります

◇会場：山形県 飯豊町 中津川地区 「ホテルフォレストいいで」ほか

□主な内容とスケジュール

◎1日目：10月23日（水）

□集合場所　①JR奥羽本線「赤湯駅」改札口　11時30分（飯豊町の送迎車で会場まで移動します）
②山形県飯豊町中津川「ホテルフォレストいいで」　13時15分（自家用車等のご利用となります）
※いずれも、昼食は持参するか、お済ませになってご集合ください。

○開講式（13時30分開始予定）
○基調講演　「農の立場から農都交流を考える（仮）」　講師：星　寛治氏（農業・詩人）
○フィールドワーク実習　「地元を知る」　講師：澁澤寿一氏
○ワークショップ（グループワーク）「都市と農村をつなぐ、農都交流のプログラムをつくる」　指導：澁澤寿一氏、石川智康氏および中津川地域の人たち
（17時30分ごろ終了）
○交流会（夕食会：希望者のみの参加。事前申し込みが必要です。参加費5，000円）　：ワークショップ参加者や地元の人たちとの意見交換会です
※ホテル宿泊を希望される場合は、別途お申込みください

◎2日目：10月24日（木）　9時～

○グループワーク（2日目）　○グループ発表会と討議・講評
○昼食（ご希望の方は事前にお申し込みください　1,500円）
○閉講式　（14時ごろ終了。JR利用者は、町の車で赤湯駅までお送りします。15時30分ごろ解散予定）

【オプション】飯豊・中津川の農家民宿宿泊体験　10月24日宿泊
（希望者のみ。事前申し込みが必要です。1泊2食・農家での体験プログラムつき8,500円）
・中津川地区で農都交流プロジェクトに取り組んでいる農家民宿に宿泊し、その「魅力」を体感していただきます。
・宿泊いただく農家民宿は、事務局で割振りさせていただきます（1宿あたり3～4名程度、男女別を基本といたします）
・翌日は、中津川地区からJR赤湯駅まで町の車でお送りします（12時ごろ解散予定）

□本ワークショップ参加の対象の方は・・・
①「農都交流プロジェクト」に取り組みたいとお考えの農山漁村地域の皆様（自治体、各種団体、農林漁業従事者、観光関係者など）
②農山漁村地域との交流を通じた組織（企業・団体、大学など）の課題解決に関心のある都市型企業・組織、大学生の皆様

□参加費：研修会・ワークショップ参加費：無料
※ホテル宿泊費（1泊朝食付き・男女別相部屋7,500円）、交流会参加費（5,000円）2日目昼食（1,500円）および会場までの交通費等は、ご参加者負担となります）

□申し込み締め切り：10月11日（金）（ただし、先着順の受付とさせていただきます）

□参加申し込み方法
本書裏面の「申込書」にご記入の上、FAXで下記あてにお送りください。お申込みいただいた方には、後日、参加案内書をお送りします
FAX（03）5909－8068　ワークショップ担当デスクあて

□主催：　農都交流プロジェクト2013推進チーム　　**□企画・運営：（株）JTBコーポレートセールス**
□協力：　山形県飯豊町、飯豊町観光協会、中津川むらづくり協議会、中津川農家民宿組合、（株）みどりのふるさと公社　ほか

◎お問合せ・お申込み：「ワークショップ担当デスク」JTBコーポレートセールス第一事業部内（担当：田中、安藤、芳澤、多辺田）
TEL（03）5909－8480、　FAX（03）5909－8068
○プロジェクト全般のお問い合わせは・・・　農都交流プロジェクト推進事務局（JTBコーポレートセールス営業推進本部内）
TEL　(03)5909-8439　　メール　noto@bwt.jtb.jp担当：堀内、中村、石川

農都交流プロジェクト2013 ワークショップ＆事例研修会 in 飯豊

【農都交流プロジェクトとは】

都市と農山漁村の交流は、都市と農山漁村それぞれに住む人々がお互いの地域の魅力を分かち合い、理解を深めるために必要な取組であり、農林水産省の施策として進められています。

「農都交流プロジェクト」は、都市型企業・組織が、農山漁村地域で人材育成やCSR活動、福利厚生などの企業活動を実施することを契機として、農山漁村地域と都市型企業・組織双方が抱える様々な課題を解決する、都市と農村漁村の交流・連携の新しいスタイルです。
本プロジェクトの効果や意義。都市型企業・組織のニーズなどは、昨年度山形県飯豊町で実証されており、すでに今年度、実際に同町で社員研修などの企業活動を実施する企業があらわれております。

今回のワークショップは、農都交流プロジェクトを実践している飯豊町で行います。
まずはじめに、有機農業家としても有名で、自らも「農都交流」の重要性を説く、星寛治さんの基調講演（予定）。
そして、農山漁村と都市の人々が交流する際のスタートとして非常に重要な、地域のフィールドワークの実習。
それから、ワークショップ参加者全員による、グループワークを行います。

様々な課題を抱える地域の皆さんがひとつところに集まり、それら課題を農都交流でどう解決したらよいかについて、検討・討議・意見交換を行い、具体的なプログラムや企業活動の内容や、個々の地域や企業ごとの展開の方向性などを探ります。
もちろん、飯豐での事例の視察やプロジェクトに取り組み地元の人たちとの交流も可能ですので、農都交流のプログラムづくり・企業活動への応用などの参考にしていただけるものと考えます。

ぜひ、ご参加ください。

■農都交流プロジェクト2013：今後の予定

○農都交流プログラムの実証（モニタープログラム実施）・・・
（11月～12月：山形県飯豊町、川西町、福島県奥会津昭和村、千葉県館山市などで実施予定）
※参加ご希望の方は、プロジェクト推進事務局までお問い合わせください
○まちづくり・むらづくりに関心のある大学生のためのセミナー(12月予定：東京)
○農都交流全国研修会（次年度に向けた農都交流プログラム検討会）・・・・2014年2月（東京）
○「冬の里山暮らし楽校」(大学生対象）・・・・2014年2月下旬（於：山形県飯豊町） ※飯豊町との共催

■農都交流のプログラムの実施・導入に向けた支援体制

①農都交流のプログラムを実施し、都市との交流を創造したいと考えている地域に対して・・・・
→都市型企業等との交流を創出するための、地元での意識醸成や地域資源再評価、プログラムづくりなどをお手伝いします
②農山村地域で、自社（組織）の活動（人材育成、CSRなど）展開を検討している企業のみなさん・・・・
→貴社の課題やニーズに合致したプログラムを展開できる地域とのマッチングをお手伝いします

☆問合せ先 ・・・・農都交流プロジェクト推進事務局（JTBコーポレートセールス営業推進本部内）
TEL (03)5909-8439　　メール　noto@bwt.jtb.jp

農都交流プロジェクト：ワークショップ担当デスク行き FAX (03)5909－8068 (担当・田中、安藤、芳澤、多辺田)

農都交流ワークショップ＆事例研修会 in 飯豊　参加申込書

お名前：	所属先(会社名等)：
所属部署：	役職：
所属先住所：　〒	
所属先電話番号	FAX
メールアドレス　　@	
□ご集合地希望(いずれかにチェック)	(　)JR赤湯駅（11時30分)　(　)ホテルフォレストいいで（13時）
□23日交流会（夕食会）参加希望 （5,000円）	(　)参加する ・ (　)参加しない
□23日ホテル宿泊希望（朝食付き・男女別相部屋7,500円）	(　)宿泊する ・ (　)宿泊しない
□24日昼食（1,500円）	(　)申し込む ・ (　)申し込まない
□【オプション】24日中津川農家民宿宿泊体験（8,500円）	(　)希望する ・ (　)希望しない

第４章

まとめ

ー農都交流活動の拡大と促進に向けてー

1. 企業・大学等と農山漁村の交流の現状について

（1）交流の状況

・全国の農山漁村では都市部との交流活動への取組が進行しており、実際に交流プログラムを持って活動を展開している地域も多い。

・特に「子ども農山漁村交流プロジェクト」に代表されるように、学校教育と連携した取組は全国的にも広がっている。また都市部の生活者（ファミリーや少人数のグループ等）を対象に味覚狩りや収穫体験、自然体験などを提供するレジャー型の交流活動も活発になっている。市民農園や貸農園などの動きもこうした取組の一つといえる。

・一方で企業や大学等の組織的・継続的な受け入れはまだ広がっているとはいえない。以前から体育部やサークルの合宿、企業・組合の福利厚生活動（レジャー、保養施設等）などによる交流はあり現在も続いているが、こうした活動の多くは「場」としての農山漁村を利用するのみで、住民との交流や地域の自然・文化体験といったことは行われていないことが多い。

・近年、企業の社会貢献活動（ＣＳＲ活動）が注目される中で、里山や棚田、水辺環境、伝統芸能など農山漁村の自然や文化を保全するという観点から、企業が農山漁村を支援する動きが高まっており、その活動の中で企業が社員や関係者、取引先、顧客等とともに農山漁村を訪問し、植林や除雪、住民との交流活動は増えている。

・しかし研修活動などで特定の農山漁村を定期的・継続的に訪れる、といった交流活動は一部見られる程度で、まだ十分な広がりを見せてはいない状況にある。

（2）交流に対する意識

・農山漁村では、グリーン・ツーリズムを受け入れている実績から、企業や大学等との交流には前向きであり、定期的・継続的な交流を形成したいという意向は強い。こうした交流が住民の誇りや活力を高め、経済効果や街のにぎわい、活性化につながるということを意識・期待している。

・一方、企業側でも農山漁村での研修等の交流活動に関して、その意義や人材育成、組織強化（コミュニケーション力、チームビルディング等）への可能性・期待効果については認めており、農山漁村との交流についても関心を持っている。

2. 企業・大学等と農山漁村の交流の活発化に向けて（課題と取組の方向性）

（1）交流に向けての課題

・農山漁村では取組を進めたい意向が強いものの、交流関係が進まない理由として以下のような点があげられる。

1）企業・大学等に対する**受入プログラム**が分からない（学校教育との違いへの不安）

2）交流に有効とされる**農家民宿**が整っていないことへの不安

3）交流手法や交流相手となる企業に関する**情報**がない。また**相談相手**も分からない

4）企業等への**アプローチ方法**が分からない

・一方、企業側では、農都交流の考え方は理解されても現実の動きになっていない理由として、以下のような要因が指摘できる。

1）可能性や期待効果は理解できるが、現時点では**効果**が具体的に見えにくく、説明が難しい

2）交流相手となる農山漁村についての**情報が乏しい**（存在が見えない）

3）自社の**研修ニーズに即した情報**（施設・プログラム・体験等）が見えない

4）その地域を**選ぶ理由**や説明しやすい情報が入手しにくい（社内での合意や説得のため）

（2）今後の取組の考え方と方向性について

（考え方）

◆都市型企業と農山漁村の出会いや接点を創出・拡大する（まず存在を認知してもらう）

◆企業が理解しやすいCSR活動のパートナーとしてアプローチし、まず関係を形成する

◆農山漁村での交流型研修の成果や効果が「見える・説明できる」ツールを作成する

◆企業の研修等のニーズに対応した「オーダーメイドのプログラム」づくりを推進する

（方向性（例））

1）企業施設（ビルの公共スペース）などを利用した「農都交流マルシェ」の定期開催（週末など）

2）都市型企業の研修やCSR担当者を招いての「企業ニーズ勉強会」の開催

3）地域資源を活用したCSR活動のプログラム作成と企業へのプレゼン（コンベンションの実施）

4）関心を持つ企業とパートナー地域を決め一緒に研修プログラムを策定しトライアル実施

5）一年間の活動をまとめた「農都交流のススメ（仮称）」の出版（企業の効果が見える内容で構成）

6）企業ニーズの視点から地域の交流資源・プログラムを紹介・発信するWEBの立ち上げ

（一般論ではない地域情報の発信、企業側の関心喚起、選ぶ理由づくり）

7）農山漁村「おもてなしセンター」の検討

（→地域情報の提供やレンタサイクル等の機能を持ったビジターセンター構想を検討）